

大老に出づるはなし。今代蜀人に、馮唐可なるものあり、宗門に於て深く造入あり、石頭回禪師の與めに語録の序を撰し、江湖之れを沸傳す。其の詞に曰く、「五祖に、南堂を得たり、糞暴生瘡にして、勤遠を凌跨す。天適く地窄り、大隋に投老す。回道者鎚を運し石を攻むる手を以て、仰いで堅高を撃ち、力を出すこと既に巖にして、一鎚に便ち透る。歸つて釣魚山上に坐す。乖崖峭壁、其の師に十倍す。狼毒砒礪、口を下すべからず。其の徒、彦聞は更に警地ならず。餘毒を攻めて諸方に散施せんと要す。余後人の便宜を著けず、自ら僇作を取らんことを恐る。故に爲めに其の茶毒を標して以て來者に示す。縉雲野老序す。」と。

無垢居士、張九成、妙喜に參じて、大發明あり、而して宗眼明白なり。嘗て、老大を以てして、又大言すらく、「三乘十二分教、八萬四千餘卷も者の漢の面前に到つて、一唾を消せず。十信十住、十行十回向、等覺妙覺も、得て、四海に横行し、大唐國裡、日本國裡、新羅國裡に向つて、尿を抛ち、扇を撒じ、直に得たり。乾坤漆黑、日月奔忙、須彌峯、四海に波を揚げ、

馮唐可名は時行、巴縣の人、曾開等と和議の非を云ひ、秦檜の爲めに思まれて左遷せられ、後仕へず、縉雲先生と稱す。

南堂靜は五祖に嗣ぐ、佛鑑惠勲、佛眼清遠、大隋は四川にあり。

石頭は元と石工なり、故に鎚を運らし石を攻むと云ふ、一鎚に便ち透るとは、石火の迸發を見て大悟せしを云ふ、釣魚山は成都にあり、石上に巨人の跡あり、相傳ふ、異人其上に座して、釣を江中に垂ると、狼毒砒礪は、何れも、烈しき毒藥の名。

彦聞、正誤世譜禪燈世譜并會元等石頭の下に彦聞を擧げず。

著者は蓋し此を以て無垢の自贊とせるに似たり、京都龍寶の眞珠庵に、無垢の贊に係る

慢く絲竹を調べ、箇の小坐を打す。看よ、渠が面背は、大いに三家村裡の田庫兒に似たり。而も其の用處は、猶ほ烏風黒雨、天雷閃電、霹靂聲中、霹靂撥刺として、一大猛火を拖き去るが如し。咄、是れ甚の閑工事ぞ。蔣山の元は、慈明に嗣ぐ、元後に雪竇の雅を得たり、雅は慈覺の印を得たり、混融の然は實に、之に嗣ぐ。乾道の間、金陵の天禧に住す。時に、妙癡禪、保寧に住し、明大禪、蔣山に住す、明然を薄んず。其の流派、黃龍・楊岐の直下にあらざるを以てなり。嘗て與に庭爭す、然、口辯捷なり、明頗る所困に遭ふ。竟に癡禪を得て、之を解きぬ。然、器量人に過ぎたり、但だ出世甚だ早く、諸方の門戸を歴ずして宗眼混淆す、故に叢林多く此を以て薄んず。後南華に住し、五羊に滅す。行に臨んで脱灑なり、邦人沈香を積んで以て茶毘す、一段の殊勝、小々なるにあらず。余と然と生緣所を同じうす。恨むらくは其の慈範を識らざるを。最も其の慈覺を祭るの一文を愛す、甚だ佳なり。曰く、

「建炎三年我れ忽ち、顛怪し、幘頭を拈下し、腰帶を把斷して、夜師の庭に盜む、師の捉敗に遭ふ。既に一物なく、空しく禮三拜す。是れより

六祖の像あり、畫は陳就の筆にして、其贊語此文と全く同じ、然らば此文自像の贊にあらざること明かなり、無垢の書は、遺動にして奔放、毫も拘束なきこと全く其人となりの如し。

三乘十二分教、眞珠の贊、此前に「達磨西來より遇ひに大傳を相成じ、此老に到つて大にして又大」とあり。

一放眞珠の贊、一枚に作る。

巖峯は山の直立危高の貌、陸放翁の塗毒を拈ふの詩にも、巖々龍門とあり。

田庫兒は田舎兒と同じ。

霹靂撥刺は「びりばら」と讀み、猛火炎上の聲音なり、閑工事は「ひまつぶし」なり、眞珠の贊に是れの二字なし。

之に嗣ぐとは、慈覺の印に嗣法せるなり。

妙癡、世系前出。

退思し、恨小々ならず。人或は師を罵る。老いて不啣喙、了に能解なしと。我即ち首を擧げ、天を仰いで慶怪す。人或は師を譽む、道は佛祖に超え、量は滄海よりも廓かなりと。我れ即ち杖を持して、其の頭を撃つて碎く。如何ん若何ん。錯つて會するもの多し。敬んで薄奠を陳す。師咲つて婆娑たり。」

然に小師大驥なるものあり、淳熙の間、衢の靈曜に住す。時に朝廷方に役法を行ひ、二浙江淮の處、並に差定す。驥乃ち衢・婺・處三州の僧尼道士を糾率して、朝に造り之を免す。今天下の僧、此に由つて安を獲、國家の差役を爲さざるものは、蓋し驥の力ならん。後の圓頂方袍の者、當に自るところを知るべきのみ。驥後に天台の平田に住して卒す。

肯堂の充、止庵の顔に見ゆ、性識敏利にして、博く古今に達す、前後作る處の語句甚だ多し。僧の簡初居士尤侍郎を訪ふて、典午和尚語録の序を求むるを送る。其の詞に曰く、
「岷峨山下三角の虎、跳つて南方に入る誰れか敢て侮らん。湖潭の老準眼光を放ち、手を背にして暗に發す千金の弩、一箭的に中つて死し

① 明大師は、大惠に嗣法す、身長大腹、至る處衆を驚かす、故に皆大師大師と呼ぶ。大惠の青王に住するや、室中に喝を下すを許さず、而も大師入室毎に、振聲一喝して退く、大惠榜示して曰く、喝を下すものは罰錢一貫と、大師密に千錢を袖にして、高聲に連喝して出づ、大惠怒つて再び榜して曰く、喝を下すものは當に一堂に供養すべしと、大師則ち庫司に往き、告げて曰く、和尚金五兩を要すと、庫司信じて之を出す、師之を懐にして入り、高聲に一喝す、大惠大に驚き徐ろに問うて、之を知り、大咲して止む。(南宗元明僧寶傳卷三)
② 顛怪は發狂、機頭は頭巾。
③ 啣喙の反秀、不秀は愚なり、年寄りて愚に歸ると云ふことなり。

て復た活す。此れより人を咬むに齒を露さす。武寧山中の四十年、豈獨り江西の路を坐斷するのみならんや。徑山の塗毒一口に遭ひ、今に至るまで理あつて雪ぐことなきの處、卻つて弟子をして毘耶に往かしめ、居士を問訊して轉句を覓む、居士之を贊せんとして口即ち啞す。居士之を罵つて目即ち瞽す。贊罵及ばざるの處、請ふ渠が爲めに語録の序を作れ。」と。

公安の珠は川の人、亦止庵に嗣ぐ。人となり骨髄にして、人能く親疎するなし。乾道の間、道、湖湘に行はる。嘗て自贊あり、曰く、
① 月色照山容。泉聲落斷崖。水光山色裡。
一 塊爛枯柴。」

又曰く、
「老鶴入枯地。善解藏羽翮。點著背摩天。壺中天地窄。」
瑞巖の順は、水庵に嗣ぐ、葦堂と號す。初め池の梅山に在り、嘗て上堂あり、云く、
「今朝五月十五、一夜淋々として雨を下す。知らず林下の道人、相逢ふて作麼生か擧せん。擧し得て全きも、攔胸劈面に拳す。甚麼として此くの如くなる、精金若し爐冶を経ずんば、争でか光華徹

② 典午天游禪師は蜀の人、故に岷峨山下三角虎と云ふ、此送詞極めて妙、尤延之も斯かる文を見ては、序文を作るに骨が折れたであらう。
③ 湖潭老準は湛堂禪師、即ち典午の師。
④ 毘耶は維摩居士の住所。
⑤ けり離れたる自贊なり、奇體なる面相と云ふべし。
⑥ 水庵の一種和尚は佛智に嗣ぐ、前出。
⑦ 攔胸は胸ぐらをとりにしぼるの意に用ひしならん。

底に鮮かなるを得ん。」
又、

「十日入室、五日陸堂、千醜百拙、埋藏するに處なし。咄、相率めて饑湯に入る。」

後に台の瑞巖に終ふ。

萬壽の脩は閩の人、初め應庵に依り、後或庵に常の無錫に見え、雪の上方に出世し、雙塔に遷る。其の道未だ振はず、因に塗毒鑑上の能仁より持盃して吳門を過ぐ、衆善友小參を請ふ。脩引坐して云く、

「正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却す。直に得たり盡大地の人、扶持し起さざるを。是を以て曹溪路上に荆棘天に參り、少室峰前に闍鞞野に遍し。盧扁にあらすんば、膏肓の疾を起す能はず。孫吳にあらすんば、

殺活の機を全うする能はず。塗毒一搦すれば、聞くもの皆喪す。要津を把斷して、風骨旋生す。既にして是くの如きの宗師あらば、佛法は爛卻を怕れず。然も與麼なりと雖も、且く道へ、行に因つて臂を掉ひ、普く羣機を照すの一句、作麼生か道はん。三尺の靈光、摩竭の令、滿城の和氣、暖なること春の如し。」と。

① 萬壽の無説了悟禪師は、或庵師體に嗣ぐ、或庵は大亂擾と稱せられし人。

② 引座(坐は誤ならん)とは、他の尊宿の來訪する時、首座勸請して說法せしめ、住持は之が爲めに引座す、引座は、尊宿の陸座を道引する意。(象器筆垂説門)

③ 膏肓の疾は、不治の病なり、左傳に出づ。

④ 塗毒は奇相の人、故に風骨を云ふ。

⑤ 摩竭陀國雙林樹間に金波羅華を拈じて正命を下す。

下座す、塗毒手を握つて云く、「將に謂へり、或庵其の後人なしと、元來吾が姪の在るあり」と。此れより道、吳中に行はる。

⑥ 咲庵の悟は蘇の常熟の人、俗を棄て、出家す、初め無庵の全に見え、後密庵に烏巨に見ゆ。淳熙の間、衆に冷泉に首たり、専ら供養を以て心と爲す。時に歲大いに飢う、密庵持盃して未だ回らず、知事方來を約束す。悟山門に坐在して一例に放入す。密庵の回るに及んで、知事之を沮む。密庵悟を見て悦ばざるに似たり。因つて辭して云く、

「但得三院子如三椽大。盡レ情 供養 五湖僧。」

の句あり、時を逾えずして衢の祥符に住し、數利を歴董して、果して供養を以て務となす。

雁山の枯木元禪師は妙喜に嗣ぐ。示衆の頌に曰く、

「雁山枯木實頭禪。不レ在ニ尖新語句邊。」

背レ手 驀然拈得著。

長鯨 吞レ月 浪滔天。」

馮山の寶亦大慧に嗣ぐ、叢林の老成なり。晩に大瀉に居る、頰あり、云ふ、

「八十翁々 輓ニ繡毬。輓來輓去 不レ知レ休。如今輓向ニ千峰頂。」

坐看瀉山水粘牛。」

⑦ 靈隱の笑庵了悟禪師は、密庵の法嗣なり。

⑧ 約束は拈拵を止むるなり、放入は皆堂内へ投げ込むなり。

⑨ 尖新は斬新鮮と同じ。

空東山は福の人、初め艸堂の清に見え、後に妙喜に見ゆ。喜其の志氣超卓なるを見て、意に羅籠せんと欲す。頂相の贊を爲るに至つて、云く、

「慧空抓著吾痒處。吾嘗箇著他痛處。痛處痒處痛。」

不與二千聖同途。豈與衲僧共用。誰知掃帚竹裡無錢筒。

蒿枝叢內無梁棟。如今各自不知己。

一任畫出這般不啣啾底老凍膿。

從教挂向二壁角落頭。

使盡夜燒兜樓婆畢力迦沈水膠香作七代祖翁供。

然れども空志を乗つて渝らず、竟に艸堂に嗣ぐ、叢林の有識者輩皆之を仰羨す。空善く語句を作す、東山外集あり、世に行はる。

「東山送人只一句。纔擬欽承一喝出去。」

如今更向紙上求。大似蒼鷹擊孤兔。上人上人知不知。

端坐守之無了期。趁取秋風霜木落。泐潭百丈在江西。

と曰ふが如し。昇次山なるものあり、幽巖に住す、空の集を鏤めて江浙に流す。

庵堂道號は前輩例して無し、但だ居る所の處を以て之を呼ぶ。南嶽・青原・百丈・黃檗の如き是れなり。

①はうき笹の内に、錢筒は得難く、蒿のくさむらには、はりやむなさは見出せぬ。
②老凍膿は「はなれぢぢ」也。
③兜樓婆畢力迦は皆香のことなり。
④馬大師の舍利は泐潭の寶峰院に葬る、故に此處の泐潭は馬祖を指すなり。

り。庵堂は寶覺心禪師より生まれり。事を黃龍に謝して、晦堂に退去せしかば、人因つて以て之を稱す。自後靈源・死心・艸堂は皆其の高弟なり、故に遞に之に相法る。眞淨は同じく黃龍の門に出づ、故に亦雲庵を以て之を號す。覺範は乃ち雲庵の子なり、故に寂音甘露滅を以て自ら標す。大抵道號は名によつて之を召ぶものあり、生緣出處を以て之を號するものあり、工夫をなし契ふところあるによつて之を立つるものあり、所住道行によつて之を掲ぐるものあり、皆據るところあり、豈苟もすと云はんかや。今の兄弟、衆に入り來つて、未だ曾て夢にだも向上の一著子を見ず、早く已に各々道號を立つ、殊に其の本を原ねず。故に晴堂の遠禪師、因に結制の次で、知事に問うて云く、「今夏の俵扇多少ぞ。」知事曰く、「五百來柄。」遠曰く、「又五百所の庵を造らんとたり」と。蓋し禪和の庵なり、纔かに柄扇子を得ば、便ち箇の庵名を寫し定めんとなり、聞くもの大咲せざるなし。余の母氏、梵僧一月を頂いて之を懷中に投すと夢み、既に覺めて遂に育するを以て、因つて古月を以て自ら號し、安穩眠を以て之を呼ぶ、蓋し覺範の甘露滅に彷彿なり。二號は維摩寶積に出づる所、故に橘洲の曇公、余の爲めに古月の説を作つて云く、
「萬古の長空、一朝の風月、古人を慚愧し、模寫し得て成す。融禪未だ生ぜざるの夕、其の母夢に月を得、之を生子の祥となす。愧らくは今人模子を去却せざることを。融禪其の母に負かず、兼て古人を忘れず。古月を以て庵に名く、忝となさす」と。

①來は俗語の程と云ふ意なり。

塗毒老人も亦四句あり、云く、

「萬古長空月。何曾有二晦明。此心元一體。隨處燭二精靈。」

安定郡王、超然居士と號す、東京に在りし頃の時、意を空宗に留め、長靈卓禪師に見えて打發の處あり、後事に因つて江西に謫せられ、虜人の東京を陥るに及び、宗室の諸王多く二聖に隨つて北に陥る、居士此によつて免るゝを得たり。乃ち三衢に居り、馮侍郎至道并に雪堂行禪師と方外の友たり。衢の人佛乘に信向するを知るは、多く茲より始まれり。嘗て南嶽法輪の省行堂の記あり、最も高妙なり。又戒欲の文を選す、今此に録す。

① 趙令幹字は表之、超然居士と號す。
② 二聖は徽宗欽宗の二帝なり。
③ 省行堂は病僧寮なり。

「嘗て謂ふ、世人無始時來大苦惱あり、身心を惑亂して出離を求めず、大いに苦むところのものは淫欲の事なり。此の苦は能く精神を昏塞し性命を戕賊す、徳を障へ道を敗り、修行を妨廢す。毎に念じて私心潛散し、邪見動搖す。境縁の有無を以てせず、去處の淨穢を分たす、便ち顛倒を起し、恚に觸汗を行ふ。淨眼を以て之を觀るに、何の快樂かあらん。且つ情塵流轉し、慾火燒然たり。古より今に迨ぶまで、老幼貴賤其の害を被らざるなし。蓋し世人廣く財利を貪り、爵祿を追求す。如意の後、唯だ是れ色欲に耽著す。又細素の間百念灰冷なるも、惟だ此の一事のみ多く魔惱をなす。妖をなし、竊をなし、國を傾け、家を亡すに至る。或は善和の眷族も此によつて紛争し、或は久遠の夫婦も此によつて乖離す。之を信す、人

を壞するの根本、人を累すの深重、奸妬欺昧は名け言ふべからず。是の故に佛説に諸業は斷じ易きも、此の苦は除き難しと。苟も能く滅盡せば、道を成せざるなし。大抵男女の二根、初めより分別なし、邪妄發生して互に愛染を起し、結習牽纏す。遂に思想驚夢の苦み、蠱費破散の苦み、冤結離間の苦み、刑に遭ひ疾に染むの苦みあり。直に天亡に到るも終に未だ省悟せず。明かに知る穢汗は清淨の因にあらず、蛾の火に投じて自ら燦然を受くるが如し。如來の明誨に、若し淫を斷せずして聖道を求めんと欲せば、是の處あることなしと。當に知るべし、情愛は災難の端、狐媚は乃ち殺人の賊たるを。煩惱の因を起して地獄種に入り、人を悞り、徳を損し、身を喪ひ、命を失ふ。常に一切處に於て男女の相を泯絶し、究竟眞實ならば、誰か欲事を受けん。當に知るべし、革囊の臭穢は敗壞して總に白骨と成るを。念ふに、欲の境界は復た何の樂みかあらん。夢中にありと雖も又怖畏を生せん。普く願くば、一切の含靈具識、盡く厭捨を生ずること冤家の想の如くにして、當に遠離すべきなり。大火聚の如くにして近づくべからざるなり。毒蛇の來るが如くにして當に急に避くべきなり。果して能く一たび悔念を發せば、此の纏縛をして自然に消釋し、垢濁を變じて法身を獲、淫火を散じて智慧とならしめん。互に相教化し、同じく淨道を行じて、安樂行を證せよ。」

④ 傳に曰く、「盡く書を信すれば書無きに如かず」と、此の語詢に然り、

⑤ 傳は孟子なり。

何ぞや、儒家の經史は例して監本あつて證據す、語竟に已に定まる。吾が門の廣衆、鄙者は常に衆く、識者は常に寡し、故に多く意見を以て改易し、遂に先聖玄妙の旨を失ふ、哀まざるべけんや。紹興の間、四明の再び傳燈統要を開するが如き、乃ち雙溪の庸僧思鑑の幹縁なり。鑑は素學識なし、誠に故尊宿問答の言を謬ること甚だ多し、此れ眞に法門の大罪人なり。嗚呼、此の書は乃ち本朝楊文公大年が詔を奉じて、吳の僧、道原の爲めに校定せしもの、一旦庸妄の手に易へらる、水潦鶴と謂ふべきなり。叢林志を負ふの士、知らざるべからず。當に橘州・湖州の學の二本を以て正となすべきなり。

癡禪妙禪師は婺州の人、少うして教庠にあり、既に打發あり、即ち衣を更へて遍く當代の尊宿に見ゆ。久しく石室光佛子の會中にあり、杭の靈石に出世し、中竺の保寧に遷り、石室に嗣ぐ。石室の眞贊あり、曰く、「我也、不レ重ニ備禪。我也、不レ重ニ備道。但重一雙手眼。別得儂家恰好。」

然れども稟性疎逸にして檢なし、凡そ陸座小參に、必ず青原百家の事を先

①宋代開版の書すら、當時の人の遺憾此の如し、況んや後世の書をや、古書の貴ぶべきは、後世の書の誤を正すの益あるを以てなり。清朝の初めより、考證の學開け、古書を重んずること、洪璧も當ならず、從つて文字の研究も精緻に入れり、徳川氏三百年間、考證に従事するもの寥寥たり、徒らに理氣性命の學に沈醉して、考證を末技となす、吾が禪門も此風に洩れず、寛永より以來、禪籍の刊刻せらるるもの、古書を底本となし、異同を改訂するを爲さず、字句の出入、結構の疎密、誤謬極めて多し、鐵眼禪師の一切經を刻するや、日本に無比の善藏あるを聞却して、脱落誤謬の明藏を探りしが如きも、同一遺憾なり。②吳の僧道原、釋迦迦葉より、東土禪宗の傳説、諸祖の機縁

にす。隆興乾道の間、其の道盛に行はれ、妙喜と爭抗す。得法の子無學の忱、己庵の深あり、皆叢林の白眉なり、更に哀可庵あり、少年にして徑山に住す、大慧禪師示寂のとき、即ち其の後事を主る。時に妙術亦東堂に居る、卒に法衣拄杖を以て之に授けて曰く、

「三尺烏藤本現成。箇中毫髮不容情。佛魔凡聖俱撻殺。方顯金剛正眼睛。」

抄、後に嘉興の祥符に入滅す、預め時日を定め、親しく遺偈を書し、時官道俗に別れ、翛然として往く。

「王梵志 鞮已脫。一任橫拖倒拽。」

の句あり、眞に大自在を得たり。

保安の封は七閩の人、月庵に嗣ぐ。幼年にして衆に入り、赫々として聲あり。衆に紫金に主たりしより、楊の建隆に出世し、常の保安山に遷る、乃ち大參周公の命に赴くなり。封と大參と資縁あり、一時の小利と雖も、賓主相得たり。一居十五年に逾ゆ、諸方の大刹屢々招げとも往かず、然れども封、氣諸方を蓋ひ、口を開けば即ち貶刺し、間々私を容れず。淳熙の末、乃ち坐脫す。頰に曰く、「五十七年 幸自好。無端破戒作長老。如今掘地且活埋。」

を集めて、三十卷となす、詔して藏經に入る、景德傳燈錄是れなり。③叢林。僧は和合の義。和合僧の叢群せること、林の如きを以つて、僧坊を稱して叢林といふ。④前出、雲門下。⑤世語燈等皆寂室に作れり、蓋し石寂同音。⑥王梵志前出、西域の人、城外の土饑頭の句あり。⑦保安封、普燈續傳燈に傳あり。

既向二人前和亂掃。

又滑稽の語あり、後世の後生淡素を求めず、惟だ衣装を務むるを譏れり。今此に併せ記す。

「紡絲直綴毛段襖。打扮出來眞箇好。驀然問著祖師關。」

卻似東村王太嫂。呵々々。

圓通永建上人は柏庭と號す、久しく密庵に依り、一翁松源の輩と伍を爲す。後に郷人の老いて蔣山に居するを以て、永座元に充てられ、擧げて以て出世せしめ、長竿天禧に住す。密庵と衆に在つて隙あり、其れをして承嗣せしめず、竟に其の薙髮の師光晦庵の爲めに香を拈す。未だ幾くならずして信溪に遷り、遂に卒す。平日無一居士侍郎王概と厚善なり、唱酬の語あり、世に騰行す。但來處分曉ならず、兄弟亦之を信するものある少し。亦後輩幾間の破屋、所得を原せざるもの、爲めに深誠と爲すべし。故に松源嘗て頌あり、曰く、

「林下相逢知幾年。好因緣是惡因緣。雖然不受靈山記。」

常樂の和庵主は三衢の人、久しく密庵に依り、見處の穩實なること松源曹源の下にあらず。法華二十八品の頌あり、世に行はる。其の青山に在る時、密庵嘗て伽陀を以て之に戯れて曰く、

「一撈當機伎倆窮。故鄉回首爛柯峰。人間天上誰知否。」

會見曹溪正脈通。

然れども和一生辛苦、自ら福の渺きを知り、諸郡多く名山を以て招けども、俱に起たす、暮年居士汪公文子と龜嶺の南に卜築し、火種刀耕して恬然として自ら樂む。況味、老龐・丹霞に減せず、亦一代の奇事なり。

震山堂は昇州の人、初め丹霞の淳に見え、洞上の宗旨を明らむ。頌あり、云く、

「白雲深覆古寒巖。異艸靈華彩鳳銜。」

夜半天明日當午。騎牛背上著靴衫。」

又大瀉に至り、挿鐵井の頌を作つて曰く、

「盡道瀉山父子和。挿鐵猶自帶干戈。」

至レ今一片明如鏡。時見無風匝々波。」

後に艸堂に疎山に見え、師資道合し、因つて稟承す。初め百丈に居り、後黄龍に住し、其の道大いに振ふ。是れを龍峯の四世と爲すなり。

崇野堂は四明の人、久しく天童の宏智禪師に依り、大事の決せざるを以て竟に江西に上り、艸

- ① 火種刀耕は作務三昧にして日を過すなり。
- ② 龍巖と丹霞の天然。
- ③ 山堂道震禪師は草堂に嗣ぐ、草堂は晦堂の法子、黄龍派。
- ④ 丹霞子諱禪師は芙蓉に嗣ぐ、曹洞派。
- ⑤ 挿鐵の此頌野鐘亦載す、此因縁未だ詳かならず、蓋し此井に就き、瀉仰の商量ありしなり。
- ⑥ 野堂普崇禪師は善清禪師に嗣ぐ。
- ⑦ 宏智は洞下の宗匠。

と。主愆ちて以て對ふるなし。其の僧乃ち偈を書して去る、曰く、

① 江湖幾度氣吞牛。年老方知總是愁。

奉勸後生宜勉勵。看看種樹在前頭。

時に太守王公佐、聞き已つて、令を諸山に下し、「挂搭の僧人は揀擇するを得ざれ、所謂佛種子を斷すればなり」と。

金沙灘頭菩薩の像に、梵僧の拄杖を肩にし、獨體を挑げ、馬郎婦を回顧するの勢を畫き作すものあり、前後の贊するところ甚だ多し。唯だ四明の道全、大同と號するもの一贊、最も佳なり。其の詞に曰く、

② 等觀以慈。鈎牽以欲。以楔出楔。以毒攻毒。

三十二應。普門具足。只此一機。奪三千聖目。

雲鬢霧鬢。輕紗薄縠。大地橫陳。虛空摩觸。

靈骨鎖金。寒沙埋玉。驚鴻縹渺銀漢斜。缺月東西挂踈木。

時に余丹丘に在つて之を見る、余嘗て蛇の爲に足を畫いて云ふ、

③ 先以二欲鈎一牽。後令入二佛智。有利與二無利。元不離二行市。

黃金靈骨再挑來。試問汝今何面背。阿呵呵。囉々哩。

① 若き坊さん方も、けろけろして居るな、一根樹を種うることとは、目前に迫まれり。

② 馬郎婦は觀世音の化身、唐朝に出づ、今の觀音の像は、馬郎婦を描きしもの、頗る美人なり、馬氏の子迎へて婦となす、其夜疾と稱して別房に止まり、翌朝既に死す、瘞埋の後數日、再び墳を開けば、黃金鎖子骨を見るのみ。(右觀音持驗記による)

③ 此二句、願全體を收拾す、驚鴻は銀漢に掛り、缺月は疎木に掛り、獨體は拄杖に掛る、是れ同か、是れ別か。

④ 三箇之中那箇是。剔起眉毛一塞二耳觀。

圓通門戶堂々啓。吽々々。

隱山の璨和尚の贊に云く、

⑤ 「丰姿窈窕鬢欹斜。賺盡郎君一念法華。

一把骨頭挑去後。不知明月落誰家。」

璨は泉の法石に住す、木庵永の嗣なり。

⑥ 黃龍・楊岐の二宗は、皆石霜の慈明より出づ。初め黃龍の道大いに振

ひ、子孫之を世々にす。皆班々として馬大師の數に減せず、眞淨より四傳

して塗毒に至る。楊岐より再世にして老演を得、演海會に居り、南堂と

三佛とを得て以て其の門戸を大にす。故に今の天下は多くは楊岐の派なり。

⑦ 紹興の末、塗毒既に没す、而して雙徑の交代は乃ち育王の佛照禪師な

り。入院の初め首として巖主の塔頭に詣つて置祭す。義銛書記なるものあ

り、其の文を爲る、兄弟甚だ其の公を推す。因つて此に筆録し、後の學者

をして、祖宗の流派、其の自るあるを知らしむ。云く、

⑧ 「昔し慈明老人の黃龍・楊岐を得ること、猶ほ一體に左右の手あるが如

④ 阿呵呵「あはは、囉囉哩」ちんぼんじやらん。鐘の音也、

⑤ 三箇とは梵僧と獨體と馬郎婦となり。

⑥ 圓通門戶云云、此句は餘り言ひ過ぎの様なり、無くも、かな。

⑦ 吽々は「もう」「もう」、牛の鳴き聲。

⑧ 馬郎婦、人争ふて之を娶らんと欲す、婦曰く、三日にして法華全經を誦するもの、吾れ之に従はんと、馬氏の子之を能くす、便ち嫁す。

⑨ 木庵は懶非需の法嗣なり。

⑩ 世譜に黃龍は嗣法百二十八人を載せ、楊岐は僅かに十二人を載するのみ。

⑪ 南堂の靜、佛鑑、佛眼、佛果、皆五祖に嗣ぐ。

⑫ 塗毒は黃龍派の人。

⑬ 佛照德光は、大惠に嗣ぐ、楊岐派なり、大體大惠は、湛堂

準の會下に、習禪せし因縁に

し。子孫派出して各其の家を世々にす。典午は、湖潭に負かざるも、其の抄喜を敬すること猶ほ師を敬するが如きなり。徳光實に抄喜に嗣ぐ、惟だ、巖主典午に稟くるによつて、平生の出處同じからずと雖も、幸に今日交承のあるあり、道誼の在るところ、存没忘れ難し。要するに其の來源を委せば、皆慈明屋裡の人なり。若し巖主平日の道徳超邁、談辯軒豁にして、學者を鉗鎚するに、大手段あるは、江湖の間特に定論あり。茲に多語を事とし、以て圓識を涵さす。謹んで伊蒲を差めて大衆を率ひて翠塔に詣つて一奠す。巖主其れ之に臨め。」

① 曇橋州は川人にして、乃ち別峯印和尚の法弟なり、學問該博、名を天下に擅にす。本朝、覺範より後、獨り此の人を推すのみ。蜀の無爲山に住し、横逆に遭ふて江に來る、丞相史公其の學業を尊んで、擧げて以て明の杖錫に住せしむ。初め入院のとき、二相親しく送る、其の後、史公復た竹院を造り以て之を延く。凡そ質疑の事あれば、必ず問ふ、故に別峯の金山より雪竇に來りしとき、諸山の一疏、乃ち曇之を撰す。其の詞に曰く、

「雪竇に住せんか好し、翠峰に住せんか好し、老子當に自の胸中に斷すべし。法の爲めに來るや、牀座の爲めにするや。此の行殆んど人の意表に出づ、東山直下の四世に愧づるなし。之を望むに西

湖雪後の諸峯の如し。但だ心同く道同く出處同を得て、佛界魔界衆生界を問ふことを休めよ、新乳峯禪師、聲は吳越に飛び、價は琅玕よりも重し。海門國に住して一十有二年を逾え、瀾蘇の口を肆にして、八萬四千の偈を説く。山の屹々たるが如く、陣の堂々たるあり。其の滄波に據つて蛟龍を掩はんよりは、曷ぞ、蕙帳に依つて猿鶴を友とせざる。載ち伊蘭の世を念ひ、冀くは一たび優曇を現せんことを。計るに其れ師子の家は當に盡く其の種類を接すべし。歸來早に及んで我が同門を慰せよ。」

此の語、江湖競ひ傳ふ。時に自得の暉の交代せるあり、然れども曇賦性坦率にして拘檢を事とせず、竹院に在るの日、復た酒事を以て太守林侍郎に追はる。對を出して之に與へて、②「酒曇過界住無爲、而無所不爲」と曰ふに至つて(蓋し曇曾て無爲)、而も曇卒に對する能はず、復た林が流されて丹丘を過るが爲めに、二年にして寶奎に回る。一日沐浴更衣、史魏公を請じ、平日の行紀を叙し、談笑の中にして化す。闔城の士俗、皆之を送つて茶毘す、舍利を獲ること無數なり。

③ 唐の虞世南の通曆に、有る人問うて曰く、「梁の武帝、凶を夷げ、暴を剪り、克く帝業を成し、南面君臨すること五十餘歳、蓋し文武の道ありと云べし。心を釋典に留むるに至つて、桑門と行を比

① 蕙は香草なり、北山移文に出づ、同心の友は、伊れ蘭の如しと詩經に出づ。
② 曇は螺と音同じ、酒徳利なり、侮蔑の語。
③ 世南字は伯施、餘姚の人、多才多能、書に於て讀まざるなし、佛法金湯篇に此此談を載せて、帝王略論を引けり、其文も少しく出入あり。

し、萬乗の君を以て匹夫の善をなし、熏習保たず、危亡已に及ぶ、豈其れ非なる所か、何ぞ福謙の効なきや。先生答へて云く、「夫れ釋教は出世の津梁、絶塵の軌躅なり、方寸の間に運らして有無の表に超え、塵累既に盡き、攀縁已に息み、然して後解脱の門に入る。化俗の法に至つては、則ち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧あり、之を六波羅蜜となす、夫の仁義禮智信と亦何ぞ殊ならんや。蓋し修する所を以て因となし、報する處を果となす、人此の六行を修するに、皆多くは全からず、一も缺くるあらば、果も亦随つて減す。是を以て禮明は貌に醜にして心に慧あり、趙一は才に高うして位に下し、羅褒は福ありて義なく、原憲は貧にして道あり、其の同じからざるや斯くの如く懸絶す、興喪得失は、咸必ず之に由る。下士庸夫は比干の心を剖かるゝを見て、以爲らく、忠直必ずしも爲さざるなりと。偃王之國を亡すを聞いて、以爲らく、仁義法に足らざるなりと。若し然らば盜跖は杖を東陵に高らし、莊躋は車を西蜀に懸け、老いて厥の命を終ふ、良に貴ぶに足らんや。」又問うて曰く、「周の武帝二教を毀滅す、是か非か。」先生曰く、「非ならん。或ひと曰く、其の説を請ひ問ふ。先生曰く、「釋氏の法は則ち是れ空有滯ることなく、人我兼ね忘れ、生死を超出し、寂滅に歸す、此れ象外の談なり。老子の義は、則ち谷神死せず、玄牝長へに存す、長生久視、雲に騰り鶴に駕す、此れ區中の教なり。惡を止め、仁を尙び、殘に勝ち、殺を去るに至つては、並に王化に益あり、俗典に乖くなし。今常僧の律を犯し、道士の經を遺るゝを以て、便ち其の教棄つべし、其言絶つべしと謂はゞ、何ぞ 檣杵を責め

て堯を廢し、有苗を怨んで禹を黜くるに異ならんや。 瓠子の泛濫を見て、遠く河源を塞ぎ、崑崙の方隅を觀て、遠かに金燈を投じ、曾て潤下の徳の利あること、深く 變曜の用の其の功甚だ博きことゝを知らず。 井蛙の海を觀るや、所見に踳す。 輪回長夜の迷、自ら沈溺の苦を貽し、後學を疑悞す、良に痛むべきかな。」

雲居の如、雲中と號す、經を台の護國に受け、雲居に在ること最も久し。 上堂に云ふ、「山下は熱すること火の如く、山間は涼かなること秋に似たり。 山上に居するを得るもの、知んぬ是れ幾生に修す。」拄杖を卓して云く、「急に眼腦を著けよ。」

佛印示衆に云く、「袈裟を掛けて便ち閑を要むる勿れ、七條中に鐵圍山あり。 幾多の放逸縱横のもの、人身を失却す、瞬息の間。」と、

前輩の佛祖を賛する偈句并に自賛の語、各々矜式あり、今は例して多く杜撰なり。 自賛の如きも亦佛祖を賛するの語の如し、良に咲ふべきか、唯密庵最も其の體を得たり。 賛に云く、

「在家不讀書。 行脚不參禪。 隨流閑打閑。 掘地竟青天。」

如今老矣空追悔。 捻二人痛處一力加鞭。」

① 檣杵は堯の時の四凶の一人。
 ② 有苗は苗族にして方度に順はざる種族なり。
 ③ 瓠子は黄河の堤の一番きれ易き處、昔し黄河の泛濫は大抵瓠子にてあふれしものなり、地名。
 ④ 崑崙山は高さこと千二百里、日月隱顯を爲す處、金燈は今の火を取る丸き玻璃なり。
 ⑤ 變曜は、七曜變化の意ならん。又一本變曜に作る。
 ⑥ 閑打閑はひまに任せて大法螺吹いてさわぎたてる、又打哄にも作る。

塗毒も亦云ふ、

「眼瞎耳恒聾。鼯鼠技已窮。」

要見巖中主。

白雲千萬重。咄。

具眼者宜辨之。

佛心才、示衆に云ふ、

「三千の劍客、獨り莊周を許す。百萬の鳳毛、黠や自ら肯ふ。若しまた兩頭坐斷し、中間留めざるも、只だ是れ淨潔の毳子を打す。未だ向上の一竅を知らず、若し也た隨波逐浪、帶水拖泥ならば、己靈に孤負す。未だ頂門の正眼を具せず、總に不憚なる、又作麼生。人を驚すの浪に入らずんば、稱意の魚に逢ひ難し。」

又云く、

「寶劍失はず、虎舟刻せず、朝に羅浮に遊び、暮に檀特に歸る。若し本光の地、理合に斯くの如くなるべしと謂はゞ、正に是れ井に坐して天を觀、蠶を持して海を酌むなり。若し言發聲にあらず、色前物にあらずと云はゞ、唯だ宗に迷ふのみにあらず、亦乃ち旨を失ふ。宗明旨的、又作麼生。密に鴛鴦をとつて閑に繡ひ出す。從他人の自ら金針を覓むるを。」

長蘆の祖照禪師道和は、蒲陽の人、初め篋を負ふて京に至る、中貴あり、妾質の凡ならざるを

①鼯鼠に今は「いたち」と見れども、西漢書語には小狐の如く蝙蝠に似たり、肉翅あり、爪の長さ三尺とあれば別なり、「よぶすま」の様なるものなるべし。

②靈源清法嗣、黃龍下。

③法雲善本に嗣ぐ、本は圓照本に嗣ぐ、圓照は天衣に嗣ぐ、雲門下。

④中貴は宦官なり。

見て、度牒を以て之に與ふ。和受けす、自ら同學に謂つて曰く、「吾れは大丈夫なり、豈他黃門の下に出つべけんや、苟も一旦其の恩を受けば、則ち終身其の欄絆を被る。吾が佛幸に廣大の法門あり、又國家人を開發するの路あり、吾れ當に自ら勉勵すべし」と。因つて志を銳し、法華經を誦し、當年試經に於て得度し、大僧となり、徧く諸方に見え、後長蘆に住す、座下常に千衆に滿つ。真歇の了、丹霞の會下より來る、時に年尚ほ幼なり。和其の敏利を見て、衆に首たらしめ、後院を退いて之に與ふ、其の承嗣せんことを意ふ。衣を粘するに及び、乃ち云ふ、「法を丹霞の室に得て、衣を祖照の庭に傳ふ、恩深うして轉た無語、懷抱自ら分明」と。和樂ます、座を下れば其の衣を抵奪す。了此れより終身法衣を搭げず、竟に丹霞の淳に嗣ぐ。江湖の有識者、皆其の本を忘れざるを雅とするなり。

或庵の示衆に云ふ、

「紹興の初め、山野色力強壯、至る所に撥艸瞻風し、善知識を見ては、囊を懸け盃を掛け、節を撃ち關を叩き、浪を忘れ寢を廢せざるなく、寅夜に輟めす。又偉人哲匠の朝暮倦ます、苦口に點化錐筍するを得て、舊貨を收拾せんと尙へども、手に上るを得ず。况や今の際當つて、在處の叢林位に據るの禪師なるもの、但だ名字を占め、障堂入室、聊か不空を表す。師家の學者を見る、學者

①欄絆、俗に云ふ牽制を受くるなり。
②奇談なり、丹霞は曹洞下、祖照は雲門下、當時宗極既に混淆す、故に人又疑はざるなり。
③此示衆、親切なり。

の師家を見る、邪正分たず、互に相濕漏す。更に甚麼の一言半句を説いて、常情を超脱し、大不疑安樂の田地に到り、貫索を拈斷し、天下の人の鼻孔を穿たんや。大道相將つて滅す。問笈を負ひ簞を擔ふて、人の烟燭の下に寄るあり。多くは是れ飽暖溫和を求め、外典に游泳して、談柄に資せんことを圖るのみ。正宗下の事は口を杜ちて講せず。加之席を望利に尸り、福縁あつて上位に趨陪し、貴人に結識して以て外護となし、其の自便の計を得、遂に習ふて以て風を成し、遽に相倣し、非を知る者ある鮮きを致す。衆中本色の黃面老衲は、道果を證すと雖も、密に古風を追ひ、退歩潛藏し、分を守つて權貴に親近する能はず、弊を救ふに力なし、冷所に危坐し、袖手想見、其の荒寒薄伎、紛紜に點頭咨嗟するのみ。願くは具眼正因力量ある上人、努力猛省して、遠きを圖つて近を圖らず、己躬下に於て、西來不傳の妙を了辨し、凡聖不測の機を施設して、異日他時後輩の爲めに則となり、道路千里に鈴屨するの嘆あるを免るゝを得んかな。明眼の人前に胸臆を吐露す。亦望むらくは、痛く祖道の下衰を念じ、六合の外に踴躍高擧し、貴むらくは英衲子を得て、世に光明せば、千古萬古の下、金剛王の寶劍、凜々として墜ちざらんなり。」

一〇四

① 濕漏は糊塗と同じ「こまかし」なり。

② 鈴屨又俗傳にも作る、字典に行くこと正しからずと訓せり、「わらぢ」すれにて「ちんば」ひきもつて歩むを云ふ意ならん。

③ 眞定師王公、一日諸子を携へて院に入る、州坐して問ふ、大王會すや、王曰く、不會、州曰く、少より持齋して身已に老ゆ、人を見て禪床を下るに力なしと。(正宗發卷一抄)

東坡、京口に到る、佛印、江を渡つて謁見す。坡云く、①「趙州昔日禪床を下らず、金山甚によつて今日江を渡る。」佛印頷を以て答へて曰く、

「趙州昔日缺二謙光一。不レ下三禪牀二接二二王。爭似金山無量相。」

會文清公は、贛州の人、乃ち寶文侍郎天游の弟、宗門に於て甚だ進歩せり、②心聞の貴禪師と方外の友たり。嘗て世尊拈華の一頷あり、江湖多く之を賞す。頷に曰く、

「華枝拈起大家看。迦葉無端卻破顔。從レ此春光都漏泄。桃紅李白滿人間。」

又、心聞の像に贊して曰く、

「是心聞叟 寂然無聲。非心聞叟 儼然其形。

視レ之非無。聽レ之非有。能如是觀。非心聞叟。」

① 二王の二字、僧寶傳卷廿九佛印の章、趙に作る。

② 會文字は天游、大惠に參す。

③ 心聞は無示湛に嗣ぐ、湛は長靈卓に嗣ぐ、卓は靈源清に嗣ぐ、前龍下。

④ 擧は提擧なり。

婺州靈應の法淨講主、晩學に其の院事を擡せらるゝによつて、葉丞相に告げて、以て借援を求む。葉の回書に云く、

「專使より書を辱うす、懃々たり。知んぬ、公と余と先世の契あり、里巷桑梓を同じうす。之を同胞に詢ふて、公は是れ本分の講人なるを知る。靈應に住すると四十年、瓦礫の場を變じて輪奐と

なし、魚鼓の聲をして、歳晩に絶えざらしむ。謂つべし供養を寺庭に興すと。臂力を寶殿の崇成に出すの際、乃ち破戒の後學、貪癡の心を起すをなし、巧計をもつて攘奪せらる。怪しむ公の勝事を終開する能はざるを。若し世情を以て論じ來らば、鵲に巢あつて鳩之に居る、誠に處るに堪へ難し。若し公の分上を以て之を觀れば、身は我が有にあらす、萬法皆夢幻の如し。則ち靈應の道場も、亦豈公久居の活計ならんや。所以に古人道ふ、住すれば則ち孤鶴冷かに松頂に憩ち、去れば則ち片雲忽ち人間を過ぐ。去住灑然たり、何の拘礙かあらん。當に住すべきを要せば、而も未だ住せずんばあらす。方に知るべし、是れ去住底の人なるを。又況や一飲一啄も皆自ら前定あり。或は行き或は止まる、豈人爲ならんや。意必同異あることなかれ、若し此くの如きの境界、洞然明白なる能はずんば、則ち末後の一著、未だ拖泥帶水なるを免れず。此を去つて便ち好し青松の下、明窓の内安坐不動にして自家の大事因縁を了せば、誠に計を得たりとなす。若し一言を五馬に借らんと欲せば、山を挾んで海を超ゆるの難あり。能く萬法の皆空を悟れば、公に於て凡を變じて聖と成すの易きあり。其れ或は未だ然らずんば、決く請ふ包を腰にして、急に去つて、他の新婦底を防げ。」

①歳晩は蓋し淺季の世を云ふ。
②五馬は太守なり、漢の世、二千石の太守は驪馬を用ふ、然れども命を奉じて出でて使するときは、右驪を増して、五馬を用ふ、故に五馬を太守の美稱となす。杜甫の句に、人生五馬貴とあり。(佩文韻府馬の字下)
③急に去つては他の有力者の許に赴けの意ならん、新婦底は前段の晩學を指す。

混源の密は台の人、龜山の光狀元に嗣ぐ。俗素と貧なり、然も分を守つて自ら張大にせず。浮山より大舎に遷りしとき、道俗舎に由る、將に其の弟昆を見んとす、人從に戒約すらく、「其の家を過ぐる勿れ」と。唯だ親隨一二人を帶ぶるのみ。又曰く、「若し我兄を見ば、切に聲諾することなかれ、恐らくは他の村人を驚さん」と。其の分を顧みること此くの如し。頷あり、曰く、

「托迹來蓬屋、三椽種不深。如何微賤質、也解震雷音。」
種粟不生豆、拈鉛卻是金。
只因誤失脚、終不落沈吟。」

叢林皆其の識度高遠に服す。夫の張王李趙を許り稱するものと、豈同日にして語るべけんや。

故の監部甄公龍文、龍翔の疏を爲つて密公を請じて曰く、
「十三人洋嶼の關を透つて先づ上首となり、二千里黃梅の蓋を趨ふて密は汝が邊にあり。謂つべし正法克く公選に膺ると。某人、脚跟、峭措、眼腦玲瓏、紫箴を起して洪福の禪を説き、諸方山仰す。石橋を過ぎ七閩の蓋を持って萬禱雲隨す。唯六龍曾て中州に御す、故に二潮獨り勝利に誇る。次當つて補處す、宜しく公を放くことなかるべし。孤嶼にして兩峰に住し、話頭在在し、一句にして三要を涵す。衆目團々たり。」

①聲諾は支那人の揖と同時に發する聲、卑より尊に向ふ場合に之を用ふ、此處の諸の字、略と同じ。
②大惠洋嶼にありし時、大衆僅かに五十餘人、而も打發するもの十三人に上る、龜山の光は其首なり、故に光狀元と云ふ、密禪師を云はんとして、其師に及べるなり。
③峭措は俊秀なり。

後に旨を蒙つて西湖の淨慈に住す。

紹興の間、象田梵卿禪師は、秀の華亭錢氏の子なり、初め圓通の秀、投子の青に參じ、次に昭覺の總に見えて契あり。上堂に云ふ、

「春既に暮れ、落華紛々として紅雨を下す。南北の行人歸るや歸らずや。千林萬林杜宇鳴く。我れに家なし何れの處に歸らん。十方刹土奚ぞ相依らん。老夫箇の眞の消息あり。昨夜三更月池にあり。」

慈恩法師は、唐の尉遲將軍の子なり。初め年十歳にして能く戰策を造る、父之を賢とす、玄弇計を以て其の出家して以て教乘を大にせんことを欲し、密に其の造るところの戰策を竊み、小行者に教へて之を諷せしめ、携へて遲を訪ふ。遲口を極めて其の子の善く能く文を作ることを稱賞す。弇請ふて一看して乃ち曰く、「此の文は小行童も亦能く之を誦す」と。遲驚き呼び來つて之を誦せしむるに、果して一字を差へず。遲大いに怒る、「此の子古文を以て誑戲す」と、即ち之を誅せんと欲す。弇告げて曰く、「佛に救護衆生の説あり、若し君救はずんば吾は佛弟子にあらず、捨て、出家せしむべし、如何ん」と。遲從ふ、是を用つて弇師之を得て即ち大僧となす、衆能く及ぶものなし。嘗て對御講論し、賜ふに玉環を以てす。天子を見て更に禮を致さず、但出入に經論、酒食、婦女の三車ありて隨行す、^①宣公服して而も

①東林常總は黃龍の法子。

②尉遲敬德は唐の太宗の猛將なり。

③南山の道宣律師は律を發揮す。

疑ふ。法師も亦其の小乗を薄んず、而も其の神供の説を疑ふ。一日宣を訪ひ、特に天供を求む、語論終日にして其の供を見ず。法師歸つて後初めて至る。宣公之を責む、「非時にして到るは何ぞや」と。神告げて曰く、「懈怠するにあらざるなり、今日師大乘の菩薩と議論す、毫光徧界を單定し、竟に路の入るを得るなし」と。此れより更に心を傾けて之を敬す、故に知んぬ、大乘は小根の能く測る底に非ざるところなるを。

遷庵の演は閩の人、初め元枯木に見え、後妙喜に徑山に參す。最庵の印・同庵の璉と大慧の廣録三十卷を哀集し、盛に世に行はる。慧既に没して演復た出遊せず、一禱寒暑三十年を経、數々板首を董す。閩の帥趙汝愚、待つに福の秀峰を以てすれども堅臥して起たず、別峰、疏を作つて勸請す。

「幽蘭林下。豈無人而不レ芳。至寶道中。蓋具眼而初識。」

の句あり、一時其の節を高しとせざるなし、暮年竟に塗毒に常の華嚴に推し出さる。一坐十九年、法席盛に三吳に興る。其れ乃ち緣法地あるのみ。

④最庵の印は川の人、初め寂室に依り、後大慧に參じ、京口の鶴林に出世す。自贊に云く、「克體委羸。當行藜藿。袖手儼然。可知禮也。美惡猶來不自裁。參方分付俯觀也。」

⑤能仁の枯木祖元禪師、亦大惠に嗣ぐ。

⑥靈隱の最庵道印禪師は大惠の法嗣。

⑦梁陽郡王は趙然居士趙令矜ならん。

榮陽郡王初め嘉禾に居り、官職未だ登らず、家居零落す。時に誰庵の粹禪師報恩に住し、王と交遊す。凡そ疑ふところあれば、應對せざるなし。孝宗の即位に及び、王累りに大藩を開く、諸方の名利を以て多く粹に命じて之を主らしむ。晩に何山を請ふて功德寺と爲す、亦粹に命じて之に主たらしむ。特に紫服と圓悟禪師とを賜ふ。其の子孫亦大法の金湯たり、是れを互に大願力に乗じて來るものと謂ふなり。

國譯叢林盛事卷下終

予昔し衆に五峰に首たり、時に古月の融禪師、典賓の職に實つ。既に同事を叨にし、日に數々從遊し、山間水邊の樂を爲す。續いで業縁を以て來つて青山に居ること十年に逾ゆ。一日翩然として我を過ぎ、坐間妮々として前言往行を談じ、頗る老懷を清うす、徐ろに叢林盛事一篇を出す。皆命世の宗師と賢士大夫と酬酢更唱の語、誠に以て後學を警め、而も宗教を補ふべし。大率先師の武庫と相類す。殆く將に梓に鋟つて以て後世に惠まんとす、其の利豈博からずや、因つて筆を援いて以て後に題す。

①五峰は廬山にあり。

慶元己未

華藏遯庵宗演跋す

叢林盛事序

余剛身叢林僅三十年所見當代諸大老多矣厭世掩局丹丘中峰之下日與草木俱脫而陳習未忘瞌睡之餘信手抽骨董箱得江西瑩公所著羅湖野錄一帙及開卷首乃無著師之爲序引有曰前哲入道機緣禪書多不備載其過在當時英俊失於編次是無衛宗弘法之心而然遂致有見賢思齊者徒增嘆息細味其語誠可箴吾輩懶慢之病因追憶平日在衆目見耳聞前輩近世可行可錄之語共成一編書成將呈鄧峰佛照老人見而悅之謂侍僧道權曰此真吾門盛事也胡不刊木以傳後世因以叢林盛事目之知我罪我毋加哂焉

歲丁巳慶元三年仲秋日

道融序

叢林盛事綱目

叢林盛事 綱目

程大卿參黃龍
真淨居大愚
圓通秀
佛心才
典牛牧牛頌
應庵依圓悟
或庵號體亂擾
且庵仁
谷山且
宏智夢作一聯
富鄭公參投子
深己庵
自得暉
竹原庵主

佛印解東坡玉帶
承天宗馳書
芙蓉爲投子典座
張安道見楞伽
佛燈詢號罵天
木庵永
瞎堂爲圓悟晚子
白楊順
懶庵需
圓極岑
艸堂清
月堂昌
開善謙本傳
水庵號一糙

芙蓉答楊次公韓魏公
剖禪師作園頭
淨因成枯木
雪堂見父母
開福寧見妬
直道者參妙喜
密庵破沙盆
月庵果
一仕官題焦山
混源密上堂
慈航朴
龜山光
辨正堂
如無明

西禪淨此庵
尤延之
李德邁
本歸雲叢林佞篇
五臺艸衣文殊
廣教會
鑑映庵
圓通晏
安相國見晏
孝宗詔徑山潛
鐵庵一大
晁光祿迥
機簡堂
劍門分庵主
印別峰
孝宗遇佛照
洪首座

顏正庵
無著妙總
光佛照
懶庵樞
水墨觀音
三峰印
佛性參
吳居厚
二靈庵主
寶峰祥叉手
雪堂行
大圓智
證西林號老衲
伊庵權
塗毒與放翁厚
誰庵演
雪巢號村僧

全無庵
瓊首座
策塗毒
疎空谷
柏堂雅
自得暉作竹頌
開善謙頌古
陳彭公汝霖寫觀音經
仁宗帝見大覺
普慈聞
蘇子由
妙道道人
詢罵天與佛鑑問答
高宗孝宗贊彌勒
石窓恭
別峰雲
松源頌

叢林盛事 綱目

- | | | |
|--------|---------|----------|
| 墨廣南 | 雷庵正受 | 大慧與祖慶頌 |
| 晦庵光 | 圓悟初在講肆 | 士大夫序尊宿語 |
| 無垢居士 | 蔣山元 | 肯堂充 |
| 公安珠 | 瑞巖順 | 萬壽脩 |
| 咲庵悟 | 枯木元 | 瀉山寶 |
| 空東山 | 庵號道號 | 安定郡王作戒欲文 |
| 思鑑開傳燈錄 | 癡禪妙 | 保安封 |
| 圓通永建上人 | 常樂和山主 | 震山堂 |
| 崇野堂 | 龍丘法師慧仁 | 姑蘇尼祖勳 |
| 雪堂舒 | 金沙灘頭菩薩像 | 黃龍楊岐 |
| 曇栢洲 | 唐虞世南 | 雲居如 |
| 佛印示衆 | 前輩贊有式 | 佛心才示衆 |
| 長蘆祖照 | 或庵示衆 | 東坡到京口 |
| 曾文清公 | 婺州靈應講主 | 混源密頌 |
| 甄公龍文 | 象田梵卿 | 慈恩法師 |
| 遜庵演 | 最庵印 | 滎陽郡王 |

(目錄終)

叢林盛事卷上

宋沙門道融撰

程大卿參南禪師，南令看生緣話。法昌一日問曰：何不直下與伊勦絕去？南曰：也曾爲蛇畫足來，是伊自不瞥地。昌曰：和尚如何爲他？南曰：咬盡生薑，呷盡醋。昌曰：流俗阿師，又與麼去？南云：法昌作麼生？昌拈拂子便打。南云：者老漢得與麼無人情？昌休去。

佛印一日入室次，忽東坡至。印曰：此間無榻座，不及奉陪居士。坡云：暫借和尚四大爲榻座。印曰：山僧有一間居士若道得，即請坐。若道不得，即輸却玉帶。坡欣然曰：便請。印曰：居士適來道，借山僧四大爲榻座，只如山僧四大本空，五陰非有。居士向什麼處坐？坡擬議，不能加答。遂解玉帶，大咲而出。印却以雲山衲衣贈之。坡有偈云：百千燈作一燈光，盡是恒沙妙法王。是故東坡不敢惜，借君四大作禪床。又云：病骨難堪玉帶圍，鈍根仍落箭鋒機。會當乞食歌姬院，換得雲山舊衲衣。又云：此帶閱人如傳舍，流傳到此亦悠悠。錦袍錯落渾相稱，乞與祥狂老萬回。印以二偈謝云：石霜奪得裴休笏，三百年來衆口誇。爭似蘇公留玉帶，長和明月共無瑕。又云：荆山卞氏三朝獻，趙國相如萬死回。至寶只應天子用，因何留在小蓬萊。

楊次公提刑一日問芙蓉楷禪師曰：某與師相別幾年？楷曰：七年。楊云：者七年參禪耶？學道耶？楷曰：不打者鼓笛。楊曰：與麼則空遊山水，百無所成。楷曰：相別未久，善能高鑑。楊呵呵大咲。

韓魏公夏日來訪，楷出接，韓遂曰：「禁足不出，因甚破戒？」楷曰：「官不容針，私通車馬。」韓大喜之。真淨禪師居筠之大愚，太守錢公弋來遊，怪禪者驟多，衆以師有道德者奔隨而至。錢公即入其室，未有以奇之。翌日命齋師就席，俄有犬逸出屏帷間，師少避之。錢嘲曰：「大善知識，固能降龍伏虎，豈畏犬耶？」師應聲曰：「易伏假巖虎，難降護宅龍。」錢大喜，乃移居聖壽問道焉。

承天宗行脚時，爲泉州棲隱和尚，馳書到京師，李駙馬宅相看。都尉問曰：「因甚到京師？」宗曰：「專爲院門馳書。」尉曰：「適來悔伸一問。」宗曰：「都尉慣得其便，尉便喝。」宗曰：「放過一著。」尉云：「再犯不容。」宗曰：「三十年後，大有入舉在。」尉大咲。

與陽剖禪師初在大陽作園頭，種瓜次陽問：「甜瓜何時熟？」剖云：「即今熟了也。」陽云：「揀甜底摘來。」剖云：「摘來與什麼人喫？」陽云：「與不入園者喫。」剖云：「未審不入園者，還喫也無？」陽云：「汝還識伊麼？」剖云：「雖然不識，不得不與陽喫而去。」剖因臥病，陽問曰：「是身如幻泡，幻泡中成辨，若無箇泡幻，大事無由辨，若要大事辨，識取箇泡幻，作麼生？」剖云：「猶是者邊事。」陽云：「那邊事作麼生？」剖云：「匝地紅輪秀，海底不開華。」陽咲曰：「乃爾惺惺耶？」剖喝云：「將謂我忘却，後竟不起。」陽遂以直裰并偈付浮山遠，遠後接投子青，起洞上一宗耳。

法雲圓通秀禪師，初習華嚴，一日嘆曰：「吾觀善財始見文殊，復過百十城，事五十三善知識，又聞達磨西來，老盧南去，教外別傳，無上心印，吾豈止方偶，滯性相之宗耶？」因棄所業，東裝南遊，至無爲謁懷禪師，懷問曰：「座主講甚麼經？」秀曰：「粗習華嚴。」懷曰：「華嚴以何爲宗？」秀曰：「以法界爲宗。」懷曰：「法界以何爲宗？」秀曰：「以心爲宗。」懷曰：「心以何爲宗？」秀不能答。懷曰：「空蓋有差，天

地懸隔，汝當自肯，會有省發。」後十七日，聞僧舉白兆問報慈云：「情生智隔，想變體殊，情未生時如何？」慈云：「隔師於此大悟，直到方丈陳所得。」懷喜曰：「前後座主見吾者多，唯汝一人堪承大法。」吾宗異日在汝一人行矣。師遂服勤八年，懷推爲上首，出世舒之四面，後居東京法雲雲門正宗，由茲大闡。

芙蓉楷在投子作典座，子一日問：「厨司勾當不易，楷云：不敢。」子云：「煮粥耶？」楷云：「人力淘米著火，行者煮粥蒸飯。」子云：「汝作麼生？」楷云：「和尚慈悲放佗閑去，投子駭之。」

淨因成枯木問僧：「甚麼處人？」僧云：「西川。」成云：「幾時離鄉？」僧云：「前年三月。」成云：「未離本國。」一句作麼生道？僧云：「通身是口，難爲祇對。」成云：「猶是離家失業句。」僧無語。成打一拂子云：「枉蹈破許多艸鞋。」

鼓山佛心才禪師，閩人，初參死心，心問：「鄉里甚麼？」才云：「福州。」心云：「玄沙不出嶺，保壽不渡河，因甚到這裏？」才云：「因行不妨掉臂。」心云：「左手掉，右手掉，才放下兩手，掉出，心大喜，及許挂搭，已被侍僧所擠。」才到處，吵入叢林，和尚不得留之，於是心遂不納。云：「聞汝到處，吵入叢林，且往他處。」才云：「大善知識，眼在甚麼處？」拂袖而出，見照默，照默納之。未幾，遂契黃龍之道，照默以大法任之。

樂全先生張安道，慶曆中守滁州，至一僧舍，見梵夾齊整，怪取閱之，乃楞伽阿跋多羅寶經，恍然如獲舊物，細觀筆畫，手迹宛然，如自所書者，悲喜太息，從是悟入，嘗以經首四偈發明心要，東坡過南都，親見公說，且以錢三十萬託云：「印施於江淮間。」東坡親書，令佛印刻石金山。

故贈樂全詩有曰樂全居士樂於天維摩丈室空脩然之句。

雪堂行括蒼人少登上岸因見殺生者盡然有感遂棄家直抵泗州普照王寺出家以掃塔爲務既剃髮乃往舒之龍門依佛眼禪師爲侍者一袷度寒暑又且養蠹隣肩皆厭之每於殿堂僻處坐禪一日看玄沙築著脚指頭話大有發明佛眼乃川人上堂次因行侍立戲曰川僧嘉苴浙僧瀟灑諸人若也不信看取山僧侍者一衆大咲後見其父從大常博士出守三衢行時母老來歸闈者見其縵縷再三不與進行乃解衣與之纔通覆而其母聞之不覺仆地曰我兒猶在耶遂迎入宅堂逼令換衣澡浴及浴其衣盡換去只得著其新衣行泣曰我幾年與他爲眷屬豈一旦遽相捨耶卽抵吉祥寺作宿次日父母兄弟俱來報謁而行以黎明去矣竟不及見但見壁間留偈云莫嫌心似鐵自己尙爲冤掃盡門前雪方開火裡蓮萬般休更問一等是忘緣箇事相應處金剛種現前其母因憶師失明行再歸括蒼其父逼令出世南明遷衢之烏巨其道大振終於饒之薦福妙喜親爲撰語錄序流傳于世。

典牛和尚成都人姓鄭氏名天游本仕族初試郡庠復試梓州二處俱發游不敢承受竄名出關適山谷道人西還因見其風骨不凡論議超卓迺同舟而下竟往廬山剃髮不改舊名首參死心不契乃依湛堂於泐潭時妙喜爲侍者游居書司旦夕相從後往古藥山發明大事出世廬山小寶峰後居雲巖嘗和忠道者牧牛頌曰兩角指天四蹄踏地拽斷鼻圈牧甚屎屁初張無盡見其坦率不事事嘗慢之謂之顛游後妙喜持此頌獻之無盡撫几稱賞妙喜曰相公且道者頌是甚麼人做無盡曰此非彌勒大士安能發此言妙喜曰此乃前日顛游

所作無盡曰奇哉奇哉湛堂乃有此兒耶臨濟一宗其在此矣但將去質庫中典也典得一百貫商英肉眼不別幾乎蹉過此人遂燒香望雲巖悔過游後退雲巖過廬山棲賢長老見其堅老又且川氣不肯挂搭却云老人大大正是質庫裡典牛耶游聞之乃述偈而去曰質庫何曾解典牛只緣價重實難酬想君本領無多子爭解能容者一頭因庵于武寧四十年終身不出塗毒見之已九十三矣。

佛燈詢號罵天湖之安吉人嗣佛鑑住禾山日嘗上堂僧問如何是賓中賓答曰客路如天遠候門似海深如何是賓中主云長因送客遠憶得別家時如何是主中賓云相逢不下馬各自有前程如何是主中主云一朝權祖令誰是出頭人賓主還有向上事也無云向上問將來如何是向上事云大海若知足百川應倒流僧禮拜詢云此是詢上座三十年學得底開福寧道者歙州人參五祖演見其立作高上識趣超卓每當衆譽之復令入堂司同學妬之夜引寧山行道話因毆之傷其面目赴衆不得演聞之躬往省問曰聞汝被那一輩無禮何不至方丈雪屈聽老僧與汝趕逐寧竟不忍顯但云某自喫撲傷損不干他事演淚下曰吾忍力不如汝他日豈奈汝何後出世開福容五百衆將示寂預定日時坐化以大法授月庵果果陸沈衆底人莫能識唯圓悟知之後成禪其出世以頌送之曰歙山老人末後句的親傳四絕堂正令已行風凜凜斗間劍氣燭天光。

應庵初依蔣山圓悟會中與此庵元爲友及元住處之連雲華從虎丘隆會中來初到便令作首座未久令立僧元上堂云西河有師子連雲出虎兒親從猛虎窟中來文彩爪牙悉皆備

雖未及驚群，已有食牛志，痛念楊岐宗，令之如掃地，墜起鐵脊梁，與先師出氣，諸人還識麼？兩眼大如環，當頭立底是，後出世妙嚴，爲虎丘燒香，自後住十年，其道與妙喜相抗，李浩侍郎與師游久矣，嘗贊師真云：平生波波挈挈，纔得箇院子住，便打脫，而今又向幘子上出來，知他是死是活。

木庵永禪師，福州童聖者，小師，棄儒從釋，與法弟安分者爲友，同參懶庵，需於洋嶼，皆有大發明，因作水笕頌云：路繞懸崖萬仞頭，擔泉帶月幾時休，箇中撥轉通天竅，人自安閑水自流，妙喜見之曰：鼎需有此兒，楊岐法道未至寂寥，後住鼓山，江浙兄弟盡入嶺，松源無用息庵諸老皆在座下，後終於泉南。

直道者安州人，初參妙喜於回雁峰下，喜問曰：上座甚麼人，直云：安州人，喜曰：我聞爾安州人，會厮撲，是否，直便作相撲勢，喜曰：湖南人喫魚，湖北人著鯁，直打翻筋斗而出，喜曰：誰知冷灰有粒豆爆，竟辭喜過江浙，嘗與三衢陸式二人爲同行，後住金陵保寧，嗣妙喜法道大振，因留守陳丞相俊卿會諸山茶次，陳舉有句無句，如藤倚樹，令諸山批判，諸山皆尖言巧語，以取丞相之意，惟師最後頌曰：張打油，李打油，不打渾身，只打頭，丞相大喜，未幾遷住蔣山，或庵體和尚，台州黃巖人，賦性麤糙，遇事敢爲，受業上下號體亂擾，參此庵元於護國，一日在羅漢殿行道，忽聞庫下毆行者大叫一聲，豁然契悟，走見元，元曰：這十一郎，今日如病得汗，未幾充典客，後令化塗田，頌送之曰：豎亞頂門三隻眼，放開肘後驗人符，杖頭殺活無多子，截海須還大丈夫，爾後依晴堂，首衆于虎丘，出世蘇之覺報嗣，此庵法道大振，後遷焦山，郡

守會侍郎仲躬，常問道焉，師既入滅，以石硯寄會，會以偈弔云：翩翩隻履逐西風，一物渾無布袋中，留下陶泓將底用，老來無筆判虛空，體之辭世云：鐵樹開華，雄鷄生卵，七十二年，搖籃繩斷，可謂真臨濟種草也。

瞎堂遠，初住婺州金鱗山，復赴建上禪寂，請道過三衢，時雪堂行住烏巨，遠往講法，眷行與語奇之，且留遠旬，歎亟往郡中，見超然居士曰：師伯圓悟和尚，有晚子川遠，昨至山中，將赴建上，請惜其居處，山深地僻，居士能爲稟郡守，以一院留之，可乎，超然即白郡守，俾其住子湖定業禪寺，師受請，示衆云：甘分金鱗，困守株，誤他禪寂，遠招呼，中途再領賢侯命，定業難逃住子湖，未幾遷報恩，時妙喜居衡陽，聞師名，以法衣并偈寄曰：這川蕞苴，無真無假，一條白棒，佛來也打，更有一般長處，解向鉢盂裡走馬，後歷住諸山，奉詔居靈隱。

密庵傑禪師，閩人，初出嶺，至婺州智者，偶負喧次，有老宿問曰：上座此行何處去，曰：四明育王，見佛智和尚去，老宿云：世衰道喪，後生家行脚，例帶耳不帶眼，傑曰：何謂也，老宿云：今育王一千來衆，長老日逐接陪不暇，豈有工夫著實與汝輩發機，傑下淚曰：若如此，某今往何處，宿云：此去衢州，明果有華區頭，雖後生見識超卓，汝宜見之，傑依教往，明果依華，華家風難入，傑不憚辛苦，一日室中問：如何是正法眼，傑云：直甚破沙盆，華再追云：虛空消殞時如何，傑云：著穎脫華云：罪不重科，華即升堂告衆云：有大徹堂前崖崩石裂之句，傑依華四年，窮盡千聖命脈，母老歸鄉，華以偈送曰：大徹投機句，當陽廓頂門，相從經四載，微詰洞無痕，雖未付鉢袋，氣宇吞乾坤，却把正法眼，喚作破沙盆，此行將省覷，切忌便踪跟，吾有末後句，

待歸要汝遵後出世衢之烏巨學者雲擁上堂從來不唱脫空歌把火燒山拾田螺白斝樹頭魚產子急水灘頭鳥作巢皆謂在明果夜聞樵者歌因打破漆桶蓋師之密機莫測前後七住大利終于太白應庵之道藉若大行信之行脚見人固宜帶眼莫帶耳雖腳下有箇漢也須驗過始得不可以院子大小衆之多寡趁慣過時須知此事若不負志雖從釋迦老子肚裏過也只是箇屎橛可不擇哉

且庵仁和尙越之上虞人少習天台教初自括蒼隨雪堂過衢之烏巨因見雪堂普說曰今之兄弟做工夫正如習射先安其足從習其法後雖無心以久習故箭發皆中喝一喝云即今箭發也看看仁不覺身倒作避箭勢豁然大悟夏罷以母老歸鄉辭雪堂堂以偈送之曰儂老昔年窮事相脫履南游扣宗匠石頭路滑不辭勤腦後一槌曾兩當仁禪勁志許誰儂訪我蒼山白練州萬浪千波洶湧處果然呼喚不回頭西山積老期同住又說重尋越山路歸時應是歲華深趙州更有爐頭句仁從是歸梅山庵十六年後天童覺和尙出關至上虞夜宿其庵連榻與語大奇之既歸夏末不請首座主事白覺覺云我首座早晚來也乃遣侍者往越邀仁仁纔至即請首座寮衆訝之未幾令秉拂掛牌衆服膺後二年宏智入滅妙喜主後事兩班皆衣布唯仁不肯成服喜怪問之仁乃密啓其事妙喜曰元來是見雪堂來後住長蘆法席大振嘗頌臺山婆子話學者爭誦之曰開箇燈心阜角鋪日求升合度朝昏只因霖雨連綿久本利一空愁倚門顯謨呂公正已嘗問道於師既別覓偈師援筆贈曰君今親切到長蘆抖擻衣衫一物無此去逢人如借問但言風急浪華轟

白楊順和尙綿州人依佛照數年因普說舉傅大士心王銘曰水中鹽味色裏膠青決定是有不見其形豁然有省次日入室照問真佛住在甚麼順曰住在不定處照曰既是真佛因甚不定順曰若定即非真佛照頷之後居臨川其道大振上堂曰犬吠黃昏月風吹半夜燈屋頭貓捕鼠世上道嫌僧葦苴招人怪孤高舉世憎山林真實處凡事百無能任他霜雪上眉稜又曰水洗溪邊石風吹古殿簷於斯知落處可必在靈山

月庵果和尙信州鉛山人初見寧道者寧問曰上座鄉里曰信州受業甚麼處曰鉛山七寶寧曰還帶得寶來麼果展兩手寧震聲一喝便下參堂後見死心心舉雲門話墮語深徹法源然不忘開福後室中舉此話以頌示學者叢林盛誦曰萬仞龍門勢倚空懸崖撒手辨魚龍時人只看絲綸上不見蘆華對蓼紅

谷山且初參佛性泰和尙一日上堂舉趙州云臺山婆子已爲諸人勘破了也意作麼生良久云就樹撮將黃葉去入山推出白雲來且於言下釋然次日入室泰問前百丈不落因果因甚麼墮野狐身後百丈不昧因果因甚脫野狐身且曰好與一坑埋却泰徵之語皆不凡未幾令立僧名動一時妙喜南行且呈頌云異類中行世莫猜故教佛日暫雲霾度生悲願還無倦方作南安再出來妙喜賞之

懶庵需和尙依佛心才才居大乘需已首衆挂牌常問學者即心即佛因緣時妙喜庵于洋嶼需之友號光狀元者與需書云庵主手段與諸方別可來此少款需咲而不答光以計邀師飯需往赴之及門會妙喜開室需隨衆喜問曰僧問馬祖如何是佛祖云即心即佛作麼生

需下語喜話之曰汝見解如此敢妄爲人師也鳴鼓普請揭其平生所得力處排搗邪解需淚交頤不敢仰視默計之曰我之所得既所排搗西來不傳之旨豈止如此耶遂歸心弟子之列一日喜問曰內不放外不放入正恁麼時如何需擬答喜拈竹篋劈脊連打數下需豁然大悟曰和尚已多了也喜又打一下需作禮喜咲曰今日方知不汝欺遂以偈印曰身心一如身外無餘咄這瞎驢付與鼎雷自是名振叢林出世住泉之延福遷西禪普示衆云太虛挂劍用顯吾宗據坐禪威如何近傍縱具地回天轉電卷星飛底手段要且不堪勅敵而今莫有別休咎底麼出來相見稍涉遲回一槌直教粉碎喝一喝下座又至節示衆云二十五日已前羣陰消伏泥龍闔戶二十五日已後一陽來復鐵樹開花正當二十五日塵中醉客騎驢騎馬前街後巷遞相慶賀物外閑人衲被蒙頭圍爐打坐風蕭蕭雨蕭蕭冷湫湫誰管爾張先生李道士胡達磨又示衆云橫按鏝鏘虛張意氣穿開碧落徒費精神直饒不動神鋒坐致太平堯舜之君猶有化在

紹興間有一仕官至焦山題風月亭曰風來松頂清難立月到波心淡欲沈會得松風元物外始知江月似吾心前後觀者莫不稱賞唯月庵果行脚到此觀之曰詩好則好只是無眼目同坐者曰那裏是無眼目果曰小僧與伊改兩字則見眼目同坐曰改甚字果曰何不道會得松風非物外始知江月即吾心坐者大服信之做工夫眼開底人見所自是別況月庵平昔不曾習詩而能點化如此豈非龍王得一滴水能興雲起霧者耶兄弟家行脚當辨衣單下本分事不在攻外學久久眼開自然點出諸佛眼睛況世間文字乎

宏智禪師住圓通時夜夢作一聯云松徑蕭森窈窕門到時微月正黃昏自是數年杳不省此建炎間避虜一笠過東浙抵天童適主者退席師自舟中破曉入山恰是天明時節見松逕蕭森月蒙烟靄忽省向來夢中之句及歸且過雖不言名字而兄弟已有識者曰此乃長蘆長老也胡爲至此密報主事主事即申使府府喜不自勝蓋夜夢神人報云天童主人乃隰州古佛也即出帖差官至且過請之師堅不肯乃被且過兄弟硬昇歸方丈一住三十年洞上之宗由茲大振信人之住院緣法自定初不在苟求也

圓極峯和尚台之仙居人抱節孤高近世罕及久依雲居如和尚在書司十七載如遷寂一錫回浙依正堂辨於道場未幾令董座元出世雲之卞山乃石林先生講易之地辨意具此一瓣香爲拈出而峯竟嗣雲居如叢林多高之後歷董大利然福緣踰躐涉世多艱峯終不以介意平生施利未嘗經眼後退常之華藏道場而終焉有語錄二十卷行于世侍郎曾公仲躬爲序其首峯有贊長蘆且庵一贊云夜半推出日輪天明把住桂殼拈將四部州放在一粒粟奏無絃而非履霜之樂唱胡歌而非白雪之曲大冶鍛絕鑛之金痛鎚碎無瑕之珠東湖赤梢鯉魚生出金毛鐵犢

混源密和尚住紫籜上堂云雲山漠漠喬木森陰古屋耿耿叢林闐寂混源於此栽荆棘布蒺藜箇硬塞誰敢正眼覷著忽有箇漢向這裏轉得身吐得氣釀茶三五椀意在鏝頭邊其或未然青尖路險瞰空碧莫謂公公不道來又曰春日暖黃鶯鳴更聽斷崖流水聲春山疊翠款作步歸來烟島與誰爭且歸來一句作麼生舉曲肱拳作枕臥聽夕陽鐘

富鄭公弼參投子顛禪師。蓋弟子禮謹厚如初學者。後因張比部隱之以勢位陵衲子。公乃與之書曰。禪家者流。凡見說事枝蔓不徑捷者。謂之葛藤。往往鄙謂。遂著葛藤歌載于集中。弼因嘗思其所以。今試與隱之商確。不知何如。大抵俗士與僧人性識始無纖毫差別。其事蹟甚用不同處。且僧人自幼出家。早以看經日久。聞見皆是佛事。及剃髮後。結伴行脚。要到處便到。參禪問道之外。群衆見聞博約。又後無限耳目薰蒸。既熟。忽遇一明眼人。摘撥立便有箇見處。却將前後凡所見聞。自行證據。豈不明白暢快者哉。吾輩俗士。自幼小爲俗事浸漬。及長大。又娶妻養子。經營衣食。奔走仕宦。黃卷赤軸。未嘗入手。雖乘閑翫閱。只是資談柄而已。何嘗徹究其理。且士農工商。各爲業資。纏縛。知有禪林法席。假使欲去參問。何由去得。何處更有結伴遊山參禪問道及衆中博約之多乎。萬一明眼人。因事遭際。且無一味工夫。所聞能有多少。所得能有幾何。復無問之所見。所聞。自作證據。更不廣行探討。深加鑽仰。才得一言半句。殊未明了。便乃目視雲漢。鼻孔遼天。自謂我超佛越祖。千聖齊立下風。佛經禪冊。都不一顧。以避葛藤之誚。弼之愚見。深恐未然也。弼不學則已。若以辨身心學之。須是周旋委曲。深鈎遠索。透頂透底。徹骨徹髓。一切見成。光明潔淨。絕一點塵許凝翳。方敢下隱之隱。此之一事。不是小小。直要脫脚無始以來生死根本。與管生死底閻羅老子。作抵敵始得。不可取人閑言長語。以當參學。便自瞞去。祝祝弼啓。上比部執事。

艸堂清禪師見晦堂有所得。後遍游江湖。歸居廬山。去見真淨於泐潭。淨問甚麼處來。清曰。下江淨曰。將得什麼來。清曰。和尚要什麼。淨曰。一切盡要。清乃提起坐具。淨曰。閑家具。清曰。莫要急切底麼。淨曰。試拈出看。清據一坐具。便行。淨大駭之。後出世黃龍。上堂曰。昨日林間爲野客。今朝堂上住持人。放開捏聚。都由我。萬象之中。獨露身。越明年。卽退院事。結茆於寺之東隅。久之再住。上堂云。掩息茅堂。過六冬。心忘境寂。萬緣空。不知定業從何起。依舊令教繼祖宗。後居曹山疎山。殆居泐潭。已八十三矣。諸方麗鴻絕物之士。皆歸之。

慈航朴禪師。閩人。稟質脩黑。狀若應真。嗣無示謀。初住明之廬山。遷育王。未幾。被有力者移居海下。萬壽。應庵歸寂於天童。太守聞其風。命朴繼席。是夜太白者。舊皆夢有鐵羅漢。自舟中而歸。方丈有同衣者。上一啓曰。昔去鄧峰。而身輕一葉。我無視顏。今上長庚。而道重三山。人有喜色。快離佛髻。利涉鯨波。出幽谷而遷喬木。光乎此道。登東山而小魯邦。允也其時。自此以還。未知所措。一住二十二年。皇子魏王并史魏公。皆重其道德。淳熙初。孝宗皇帝親書太白名山四字。以錫之。朴住廬山。有上堂云。德山入門。便棒。臨濟入門。便喝。德山棒頭耳聾。臨濟喝下眼瞎。雖然一搦一擡。就中全生全殺。遂喝一喝。卓拄杖一下。敢問諸人。是生是殺。良久云。君子可八。

深己庵永和人。嗣妙癡禪。嘗有頌送之曰。送君還憶深師叔。兩眼依前聽轆轤。後住溫州報恩。有冬至小參云。一二三四五。五四三二一。寒風劈面來。離頭吹鬢栗。下座。余時在旦過中。聞其舉揚。便知其得雲門向上之旨。惜無人嗣續之。詔陽之道。遂湮沒於此人焉。月堂昌和尚。嗣妙湛。孤風嚴冷。學者罕得其門。而入。歷董名利。後終于南山淨慈。智門祚禪師法衣。傳下七世。昌旣沒。則無人可擔荷。遂留擔頭交割。今現存焉。故瞎堂遠爲起龕。有三十

載羅龍打鳳勞而無功，佛祖慧命如塗足油，雲門正宗如折機線之句，嗚呼可不悲哉！龜山光和尙參妙喜於洋嶼，時凡半年，無啓口處，一日入室，喜問曰：喫粥了也，洗鉢盂了也，去却藥忌，道將一句來，光曰：裂破喜莊色，曰：又來者裏說禪耶，師於言下大悟，遍體汗下，遂禮拜，喜以偈印曰：龜毛拈得啖哈哈，一擊萬重關鎖開，慶快平生，是今日，孰云千里賺吾來，光作投機頌云：當機一拶怒雷吼，驚起法身藏，北斗洪波浩渺浪滔天，拈得鼻孔失却口，喜見之曰：此正是禪中狀元也，因號爲光狀元。

自得陣和尙，在長蘆祖照席下，時一窩蜂發，衆皆散去，唯師與宗白頭者不動，私謂曰：參禪本爲敵生死，豈可因此難便逃避，況我色身又弱，若至中路也，則落他手，賊既至，見衆僧俱散，唯陣在堂中坐禪，爭以箭射之，俱不中，陣寂然不動，末後一箭從袖射透函櫃，陣方驚覺，因此成顛病，宗白頭者坐庫司，賊見遂縛之，欲射殺，傍有直歲僧再三近前，白賊乞代，賊曰：汝是他何眷屬，僧曰：此僧已參得禪了，他時可出來爲大善知識，教化衆生，我未曾參得，便死無緊要，故乞代之，賊奇其言，二人俱放，後宗居明之翠巖，其道大振，向所代命者亦來座下，宗常謂曰：此乃再生父母也，信之，參禪若具正因，般若豈無驗哉！

開善謙和尙，建寧人，初之京師，謁圓悟，無所省發，後隨妙喜庵于泉南，喜領徑山，謙亦侍行，未幾，喜令往長沙通紫巖居士張魏公書，謙自惟曰：我參禪二十年，迥無入處，更作此行，決定荒廢，意欲無行，友人竹原庵主宗元者，乃責曰：不可，在路參禪不得，吾與汝俱往，謙不得已而往，在路泣謂元曰：我一生參禪，殊無得力處，今又途路奔走，如何得相應去，元告之曰：但將諸方參得底，悟得底，圓悟妙喜與汝說得底，都不要理會，途中可替底事，我盡替得，爾只有五件事，替爾不得，爾自家祇當謙曰：甚五件事，願聞其說，元曰：著衣喫飯，屙屎送尿，拖箇死屍路上行，謙於言下大悟，不覺手舞足蹈，曰：非兄某甲如何得此田地，元乃曰：汝這回方可通紫巖書，吾當回矣，元即歸建上，謙到長沙，留半載，秦國夫人亦因師打發大事，乃還雙徑，妙喜策杖倚門而待，一見謙曰：建州子，這回別了也，只管怨老僧，自是爾時節未到，於是日益玄奧，後出世玄沙，示衆云：竺土大仙心，東西密相付，如何是密付底心，良久云：八月秋何處熱，又云：說佛法，誰惑盲聾，論性論心，自投窞陷，行棒行喝，倚勢欺人，瞬目揚眉，野狐精魅，總不與麼，大似揚聲止響，別有奇特，也是望空啓告，畢竟如何，白雲盡處是青山，行人更在青山外。

辨正堂嗣佛照，初道價不振，蓋初機罕識之渠，家風聲令，衆皆畏憚之，凡遇供日，但挂牌一次，主事有白之者，辨曰：我已挂牌了也，如何又虛費常住，金剛圈栗棘蓬，且又不曾吞透，恰要家常飯，主事不敢進語，後因贊達磨云：昇元殿前懶懶，洛陽峰畔乖張，皮髓傳成話，霸隻履無處埋藏，咦，不是一番寒徹底，爭得梅華撲鼻香，雪堂見之奇之，曰：先師猶有此人在，只消此贊，可以坐斷天下人舌頭，由是衲僧競奔湊，後居雪之道場山，衆盈五百。竹原庵主建寧人，出參妙喜得旨之後，竟歸桑梓，結茆輞，諸方累請不出，嘗垂語云：諸方爲人，皆是抽釘拔楔，解粘去縛，我這裏爲人，一味添釘添楔，加粘加縛，送向深潭裡，教爾自理會，又曰：參禪須透徹，這一著子始得悟了大法，不明者固有之，大法雖明，脚跟下紅線不斷。

者比比皆是。諸方聞恁麼道，盡罵老僧云：「既是大法明了，又安得脚跟下紅線不斷也？怪他不得，爲渠欠這一解在。」儘教他疑著，又曰：「者一些子，恰如撞著殺人漢，相似。倘若不殺他，他便殺爾，奇哉！大丈夫見解如此也。」

水庵一和尚，婺之東陽人，外行獷糙。叢林謂之一糙，久參月庵果，果嘗參雲門話墮，詰之，一日下語云：「靈山受記，須是和尙始得。」又嘗頌曰：「二八佳人美態嬌，繡衣輕整暗香飄，偷身華圃徐徐立，引得黃鸝下柳條。」月庵器之，後與同列不和，遭人暗計擠之，月庵信其言，攜出院，臨行書偈譏之曰：「稽首月庵藏裏佛，黃金妙相實堪觀，白面夜叉七八箇，推轉如珠走玉盤。」後出世台之慈雲，爲佛智嗣，蓋從參政錢公之請，錢公於佛智爲俗門弟，昆然叢林中亦有短之者，室中常以西天胡子因甚無髭鬚話，驗學者。

如無明三衢人，參雲蓋智，悟汾陽十智同真話，凡說禪，便說「十智同真，叢林號爲如十智，後住道場，水庵圓極皆依之，故圓極嘗贊之曰：『生鐵面皮難湊泊，等閑舉步動乾坤，戲拈十智同真話，不負黃龍嫡骨孫。』」後終思溪圓覺，其塔存焉。

西禪淨此庵，參妙喜有大發明，宗眼明白，嘗示衆云：「善鬪者不顧其首，善戰者必獲其功，其功既獲，坐致太平，太平既致，高枕無憂，罷拈三尺劍，休弄一帳弓，歸馬于華山之陽，放牛于桃林之野，風以時，雨以時，漁人歌，樵人舞，然雖與麼堯舜之君，猶有化在，爭似乾坤收不得堯舜不知名，渾家不管興亡事，偏解和雲占洞庭。」又曰：「閉却口時時說，截斷舌無間歇，最奇絕眼中屑，既是奇絕，爲什麼却成眼中屑，屑屑屑時無可了，玄玄玄處亦須呵。」

顏正庵川人，久參圓悟，一日商確古今，師每當仁不讓，悟喝云：「汝參禪不求正悟，只管信口亂道，顏不覺汗下，歸堂坐禪，徹旦不寐，忽然猛省，走見圓悟，議論鋒發，略無礙滯，悟即點頭，顏曰：「昨日亦如是，祇對和尚爲甚不肯，今日亦如是，又却點頭，悟叱之曰：『癡漢，爾昨日難忘想心也。』」顏作禮云：「元來釋迦老子無神通也。」悟歸蜀後，依妙喜徹，證向上巴鼻，首衆於徑山，名播叢林，後出世卞山，次居東林，嘗示衆云：「祖師巴鼻，列聖鉗鎚，驅耕夫牛，奪飢人食，眈眈虎視，凜凜全威，如商君法，如孫武令，有犯有死，除非久戰沙場，具七四機，望風決勝，知進退存亡者，聊通一線，若是己眼未開，以蝦爲目者，只管逐隊喫飯，無自在分，如今莫有定奪底衲僧麼？」山僧性命盡在諸人手裏，又曰：「法無定相，遇物斯形，事無固必，功成不宰，有時風高，寥廓不可得而親疎，有時退己屈他，不可得而玩狎，恁麼則易，不恁麼則難，世法佛法俱成，戲論，須知老僧不在者裏，且道在甚麼處？」披衲側立千峰外，引水澆蔬五老前。

全無庵姑蘇人，治父川金剛小師，久依育王佛智，與慈覺真爲友，商確古今無不明，唯室中機緣不發，晝夜哀泣不睡，未嘗與人說世間話，如是者累年，一日在室中擒住問曰：「有句無句，如藤倚樹，道道全擬開口，智擘面一拳，豁然大悟，連叫數聲，屈屈智便放，有頌曰：『鼓笛轟轟祖半肩，龍樓香噴益州船，有時著脚弄明月，踏破五湖波底天，出世遍匡大刹，終于虎丘。』」尤延之侍郎於宗門甚注意，初自郎中出守台州，朝覲次孝宗，忽問曰：「卿去南台地，里圖中有何勝槩？」尤奏曰：「國清萬年，孝宗大喜，又戲問曰：「朕聞方廣有五百應真大士，元來是強人，忽然一時出現，卿以何法治之？」尤不覺墜起拳頭云：「臣有金剛王寶劍，孝宗喜動天顏，尤既至

台以寬慈御民，民甚愛之。但南台早滂易得，尤嘗作詩曰：來雨一朝成汗漫，纔晴三日人憂乾。向來盡道天難作，天到台州分外難。然黃堂政暇多過報恩，與佛照論道。佛照後赴冷泉之請，繼請伊庵權住持，衆常四五百。

無著道人妙總，蘇太州之孤女，徧參諸大老。後謁妙喜于徑山，因上堂舉石頭道：「恁麼也不得，不恁麼也不得，恁麼總不得。」時馮濟川侍郎在座下，忽有省趨方丈，告曰：「和尚舉石頭話，揖會也。」喜曰：「侍郎作麼生會？」馮云：「恁麼也不得，蘇嚕婆婆訶，不恁麼也不得，悉喇婆婆訶，恁麼不恁麼總不得。」蘇嚕悉利娑婆訶，適總自外至，喜舉馮語似之。總咲曰：「向來郭象注莊子，然有識者謂莊子注郭象，喜私識之。」次日入室，喜問云：「古德不出門，因甚在莊上喫糲？」總云：「和尚放某過，即向和尚道：喜曰：我放過爾，試道看。」總云：「某甲放和尚過，喜曰：爭奈油糲何？」總喝一喝而出，乃作投機頌曰：「驀然撞著鼻頭，伎倆水消瓦解，達磨何必西來，二祖枉費三拜。」更問如何若何，一隊艸賊大敗，喜搥鼓印證曰：「汝既悟得祖師意，一刀兩段直下了，臨機一一任天真，世出世間無缺少，我作此偈爲證明。」四聖六凡盡驚擾，休驚擾，碧眼胡僧猶未曉。

瓊首座四明人，徧見諸老，留象骨四十年，不出山，唯占禪悅寮一板頭，冬夏一衲，人莫能親疎之。侍鐵庵闍帥趙汝愚，仰其風，累虛大利，請其出，堅臥不應。然須欲一見，託鐵庵以計誘其入府，大作供養，面囑其受請。瓊秉志不渝，趙公愈敬，乃以詩送歸山云：「萬仞峰頭雪作堆，一枝寒木倚巖隈，青青不改四時操，任待春風吹不回。」府判以下幕職皆賀，其光大法門不少。

與夫今之持書竟院住者，不可同日語之也。

李侍郎德邁，守南台日，以鴻福萬年薦善，請拙庵伊庵鐵庵三大老出世，一時龍象駢集。後以國清請密庵，密庵當時住衢之烏巨，是皆專爲應庵之故。及開堂，各有所稟，信之。此事各在當人，故不可以人情取悅士大夫也。後李公歸番陽，閑居日，嘗語人曰：「浩平生雖在仕路，家貧不足以自給，無資可以濟人，唯在丹丘請得三員善智識出世，續佛慧命，其功德不可思議哉。」

佛照光初在仰山瓊野庵會中，受台州鴻福之命，道游三衢，抵烏巨，密庵以偈送之，以謂必承應庵也。偈曰：「瞎驢生得瞎驢兒，齷齪聲名徹四維，更把少林無孔笛，逢人應是逆風吹。」及抵婺之寶林，時月庵弟子遠和尚住，復舉雲門話，墮語令判之，意謂其承嗣月庵也。及末丹丘開堂，恰嗣妙喜，叢林皆短之，以謂妙喜門戶高大而然，初不知冤有頭債有主也。知亭祖殿歷住鴻仰二山，佛照光嘗爲其首座，與超萬容爲昆仲，超嚕菴也，博通經史，與行菴珪雲臥覺爲友，天童宏智目爲超萬卷了堂十世祖也，堂陵虛谷弟子也，慧明之孫也，淡居集。

塗毒和尚住常之華藏，一日忽頭痛如刀劈，連三日不已，門弟子以謂其生腦癰矣，既痛止，乃見伏犀骨聳起如插，不旬日，詔下領雙徑，蓋人晚成果有換骨之兆，將行，有雪林慈光者，久依佛智，歲晚雙磬寓止慧山，以三偈送上五峰，其一曰：「塗毒離微及盡，典牛佛祖俱亡，吹捧天書南去，叢林千古耿光。」二曰：「台嶺奇峰壁立，大湖雪浪華飛，試問五湖禪滂，如今天下有誰？」三曰：「衰殘正賴餘潤，紫泥撥我賞音，附驥觀光，喝石攀龍，徒有此心。」歸雲本和尚南台人，嗣瞎堂遠，自金陵長竿遷疎山，道聲籍甚，狀元劉堯夫嘗問道於本，氣義

相得有上堂云、一棒下痛領將去、樹頭驚起雙雙魚、一句下折合得來、石上迸出長長筭、使乃用無所用、常轉無盡法輪、爲無所爲普現、無邊身相、古人無著力處、使了箇箇影子道、一月普現一切水、一切水月一月攝、佛法若如此、又要歸雲出來作什麼、大衆良久卓拄杖云、如今坐立儼然、向千鈞不立錐處、立地證得麼、大海若知足、百川應倒流、下座、有叢林佞篇、論議當世搖尾乞憐者、詞意甚超卓、圓極峯禪師親爲跋之、後輩入衆不可不知、其文曰、本朝富鄭公弼問道於投子顛禪師、書尺偈頌凡一十四紙、碑於台之鴻福兩廊壁間、灼見前輩主法之嚴、王公貴人信道之篤也、鄭國公社稷重臣、晚歲知向之如此、而顛必有太過人者、自謂於顛有所警發、士大夫中、誦信此道、能忘齒屈勢、奮發猛利、期於徹證而後已、如楊大年侍郎李文都尉、見廣慧璉石門聰并慈明諸大老、激揚酬唱、斑斑見諸禪書、楊無爲之於白雲端、張無盡之於兜率悅、皆扣關擊節、徹證源底、非苟然者也、近世張無垢侍郎、李漢老參政、呂居仁學士、皆見妙喜老人、登堂入室、謂之方外道友、愛憎逆順、雷揮電掃、脫略世俗、拘忌觀者、斂衽辟易、罔窺涯涘、然士君子相求於空閑寂寞之濱、擬棲心禪寂、發揮本有而已、後世不見先德楷模、專事諛媚、曲求進顯、凡以住持薦名爲長者、往往書刺以稱門僧、奉前人爲恩府、取招提之物、苞苴獻佞、識者憫唉而恬不知恥、嗚呼、吾沙門釋子、一餅一盞、雲行鳥飛、非有凍餒之迫、子女玉帛之戀、而欲折腰擁篲、酸寒跼踖、自取辱賤之如此耶、稱恩府者、出一己之私、無所依據、一妄庸唱之於其前、百妄庸和之於其後、擬爭奉之自卑小之耳、削弱風教、莫甚於佞人、佞敏實姦邪、欺僞之漸、雖端人正士、巧爲其所入、則陷身於

不義、失德於無救、可不哀歎、破法比丘、魔氣所鍾、誑誕自若、詐現知識身相、指禪林大老爲之師承、媚當路貴人爲之宗屬、申不請之敬、啓壞法之端、白衣登床、膜拜其下、曲達聖制、大辱宗風、吾道之衰極、至於此、嗚呼、天誅鬼錄、萬死奚贖、其佞者歟、嵩禪師原教有言、古之高僧者、見天子不名、預制書則曰公曰師、鍾山僧遠鑿與及門而牀坐、而不迎、虎溪慧遠、天子臨潯陽而詔不出、當世待其人、尊其德、是故聖人之道、振之後世、其高僧者、交卿大夫、尚不得預下士之禮、其出其處、不若庸人之自得也、況如僧遠之見天子乎、況如慧遠之自若乎、望吾道之興、吾人之脩、其可得乎、存其教而不須其人、存諸何以益乎、惟此未嘗不涕下、禪師沒熙寧十五年、其書以大法衰替、無人荷負、爲憂、頗如波旬、今日入我法中、詐妄自欺、以諛佞爲得計、如師子身中蟲、自食師子身中肉、此書不作可也哉、首楞嚴曰、我滅度後、末法之中、多此妖邪、熾盛世間、潛匿姦欺、稱善知識、云云、又曰、云何賊人假我衣服、裨販如來、造種種業、皆言佛法、却非出家具、戒比丘、爲小乘道、由是疑誤、無量衆生、墮無間獄、淳熙丁酉、余謝事顯恩、寓居平田西山小塢、以日近、見聞事多矯僞、古風彫落、吾言不足爲之重、輕聊書以自警、云歸雲如本書、圓極峯跋云、佛世之遠、正宗淡薄、澆漓風行、無所不至、前輩彫謝、後世無聞、叢林典刑、幾至掃地、縱有扶救之者、返以爲蠻子也、余觀疎山本禪師辨佞、詞遠而意廣、深切著明、極能箴其病、第爲妄庸輩知識暗短、醉心於邪佞之域、必以醍醐爲毒藥也、淳熙壬寅上巳、圓極彥岑書于江左五峯。

懶庵樞和尚黃龍下尊宿承嗣道場慧初孝宗皇帝雖向佛乘未知有宗門下奇特事皆是此

老引進故諸堂拙庵然後印可之。要知其來歷，皆樞之力也。樞謝事靈隱後，居于明教永安蘭若，逍遙自適，有絕句題于壁曰：雪裏梅華春信息，池中月色夜精神。年來不是無嘉趣，莫把家風舉似人。可見其胸次也。

凍空谷者，餘杭人，在象田演座下，充維那，爲人清苦貧甚，冬則蘆華當絮，自非本色叢林，斷不放複。故演爲頌，其道號曰：谷空空，谷空空，空谷全超萬象中，流水落華渾不見，清風明月却相容。後在天童沿流縛屋，號曰：弔古，多有兄弟陪其勝遊。余時在玉几拙庵老人會中，以頌寄之曰：聞君縛屋傍山阿，遠弔龍湫詎羅，未必將身潛碧嶂，且圖繞足向清波。韻傳空谷人難到，門掩山華雪不過，我待秋風洗巖壑，杖藜相與傲烟蘿。疎以清氣入骨，成烟霞痼疾，遂終于太白。

五臺草衣文殊像，始自本朝元豐間，大尉呂慧卿因戍邊遊臺山，見其貌嚴童子，體黑而被髮，以蒲自足，纏至肩，袒右膊，手執梵夾，與呂論華嚴大旨，而呂不知其大士，泊呵呂以凡情測于聖意，呂方寤下拜，而童子乃化文殊形，跨金毛，隱隱入雲中矣。呂從是悔恨歸家，逾月鬱鬱不樂，後家人告以至誠懇惻，聖容必現。呂如其言，乃竭誠悔過，期於必現，而後已。一日早起，乃是大士現於香几間，呵云：胡爲住相貪著之甚邪？呂曰：正欲世人咸見大士示化之真容耳，急命畫工圖之，頃刻不見，其像遂傳于京洛間。今在處或見之，余蓄一本，乃吳僧梵隆之筆，期終身以奉之。嘗記典牛和尚一贊最佳，其詞曰：潦倒南泉不識道理，大小曼殊室利，貶向鐵圍山底，至今頭又不梳，面又不洗，一箇渾身坐在艸裡，鈍根呂公猶不替地，指出金

毛當下迷己，靠倒了也蘇盧啞喇。

水墨觀音像，自唐吳道子李伯時後，惟吳僧梵隆茂宗者尤爲妙絕。故孝宗嘗贊之曰：水波不動，火光不興，梵隆妙絕，授之德明，蓋賜中官黃德明也。隆有小師至叶，亦善作此。近有閩僧德源筆猶臻妙，故當時鉅公如謝丞相趙大師彥逾皆有贊其像，曰：收視返聽，結跏趺坐，逸出筆端，以色見我，千百億身，無不可重說，偈言依然話墮。趙曰：出意作觀音筆間造玄妙，會得真面目，慧光應徧耀，若以相貌求，觀相生善念，念念既純全，真相縱斯現。

柏堂雅禪師閩人，嗣懶庵需，初住紫籜，以佛照居冷泉，叔姪之故，特往輔佐之。居座元二年，兄弟多歸之，然雅剛正，佛照憚之，後住龍翔靈巖，其道大振，示衆云：瑞峯頂上，棲鳳亭邊，一杯淡粥相依，百衲蒙頭打坐，二祖禮三拜，依位而立，已是周遮，達磨老臊胡，分盡髓皮，一場狼藉，自餘之輩，何足道哉。柏堂與麼道，還免諸方檢責也。無具眼者，辨取泊合，停囚長智，又曰：紫巖伸拳，筍破梢，楊華飛盡綠陰交，分明西祖單傳句，黃鳥留鳴燕語巢。箇裡見得微信得，及若到諸方，決定明窓下安排，龍翔門下直是一槌槌殺，何故不是與人難共住，大都緇素要分明。

廣教會和尚川人，嗣石頭回，初依此庵于護國，因行者幹鐵板，皆有頌送行，會曰：空奮雙拳與麼去，打成一片早回頭，歸來挂在三峯頂，惱亂春風卒未休，兄弟皆愛之，後住雲居薦福，常安三二百衆，蓋根本端正，下梢決定殊勝也。

三峯印禪師婺州人，見地超絕，嘗頌百丈野狐話曰：不落不昧，誣人之罪，不昧不落，無繩自縛。

可憐柳絮逐春風，到處自西還。自東叢林多傳之，淳熙初，余在山陰能仁，與今瑞巖葦堂潤公同往見渠舉之，恨不見其人。後因見塗毒老人頌曰：乘大火炬燒太虛空，達磨不會眼睛耳聾，尤在印之頂額之上打筋斗耳。

自得暉頃在長蘆祖照會中，衆寮裁竹暉忽成一頌云：高節深雲藏不得，幽人移向矮窓前。靈根瑞葉驚群目，將著清風動碧天。一時之作出自偶然，人已爭誦之。殆晚年居乳竇，已八十餘，忽奉旨住淨慈，人皆以爲語識，及辭衆上堂云：一住山中四十年，老來無日不思閑。今朝誤被君王詔，珍重禪流出故關。雲無心而出岫，鳥倦飛而知還。他年得意歸來也，賓主相忘松石間。及來南屏，大興曹洞之道，後歸雪竇雙塔作終焉計。果應去時之語，所謂在心爲志也。

鑑叅庵與賢在庵俱嗣心開貢，鑑嘗頌屬賓國王斬師子尊者公案云：尊者何嘗得蘊空，屬賓乃下斬春風。桃華雨後恣零落，染得一溪流水紅。叢林爭誦之，乃賢頌勸婆話曰：冰雪佳人貌最奇，常將玉笛向人吹。曲中無限華心動，獨許東君第一枝。妙喜一見大稱賞曰：賁老有此兒，黃龍法道未至委地，觀夫前輩之汲引後進，唯是公論，初無宗黨之分耳。

佛性泰頌龍牙參翠微臨濟公案曰：子卿不下單于拜，始末常遵漢帝儀。雪後始知松柏操，事難方見丈夫兒。可謂親切明白，余頃在玉几嘗見佛照舉此，必再三稱賞曰：此乃頌古樣子也。後觀其語錄，又愛其頌，婆子偷趙州筍話云：櫻桃初熟筍穿籬，林下相逢老古錐。忍俊不禁行正令，得便宜是落便宜。

開善謙頌心不是佛，智不是道云：太平時節歲豐登，旅不費糧戶不局。官路無人夜無月，唱歌歸去恰三更。妙喜最喜之，金山奇道者別峯印之嗣，亦嘗以遲日江山麗，春風華艸香，泥融飛燕子，沙暖睡鴛鴦頌之，亦不易得，時以爲超師之作也。

圓通晏和尚興化仙遊人也，見泐潭乾左丞范公致靈初自內翰出帥豫章，過候溪，因語次，范嘆曰：行將老矣，墮在金紫行中，知此事稍遠。晏即呼內翰，內翰應諾。晏曰：也不遠，翰曰：好好更望指示。晏曰：此去洪都有四程，翰佇思。晏曰：見即便見，擬思即差。翰大喜，從此有所入。樞密吳公居厚擁節歸鍾陵，見晏曰：頃赴省試，過圓通趙州關，因問前住訥老透關底事如何。訥曰：且去做官，今不覺五十餘年。晏曰：曾明得透關底事麼。吳曰：八次經過，常存念，然未脫灑在。晏舉與之曰：請使扇，吳揮扇。晏曰：有甚不脫灑處。吳大喜曰：使請末後句。晏乃搖扇兩下，吳曰：親切親切。晏曰：暗瞭舌頭三千里。

陳諫議彭公汝霖，手寫觀音經，施晏。晏拈起曰：這箇是觀音經，那箇是諫議底。彭曰：此是某親書。晏曰：寫底是字，那箇是經。彭咲曰：却了不得也。晏曰：即現宰官身而爲說法。彭曰：人人有分。晏曰：莫誇經好。彭曰：如何。卽是。晏舉經示之。彭撫掌大咲曰：噯。晏曰：又道了不得。彭乃頂禮。

安相國南遷經過見晏，嘆曰：一生做官，今日被謫，覺見從前但一夢耳。晏曰：相公覺耶。安曰：此皆是本有，但未甚明了。晏卽召相公，公舉首。晏曰：了也。安曰：奈被事使得。晏曰：離京幾程至此。安曰：四十二日。晏曰：甚處得來。安咲曰：得力得力。晏曰：直下受用去。安曰：如何受用。晏曰：

朝朝相似，日日一般，安乃合掌，晏曰：但空諸有，勿實所無，大率如此，真得大自在也。

二靈庵主蘇人也，初見真淨，後參泐潭乾，有所證，回東浙居雪竇之中峰庵，常有虎蹲伏座下，初與天童交和尙同行，二人稟誓，斷不出世，後交爽，其盟出尸太白，和遂與其絕交，居中峰歲久，其山秀絕，凡居不久，即有他山之命，和乃鉏斷山骨，竟爲待制陳公以詩誘出，住二靈庵，不一二年，禪禘磨至，遂成小小法社，名聞九天，屢詔不起，至今遺蹟尙存，多有偈語，行于世，二靈乃居鄞江月波之中，淳熙中別峯印自乳竇赴徑山，徑從其所，偈云：萬頃湖光潑潑中，二靈山色翠重重，片帆我欲天邊去，回首和公有媿容，可想見其高風也。

仁宗皇帝因大覺禪師入內論心法，有御製賜之曰：初祖安禪在少林，不傳經教但傳心，後人若悟真如性，密印由來妙理深。

孝宗皇帝因詔徑山潛禪師入內，亦有頌賜之曰：信手拈來說，宗乘數百句，僧歸寺寂寥，一字無著處。

叢林盛事卷上 終

叢林盛事卷下

寶峰祥叉手爲童子時，聞二老宿夜話，舉古德頌云：征輪軋軋過江南，暫把遺骸寄泐潭，秦嶺烟沙猶未息，月明空鎖定僧庵，祥不覺感悟泣下，老宿問其故，祥云：某近夢中得此句，當是前身之所爲者，宿曰：審爾他日必居泐潭主人，祥後爲僧，入衆有年，果出世泐潭，屢住名利，續以靖康之亂，避地天台，與高庵悟相繼示寂于蓮華，此地乃詔國師入定之所，前後皆如前頌所言，教中云：凡報土皆夙昔願力所現，舉有定分，豈偶然哉！世流庸妄，求院區區，苟合於聲利之域，雖老且死，而莫知安分者多矣，余昔在太白密庵會中，夜夢作一聯，書于壁間，云：雪點欄干，寺在翠瑠璃之下，雲橫霄漢，人歸紅菌菖之中，已彌年猶世中轉圓，抑不知報土果現於何方耶，咄，切忌說夢。

普慈開禪師，豫章人，姿貌不凡，初見雪堂行于衢之烏巨，次入湖湘，見妙喜於回雁峯前，備歷烟瘴，與狀元汪聖錫厚善，汪上饒人，舉以住懷玉，乃南禪師受業處，汪後帥閩，即以象骨招之，乾道間奉詔尸雙徑，累詔入內，大悅龍顏，特賜慧日禪師，暮年再奉旨歸雪峰，彭山昇老次山作疏云：璇璣不動，斯須回天上風雲，大用現前，縱橫挂域中日月，喜百世一時之遇，冀千齡再會之享，德又日新，人惟求舊，某人道在南閩，二浙緣符雪嶠五峰，前兄後弟而自得嘉聲，昔去今歸，而皆奉詔旨，中興佛法，九州四海悉見天心，獨受主知，名公鉅卿咸尊師譽。

方逐丹墀鳳翥俄驚合浦珠還好看白馬來東何待青衫拂地一千餘龍象衲子矜觀象軼言旋三百年祖師道場又見木毳再輟請提密印同副芹誠聞福緣甚勝近世罕及但向上一著叢林不全取信抑身滅而名殞耳

鐵庵一大禪師建昌人與佛照曇道者俱同行初見月庵果次見應庵華住歸宗時嘗爲侍者華頗喜之其孤耿不與世接嘗題其頂相曰掛拂擊拂全機出沒一喝耳聾三日屈屈且道是馬祖屈百丈屈宗一侍者但恁麼拈出乾道問出世住台之慶善遷衢之祥符竟嗣月庵蓋不忘所得也有贊其像曰揭翻四大五蘊徹證向上一竅傾心吐膽爲人暗裡返遭怪咲眼裏瞳人吹鐵叫持蠶酌海謾勞神鬩斗煎茶不同銚其後自嘉禾遷疎山仰山兩住雪峰而終

雪堂行有法語示行者元友曰雲居高庵老人在龍門作首座時凡臨衆必曰須知有識者在。他日侍誨次嘗請聞其說語曰廣衆之中鄙者常多而識者常寡鄙者易習識者難親自奮志於其間如一人與萬人戰庸鄙之習力盡真挺特沒量漢也余從是終身誦其言氣勝志則爲小人志勝氣則爲端人正士惟志與氣齊爲得道賢聖有人於剛狠不受諫曉者氣使之然也耆婆將死百草皆泣曰耆婆在世我等有用耆婆死後世間無有識我者此喻世間諸法未出家時將冠之年見獨居士嘗謂余曰中無主則不正外無主則不行余從是終身踐其言在家立身出家學道以至終年倚此如衡石之定輕重規矩之成方圓舍此則事事失準元友其勉之

穎濱先生蘇子由嘗謫筠陽與真淨道契嘗有頌寄香城順和尚曰融却無窮事都成一片心此心仍不有從古至今如今又曰如見復如亡相逢咲幾場此間無首尾尺寸不須量欲識東坡老堂堂一丈夫近來知此事也不識文書東坡亦在貶所聞公深向此道榜其所居曰東軒以詩戲之有盛取東軒長老來之句子由答之曰縱使盛來無用處雪堂自有老師兄又嘗和淵明一詩云佛法行中原儒者恥論功施冥冥中而何負當時此方舊染雜渾渾無名緇治生守家室坐使斯人疑未知酒肉非寧與生死辭熾然吾閩中佛事不可思生子多穎悟得報不汝欺時有正法眼一出照耀之誰謂邑中豪請誦我此詩

晁光祿迥精窮內外教典晚年自著法藏碎金流行儒釋中其語甚敦教化儒曰士之有志不可無學故佛書云無學者其理無別若會其語因循自棄猶可惜也余觀三教之書粗見必學之意儒周易曰君子進德修業道教老聃曰上士聞道勤而行之釋寶積經曰猶如大龍所作已辨捨於重擔始得己利余因會同參究雖知其文句不類而必德從於學無疑矣加以耆年之志深流於至窮最後一說雖萬劫之不可易也

大圓智禪師四明人嗣道林一見祐山窟窟見黃龍南故其親得黃龍宗旨有三關頌并拈古盛行叢林初妙喜聞其坦率不事事不甚樂之及觀其拈古乃撫几稱賞善曰真黃龍正傳也撥筆大書四句於後曰七佛命脈諸祖眼睛但看此錄一切現成由是學者方知二師用處初無二致然智嘗謂人曰杲妙喜作用不減巖頭死心可謂百世之師也未與老僧商確那事若見老僧一回定教他光前絕後然二師竟不相見智終于石霜預旬日受弟子

生祭就法座上端然化去方知妙喜不輕肯人也。

妙喜道人延平黃氏女也。徧見尊宿。後謁妙喜于徑山。因妙喜室中問僧：不是心，不是佛，不是物，是什麼？僧罔措。道立門外聞之，豁然明契，乃告喜。喜曰：桑樹著箭，楮樹出汗，因印其所解。後開堂於洪福，示衆曰：禪非意想，立意乖宗。道絕功助，建功失開。聲外句不向意中求，持照用機關，握佛祖鎚，有佛處互爲賓主，無佛處風颯颯地，心寧意泰，響順聲和，似恁麼人，且道什麼處安著？良久曰：披箕側立千峰外，引水澆蔬五老前。又曰：眨上眉毛，毛毳過大，似開眼尿牀，現成公案。放行，正是點兒落節，恁麼不恁麼，總不得，曳尾靈龜，不是心，不是佛，不是物。虛空釘橛，離得許多閑門破戶，猶是死水裏藏龍，傾湫倒嶽，一句作麼生道？巨靈擡手，無多子，分破華山千萬重。後水庵見僧舉似，以手加額曰：箇事可謂非男女等相，多少丈夫漢！十年五年在衆中，討頭不著，他雖是箇女人，宛有丈夫之作，勝却多少杜撰長老也。

機簡堂初住饒之筓山十七年，火種刀耕，備嘗艱苦。其所住者皆四方本有，故能同受寂寥，不以世間榮耀爲事，而布素一節，故世謂之機道者。後居九江圓通，大行此庵之道，示衆有云：圓通不開生藥鋪，單單只賣死貓頭，不知那箇無思算，喫著通身冷汗流，自是遷太平之隱靜。衆雖多，堂厨淡薄，兄弟罔敢言之者。凡請執事，必遵老黃龍之法，粥罷挂鉢向堂，令侍者白槌曰：請某人執其職，兄弟靡不從之者。倘有違者，卽叱之曰：簡堂這裏不做，爾向甚處做？噫！前輩道重，用人如此容易，豈若今時七跪八拜，下情無任，猶被渠躡跳上三十三天去，苦哉！佛陀耶。

證西林號老衲，長沙人。月庵之嗣。月庵居道林，證爲寮元，已爲兄弟挂牌入室，其爲人至誠鄭重。雖處暗室，如臨大賓，兄弟見之，其容必莊。後居西林道行，有頌話墮公案曰：石火光中立，問端不能透脫，幾多難頂門。若具金剛眼，肯被傍人把釣竿，蓋其親得月庵說話，又且甚脫窠臼耳。始保安封，亦見月庵，見地尤別，亦嘗頌曰：歲暮抱琴何處去，洛陽三十六峰西。生平未知先生面，不得一聽烏夜啼，可謂善學柳下惠，終不師其迹。頂門具樂迦羅眼者，分明辨取。

詢罵天見地明白，嘗侍佛鑑，鑑以其形容醜黑而談天者，又曰：其福寡。一日偶謂詢云：可惜一顆明珠，被懶者乞兒拾得，詢云：和尚且牢收取。又一日謂曰：一切衆生何嘗悟來？詢曰：一切衆生何嘗迷來？忽有一行者面前過，鑑曰：如何是祖師西來意？行者罔措，鑑曰：何嘗悟來？詢亟呼行者曰：放參也未？者曰：放參了也。詢曰：何嘗迷來？鑑叱曰：業種出去。詢曰：和尚且低聲恐外人聞得，我父子二人在此說迷說悟，鑑大咲。

劔門分庵主閩人，早歲於道自有發明，竟剃髮走鄉里，時人謂之狂僧。分不恤，初見懶庵，後謁妙喜，雙徑聞其風，顛決不令參堂，分乃乘憤下山，將來歸計，因抵錢塘江上，買舟，跨立於浙江亭畔，泣下曰：我波波吒吒，出嶺來見妙喜，又不得預衆，是夙無般若緣也。忽聞喝道者云：侍郎來，分豁然大悟，乃有頌云：幾年箇事挂胸懷，問盡諸方眼不開，今日肝腸忽然破，一聲江上侍郎來。徑歸洋嶼，依懶庵，懶庵印其所得，未幾，忽辭去，懶庵以偈送之曰：江頭風急浪華飛，南北相逢不展眉，獨有分禪英俊手，等閑奪得錦標歸，後徉狂七閩，或入酒肆，或在

魚行人莫能測，唯同參木庵。永每見必以師事之，嘗示衆云：這一片田地，汝等諸人且道，天地未分已前，在什麼處，直下徹去，已是鈍置分上座了也。更若擬議思量，何啻白雲千里，萬里。葛拈拄杖打散大衆，又曰：十五日已前，天上有星皆拱北，十五日已後，人間無水不朝東。已前已後總拈却，到處鄉談各不同，乃以手指屈云：一二三四五六七八九十十一十二十三十四，復云：諸兄弟且道，今日是幾，良久云：本店賣買分文不賒。

伊庵權臨安昌化人，嗣無庵余，出世萬年，一坐九年，法席大振，然權律身奉衆，言行俱有準繩。大率効佛智裕，誰庵粹之爲人，座下常安五百衆，有自贊云：鼻如鷹背，對面千里，要識萬年，只這便是叢林俱愛之。後遷常之華藏，結夏示衆云：今朝結却布袋口，明眼衲僧休亂走，心行滅處解翻身，噴嚏也成獅子吼。梅檀林任馳驟，剔起眉毛頂上生，剜肉成瘡露家醜。

高宗孝宗皆有彌勒大士贊，叢林有道之士，無不和之者，少有愜二帝意者。贊曰：碧落片雲，長天孤月，能棲物外，妙兮幽絕，慣隱市塵，奇哉英傑。隨行兮惟有拄杖布袋，充飢兮何妨酒肉腥血，別別玉殿瓊樓，更加雪，又云：袋貯乾坤杖挑日月，嘉嘉蓋蓋聖中絕，慈悲癡癡僧中傑。令行兮一棒一條痕，逗機兮一擲一掌血，別別恰似紅爐一點雪，乾道間直道者住保寧，嘗和之曰：量包太虛，眼懸日月，住天宮兮天中之絕，居人間兮人中之傑。放下布袋兮坐斷四大部州，拈起拄杖兮直得大地流血，別別明明有理難分雪，范使李公爲奏上，孝宗大喜之，賜錢五百萬米五百斛，以助供衆。

別峰印自金山遷乳峰，有聚生陸安者，夜夢神人報云：師即達觀穎之後身也。師天資閑暇，嗣

華藏珉，自出蜀，卽抵雙徑，見妙喜，喜問云：甚處來，印云：西川喜云：未離劔關，與爾三十棒，印云：合起動和尚，喜館於楞伽室，待之甚厚，得歷居大利，晚奉詔居徑山，一住九年，每以華嚴作佛事，紹興庚辰，示寂於菖蒲田，辭徑山塗毒，毒曰：和尚幾時行止，印曰：水到渠成，卽更衣端坐而逝，其年臘月八日也。臨行門人覓偈，卽大書曰：千偈萬偈，總是熱荒，我有一句死後舉揚，塗毒亟捧龕返歸法堂，正寢，七日以當代禮送之，時感之，後二年塗毒示歸寂，人懷報德之心，印有山中書懷，一味林間飽黑甜，儘教氣燭日炎炎，不將無病自求病，多是解粘添得粘，粗有芋煨如懶瓚，更無錐卓似香嚴，枕邊留得青山在，雨後層層翠滴簷，又嘗題農夫醉打圖一絕：農夫何事損天和，醉後依前擊壤歌，不似當年劉項飲，胸中各自有干戈。

塗毒老人居鑑湖，日與放翁最厚，紹興壬子七月二十七日示寂，放翁以詩哭之，曰：岌岌龍門萬衲傾，翩翩隻履又西行，塵侵白拂繩牀冷，露滴青松卵塔成，遙想再來非四八，應當相見是三生，放翁大欠修行力，未免人間情，別情又贊其真云：骨格瓊奇，精神瀟灑，貌肅而和，語盡而簡，畫得者英氣逼人，畫不得者頂門上一隻眼。

石窻恭禪師，徧參諸方，久依黃龍，忠道者，後依宏智，靖康中自湖湘歸東越，忠以頌送之，曰：閑思昔日戲沙洲，屈指于今四十秋，君到石窻閑借問，許多風月付誰收，恭出世越之報恩，後居瑞巖，其道大振，然克苦爲人，布素以禦寒暑，事無細大必親臨之，叢林整齊，衲子望風而服，嘗有佛生日頌，曰：五天一隻蓬蒿箭，攪動支那百萬兵，不得雲門行正令，幾乎錯認定盤星，叢林沸傳之，有徹白頭者，三衢人，與恭同出宏智門，操履孤潔，不與世接，嘗典賓於太白。

妙喜見大俊敏，私喜之，以計誘其過。玉几徹，秉志不渝，竟依老天真。乾道初，恭欲羅籠之，以爲嗣。退明之報恩，與之出世。住二年，四方龍象每歸之。然徹竟嗣宏智，恭以不樂，徹亦不卹。後遷婺之華藏，將發而示寂。臨行書遺偈云：當陽一句，更無回互。月落寒潭，烟迷古渡。是真得洞上之宗，惜其不久住世間耳。

孝宗皇帝在位二十七年，每宣諸山長老論道。唯佛照禪師最爲知遇。淳熙初，住冷泉，宣入選德殿，論宗門事。五宿禁圍，從古未有也。故佛照嘗奏曰：陛下前後宣諸山長老論道，如何？孝宗曰：難得似長老直捷。佛照又奏曰：臣生長山林，語言麤疎，伏乞陛下寬貸。孝宗曰：不妨。這裏與長老忘懷論道，前後賜諸山偈語，不爲不多。賜佛照者最爲尊敬。聖語曰：大暑流金石，寒風結凍雲。梅華香度遠，自有一枝春。佛照嘗和之。一日又批問佛照曰：世尊雪山修道六年，所成者何事？請師明說。時佛照坐施主家齋，天使忽到，便請回奏。照著語云：將謂陛下忘却，可謂無師自然之智也。

誰庵演闍人，初參妙喜於回雁峰下。洞明宗旨，喜曰：這獼猴子以後須括搔人去在。後辭妙喜，偈曰：倒騎鐵馬，度瀟湘。礪草巖華不覆藏，回雁峰高親到頂，更無佛法可商量。後住江上龍翔，兄弟多依之。水庵有偈曰：江上如今得白眉，爲人偏用截流機。然演善作偈語，宗眼端正。題新昌石佛曰：積念有年瞻石佛，今朝一見絕疑猜。都盧面目只如此，却謂三生鑿出來。又題龍湫曰：詎羅坐斷大龍湫，伎倆却無錯路頭。只見高巖傾瀑布，那知碧嶂外清幽。

別峰雲嗣少溪淨，淳熙間住福之支提。江湖志道者罔不依之。嘗有善財南詢，頌云：鬚角分明

者小兒，肚皮好待爾聞知。賺他五十三知識，敗闕都盧納向伊。叢林競傳，後遷蒲陽華嚴而終。

洪首座臨川人，嗣佛照出世。洪之光孝，蓋應漕使尤延之之命。次任太守，旦望公參須，要諸山就公廳下長揖而退。洪聞之不樂，以謂天下無此道理。即擊鼓升堂，退院而去。頌曰：祖翁活計元來大，誰敢區區謾折腰。珍重豫章賢太守，芒鞋竹杖任逍遙。太守聞之，慚甚，遣使再請。洪竟不回。江西諸山從此增氣。後住吉之祥符，遷開福而終。尤延之侍郎親爲作傳。

一和尚自號村僧，嗣草堂清。久住平田，後長蘆力命不赴，以皎如晦一疏而往。其詞曰：這般梵刹，固非些小叢林。箇樣村僧，豈是尋常種草。要得門當戶對，還他境勝人奇。某人生鐵面皮，潑天聲價。盡大地捏成院子，未稱全提。將河沙都做粥僧，不消一喝。且看火光菩薩面，掉却踪跡。羅漢家來，撐沒底船。激起蘆華千尺浪，宜舉向上句。祝延玉葉萬年人，巢旣住一葦。次年復歸萬年，未幾示寂。于觀音院，先自入龕。落窠，說偈曰：今年七十五，歸作庵中主。珍重觀世音，泥蛇吞石虎。居平田，衆常五百。時江西泐潭有化士，修大寂塔，兄弟皆作頌。時有一座主，初更衣入衆，因成一頌曰：寄語江西老古錫，從他日炙與風吹。兒孫不是無料理，要見冰消瓦解時。又作冬日卽事云：朔風也解知人意，吹落巖前古樹枝。惠我一爐深夜火，轉教心性懶。趁時雪菓見之，大稱賞曰：禪和子三十年在衆，噉餅未必有此作。他日必成大器。後果如言。住東掖，大興南台之教。是謂神照師也。

松源在東湖，日幹佛殿者乞頌。源大書云：黃面瞿曇眼瞎瞋，千方百計討便宜。子今無著渾身

處却要兒孫蓋覆伊示官人云說禪說道說文章林下相逢咲幾場踏著吾家關候子白衣拜相也尋常湖海爭誦之

曇廣南者久依密庵後在佛照會中爲寮元有化鹽頌云合水和泥一處烹水泥盡處雪華生便能索起遼天價公驗分明誰敢爭佛照喜曰這廣南蠻也亦廣後住雪之道場其道將振而爲有力者攘之未幾終于冷泉

雷庵受首座平江人道貌脩偉久依月堂拗堂諸老曾集普燈三十卷又註楞伽庵于雪之曹氏庵與扞山居士劉季高之姪平氏者最善慶元初復庵于西湖劉公任丹丘以巾子峰報恩招之以頌謝云結菲方喜倚長松一枕清風睡正濃禪道尙無心理會肯將身入關蓋中劉見大喜再遣使迫之亦和前韻云昂藏骨相倚喬松晚歲清陰只自濃好向紅塵姑著脚何妨都在咲談中竟不赴時皆高之當今搖尾乞憐之時寧復有此人邪

大惠在雙徑時一千七百龍象有行者祖慶爲母設忌乞頌慧見其骨相不凡與之一頌曰透過那一著佛亦不能容猛虎當路坐狐兔自潛蹤慶妙年而出世南源移道林一夕夢寶公以二十隻筍與之既覺罔測時劉樞密洪父帥金陵以鍾山招之一住二十年中間因回祿復新之豈偶然者哉慶元初佛照自五峰歸育王慶遂繼踵二年而沒信妙喜之言不謬矣晦庵光和尚嗣雪堂行住龜峰遷泉之法石蓋赴參政周公葵之命臨終以頌授小師元聰曰叢林毒種元聰侍者耐耐吾宗滅汝邊也吾今高枕百無憂聰汝時搥塗毒鼓聽久依密庵首乘於徑山出世洪之報恩遷雲居隱靜雪峰晚被旨居徑山時謂晦庵不妄許可也抑亦

雪堂慈悲行門之所遺蔭邪

圓悟初在成都講肆范丞相伯才見其器質不凡因作長篇激其往南方行脚其詞曰觀水莫觀汚池水汚池之水魚鱉卑登山莫登透邈山透邈之山艸木稀觀水直觀滄溟廣登山直上泰山上所得不少所見高工夫用盡非徒勞南方幸有選佛地好向其中窮妙旨他年成器整頹綱不負男兒出家志大丈夫兮休擬議豈爲虛名滅身計歡諧時節苦無多却被光陰暗添歲成都況是繁華國打住只因華酒惑吾師本是出塵人肯隨醜醜同埋沒吾師幸有虹蜺志切莫蹉過向泥水君不見吞舟之魚不隱小流合抱之木豈生丹丘大鵬一展九萬里肯同飛燕著沙鷗何如急流千里驥莫學魚鰓戀一枝直饒講得千經論也落禪家第二機白雲本自戀高臺暮罩朝籠不暫開爲赴蒼生霖雨望等閑猶自出山來又不見荆山有玉石瓊瑤良工未逢居蓬蒿當年若不離荆楚爭得連城價倍高

本朝士大夫與當代尊宿撰語錄序語句斬絕者無出山谷無爲無盡三大老今代有蜀人馮當可者於宗門深有造入與石頭回禪師撰語錄序江湖沸傳之其詞曰五祖晚得南堂糴暴生犂凌跨勳遠天適地窄投老大隋回道者以運鎚攻石之手仰擊堅高出力既轟一鎚便透歸坐釣魚山上乖崖峭壁十倍其師狼毒砒礪不容下口其徒彥聞更不警地要收餘毒散施諸方余恐後人不著便宜自取僵仆故爲標其茶毒以示來者縉雲野老序

無垢居士張九成參妙喜有大發明而宗眼明白嘗以老大而又大言三乘十二分教八萬四千餘卷到者漢面前不消一睡十信十住十行十回向等覺妙覺到者漢面前不當一放多

年臘果養得五箇虎子，橫行四海，向大唐國裡，日本國裡，新羅國裡，拋屎撒尿，直得乾坤漆黑，日月奔忙，須彌岌岌，四海揚波，慢調絲竹，打箇小坐，看渠面背，大似三家村裏田庫兒，而其用處，猶如烏風黑雨，天雷閃電，霹靂聲中，響栗撥刺，拖去一大猛火，咄，是甚閑公事。

蔣山元嗣，慈明元後，得雪竇雅，雅得慈覺印，混融然實嗣之，乾道間，然住金陵天禧，時妙癡禪住保寧，明大禪住蔣山，明薄然，以其流派，非黃龍楊岐直下也，嘗與庭諍，然口辯捷，明頗遭所困，竟得癡禪解之，然器量過人，但出世太早，不歷諸方門戶，宗眼混淆，故叢林多以此薄之，後住南華，滅於五羊，臨行脫灑，邦人積沈香以茶毘之，一段殊勝，非小小，余與然生緣同處，恨不識其慈範，最愛其祭慈覺一文，甚佳，曰：建炎三年，我忽顛怪，拈下幘頭，把斷腰帶，夜盜師庭，遭師捉敗，既無一物，空禮三拜，自是退思，恨不小人，或罵師，老不唧啣了無能解，我即舉首仰天慶怪，人或譽師，道超佛祖，量廓滄海，我即持杖擊其頭碎，如何若何，錯會者多，敬陳薄奠，師唉婆娑，然有小師大驥者，淳熙間住衢之靈曜，時朝廷方行役法，二浙江，淮處並差定，驥乃糾率衢婺處三州僧尼道士，造朝免之，今天下僧由此獲安，不爲國家之差役者，蓋驥之力耶，後之圓頂方袍者，當知所自耳，驥後住天台平田而卒。

肯堂充見，止庵顏，性識敏利，博達古今，前後所作語句甚多，送僧訪簡初居士，尤侍郎，求典牛和尚語錄序，其詞曰：岷峨山下三角虎，跳入南方誰敢侮，泐潭老準眼光，背手暗發千鈞弩，一箭中的死復活，從此咬人齒不露，武寧山中四十年，豈獨坐斷江西路，徑山塗毒遭一口，至今有理無雪處，却遣弟子往毘耶，問訊居士覓轉語，居士贊之口，即啞，居士罵之目，即

瞽，居士贊罵不及處，請爲渠作語錄序。

公安珠川人，亦嗣止庵，爲人骨硬，人莫能親踈，乾道間道行湖湘，嘗有自贊曰：月色照山容，泉聲落斷崖，水光山色裡，一塊爛枯柴，又曰：老鶴入枯地，善解藏羽翮，點著背摩天，壺中天地窄。

瑞巖順嗣，水庵，號華堂，初在池之梅山，嘗有上堂云：今朝五月十五，一夜淋淋下雨，不知林下道人相逢，作麼生舉，舉得全攔胸劈面拳，爲甚麼如此，精金若不經爐冶，爭得光華徹底鮮，又十日入室，五日陞堂，千醜百拙，無處堆藏，咄，相牽入鑊湯，後終於台之瑞巖。

萬壽脩闍人，初依應庵，後見或庵於常之無錫，出世雲之上方，遷雙塔，其道未振，因塗毒自鑑，上能仁持盞過吳門，衆善友請小參，脩引坐云：正法眼藏，向這瞎驢邊滅却，直得盡大地人扶持不起，是以曹溪路上荆棘參天，少室峰前獨體遍野，非盧扁不能起，齊肱之疾，非孫吳不能全，殺活之機，塗毒一搥開者皆喪，要津把斷風骨旋生，既有如是宗師，佛法不怕爛却，然雖與麼，且道，因行掉臂，普照羣機，一句作麼生道，三尺靈光摩竭令，滿城和氣暖如春，下座塗毒握手云：將謂或庵其後無人，元來有吾姪在，自此道行吳中矣。

唉庵悟蘇之常，熟人，弃俗出家，初見無庵全，後見密庵于烏巨，淳熙間，首衆於冷泉，專以供養爲心，時歲大飢，密庵持盞未回，知事約東方來，悟坐在山門，一例放入，泊密庵回，知事沮之，密庵見悟似不悅，因辭云：有但得院子如撲大盡，情供養五湖僧之句，不逾時住，衢祥符，歷董數刹，果以供養爲務。

鴈山枯木元禪師，嗣妙喜，示衆頌曰：鴈山枯木實頭禪，不在尖新語句邊，背手爲然拈得著，長鯨吞月浪滔天。

馮山寶亦嗣大慧，叢林老成，晚居大馮，有頌云：八十翁翁輟繡毳，輟來輟去不知休，如今輟向千峰頂，坐看馮山水牯牛。

空東山福人，初見艸堂清，後見妙喜，喜見其姿氣超卓，意欲羅籠，至爲頂相贊云：慧空抓著吾痒處，吾嘗箇著他痛處，痛處痒處痛，不與千聖同途，豈與衲僧共用，誰知掃帚竹裏無錢筒，蒿枝叢內無梁棟，如今各自不知己，一任畫出這般不啣啾底老凍膿，從教挂向壁角落頭，使盡夜燒兜樓婆畢力迦沈水膠香作七代祖翁供，然空秉志不渝，竟嗣艸堂，叢林有識者輩，皆仰羨之，空善作語句，有東山外集行于世，如曰：東山送人只一句，纔擬欽承喝出去，如今更向紙上求，大似蒼鷹擊狐兔，上人上人知不知，端坐守之無了期，趁取秋風霜木落，湖潭百丈在江西，有昇次山住幽巖，鏤空之集流于江浙。

庵堂道號，前輩例無，但以所居處呼之，如南嶽青原百丈黃葉是也，庵堂者始自寶覺心禪師，謝事黃龍，退居晦堂，人因以稱之，自後靈源死心艸堂皆其高弟，故遞相法之，真淨與晦堂同出黃龍之門，故亦以雲庵號之，覺範乃雲庵之子，故以寂音甘露滅自標，大抵道號有因名而召之者，有以生緣出處而號之者，有因做工夫有所契而立之者，有因所住道行而揚之者，前後皆有所據，豈苟云乎哉，今之兄弟纒入衆來，未曾夢見向上一著子，早已各立道號，殊不原其本，故瞎堂遠禪師，因結制次問知事云：今夏俵扇多少，知事曰：五百來柄，遠曰：

又造五百所庵也，蓋禪和庵，纔得柄扇子，便寫箇庵名定也，聞者罔不大咲，余以母氏夢梵僧頂一月而投之懷中，既覺遂育，因以古月自號，以安穩眠呼之，蓋彷彿覺範甘露滅也，二號維摩寶積所出，故橋洲曇公爲余作古月說云：萬古長空，一朝風月，慚愧古人，模寫得成也，融禪未生之夕，其母夢得月，是爲生子之祥，愧今人不去却模子也，融禪不負其母，兼不忘古人，古月名庵，不爲忝矣，塗毒老人亦有四句云：萬古長空月，何曾有晦明，此心元一體，隨處燭精靈。

安定郡王號超然居士，頃在東京，時卽留意空宗，見長靈卓禪師，有打發處，後因事謫江西，及虜人陷東京，宗室諸王多隨二聖北陷，居士因此得免，乃居三衢，與馮侍郎至道并雪堂行禪師爲方外友，衢人知信向佛乘，多自茲始，嘗有南嶽法輪省行堂記，最高妙，又撰戒欲文，今錄于此，嘗謂世人無始時來，有大苦惱，惑亂身心，不求出離，所大苦者淫欲之事也，此苦能昏塞精神，戕賊性命，障德敗道，妨廢修行，每念私心潛散，邪見動搖，不以境緣有無，不分去處淨穢，便起顛倒，恣行觸汗，淨眼觀之，有何快樂，且情塵流轉，慾火燒然，自古迄今，老幼貴賤，無不被其害也，蓋世人廣貪財利，追求爵祿，如意之後，唯是耽著色欲，又有縑素之間，百念灰冷，惟此一事多爲魔惱，至於造妖作竊，傾國亡家，或善和眷屬，因此紛爭，或久遠夫婦，因此乖離，信之壞人根本，累人深重，奸妬欺昧，不可名言，是故佛說，諸業易斷，此苦難除，苟能滅盡，無不成道，大抵男女二根，初無分別，邪妄發生，互起愛染，結習牽纏，遂有思想驚夢之苦，盡費破散之苦，冤結離間之苦，遭刑染疾之苦，直到天亡終未省悟，明知穢汗非清。

淨因如蛾投火自受焦然如來明誨若不斷淫欲求聖道無有是處當知情愛爲災難之端
狐媚乃殺人之賊起煩惱因入地獄種悞人損德喪身失命常於一切處混絕男女相究竟
眞實誰受欲事當知革囊臭穢敗壞總成白骨念欲境界復有何樂雖在夢中亦生怖畏普
願一切含靈具識盡生厭捨如冤家想當遠離也如大火聚不可近也如毒蛇來當急避也
果能一發悔念俾此纏縛自然消釋變垢濁而獲法身散姪火而爲智慧互相教化同行淨
道證安樂行。

傳曰盡信書則不如無書此語均然何也儒家經史例有監本證據語竟已定吾門廣衆鄙者
常衆識者常寡故多以臆見改易遂失先聖玄妙之旨可不哀哉如紹興間四明再開傳燈
統要乃雙溪庸僧思鑑幹緣鑑者素無學識誠謬故尊宿問答之言甚多此眞法門大罪人
也嗚呼此書乃本朝楊文公大年奉詔爲吳僧道原校定一旦見易於妄庸之手可謂水潦
鶴也叢林負志之士不可不知當以橋州湖州之學二本爲正。

癡禪妙禪師婺州人少在教庠已有打發卽更衣遍見當代尊宿久在石室光佛子會中出世
杭之靈石遷中竺保寧嗣石室有石室眞贊曰我也不重備禪我也不重備道但重一雙手
眼別得儂家恰好然稟性疎逸無檢凡陸座小參必先青原百家之事隆興乾道間其道盛
行與妙喜爭抗有得法子無學忱已庵深皆叢林白眉更有哀可庵小年住徑山大慧禪師
示寂卽主其後事時妙術亦居東堂卒以法衣拄杖授之曰三尺烏藤本現成箇中毫髮不
容情佛魔凡聖俱撻殺方顯金剛正眼睛妙後入滅于嘉興之祥符預定時日親書遺偈別

時官道俗翛然而往有王梵志轍已脫一任橫拖倒拽之句眞得大自在也。

保安封七閩人嗣月庵幼年入叢林赫有聲自首衆紫金出世楊之建隆遷常之保安山乃赴
大參周公之命封與大參有資緣雖一時小利賓主相得一居逾十五年諸方大刹屢招不
往然封氣蓋諸方開口卽貶剝間不容私淳熙末乃坐脫頌曰五十七年幸自好無端破戒
作長老如今掘地且活埋既向人前和亂掃又有滑稽語譏後世後生不求淡素惟務衣裝
今併記于此曰紡絲直襪毛段襖打扮出來眞箇好驀然問著祖師關却似東村王太嫂呵
呵。

圓通永建上人號柏庭久依密庵一翁松源輩爲伍後以鄉人老居蔣山永充座元舉以出世
住長竿天禧與密庵在衆有隙不令其承嗣竟爲其雜髮師光晦庵拈香未幾遷信溪遂卒
平日與無一居士侍郎王概厚善有唱酬語謄行于世但來處不分曉兄弟亦少有信之者
亦可爲後輩幾間破屋不原所得者爲深誠故松源嘗有頌曰林下相逢知幾年好因緣是
惡因緣雖然不受靈山記鼻孔依然著那邊。

常樂和山主三衢人久依密庵見處穩實不在松源曹源之下有法華二十八品頌行于世其
在青山時密庵嘗以伽陀戲之曰一撈當機伎倆窮故鄉回首爛柯峰人間天上誰知否會
見曹溪正脈通然和一生辛苦自知福妙諸郡多以名山招之俱不起暮年與居士汪公父
子卜築於龜嶺之南火種刀耕恬然自樂況味不減老龐丹霞亦一代奇事也。

震山堂昇州人初見丹霞淳明洞上宗旨有頌云白雲深覆古寒巖異艸靈華彩鳳銜夜半天

明日當午，騎牛背上，著靴衫，又抵大瀉，作插鐵井頌曰：盡道瀉山父子和，插鐵猶自帶干戈。至今一片明如鏡，時見無風匝波。後見艸堂於疎山，師資道合，因稟承焉。初居百丈，後住黃龍，其道大振，是爲龍峰四世也。

崇野堂四明人，久依天童宏智禪師，以大事不決，竟上江西，見艸堂，未幾，果有所得。後住育王，乃拈香爲艸堂之嗣，雪竇持以四句戲宏智曰：收得一宗，翠巖宗白頭也，失却一崇，面前合掌，背後搥胸，聞者莫不大咲。崇幼年多攻詩，嘗題廬山三峽橋曰：蕭蕭石徑蟠蒼松，山腰忽斷來悲風。坐寒欲作暮天雪，人靜似發山林鐘。落崖千古流寒玉，眩眼百丈飛長虹。倚欄深省十年夢，坐看雲吞五老峰。後安國按部見之，大加稱賞，遂徹去諸家詩牌，唯留此一篇，自茲雖道譽不甚四馳，唯有詩名流于世。後進當以崇爲戒，所謂齊己貫休名重地也。

龍丘法師慧仁，夜夢作偈曰：棍既破袴又迭，多少水清玉潔，一條藜杖劃斷，天地更無殘闕。別別，不須擊胡蘆磬鐵，超然居士見之大喜曰：鵲有巢而鳩居之，良可咲也。雪堂曰：不然，從上尊宿多有自教乘中打發者，如百丈大珠洞上輩，皆是也。超然點首。

姑蘇有尼曰祖勲者，少依或庵，咨決大事，且暮精勤，久而有省，有俗官仲紙討偈，勲書之曰：終日爲官不識官，終年多被吏人瞞。喝散吏人官自顯，掀翻北斗面南看。多處請出世，堅臥不赴，終于楓橋李氏庵。

雲堂舒和尚有垂誠文，傳布叢林，專警諸方主法者，安存老病，不應揀擇，少年挂搭大傷風化，所謂枯樹老僧，山門景致也。因記得有一老僧抵吳門萬壽，時主者不肯挂搭，却云：爾老矣，何不小院裡去，若爾只是種一根樹，老僧對云：爾當初若時緣不偶，不出住院也，須到處種樹始得。主慙無以對，其僧乃書偈而去曰：江湖幾度氣吞牛，年老方知總是愁。奉勸後生宜勉勵，看看種樹在前頭。時太守王公佐聞已下令諸山挂搭僧人不得揀擇，所謂斷佛種子也。

金沙灘頭菩薩像，有畫作梵僧肩拄杖挑囊，回顧馬郎婦勢，前後所贊甚多，唯四明道全號大同者一贊最佳，其詞曰：等觀以慈，鈎牽以欲，以楔出楔，以毒攻毒。三十二應，普門具足，只此一機，奪千聖目。雲髮霧鬢，輕紗薄縠，大地橫陳，虛空摩觸。靈骨鎖金，寒沙埋玉。鶯鴻縹渺，銀漢斜缺。月東西挂，疎木時余在。丹丘見之，余嘗爲蛇畫足云：先以欲鈎牽，後令入佛智，有利與無利，元不離行市。黃金靈骨再挑來，試問汝今何面背。阿呵呵，囉囉哩，三箇之中那箇是。剔起眉毛塞耳觀，圓通門戶堂堂啓。吽吽，隱山璨和尚贊云：丰姿窈窕，鬢欹斜，賺盡郎君念法華。一把骨頭挑去後，不知明月落誰家。璨住泉之法石木庵，永之嗣也。

黃龍楊岐二宗，皆出於石霜慈明，初黃龍之道大振，子孫世之，皆班班不減。馬大師之數，自真淨四傳而至塗毒楊岐，再世而得老演，演居海會，乃得南堂三佛，以大其門戶，故今天下多有義話書記者，爲其文，兄弟甚推其公，因筆錄于此，使後之學者知祖宗流派，其有自云昔慈明老人得黃龍楊岐，猶一體之有左右手也。子孫派出各世，其家典牛不負泐潭，其敬妙喜猶敬師也。德光實嗣妙喜，惟巖主因稟典牛，雖平生出處不同，幸今日交承有在，道誼所

在存沒難忘，要源委其來，皆慈明屋裡人也。若巖主平日道德超邁，談辯軒豁，錯鉢學者有
大手段，江湖間特有定論，茲不事多語，以溷圓識，謹羞伊蒲，率大衆詣率堵一奠，巖主其臨
之。

曇橘州者，川人，乃別峯印和尚之法弟，學問該博，擅名天下。本朝自覺範後，獨推此人而已。住
蜀之無爲山，遭橫逆來于江，丞相史公尊其學業，舉以住明之杖錫。初入院時，二相親送，其
後史公復造竹院以延之。凡有質疑事，必問，故別峰自金山來，雪竇諸山一疏，乃曇撰之。其
詞曰：住雪竇好，住翠峰好，老子當斷自胸中。爲法來耶，爲牀座耶，此行殆出人意表，無愧乎
東山直下四世，望之如西湖雪後諸峰，但得心同道同出處同，休問佛界魔界衆生界，新乳
峰禪師，聲飛吳越，價重岷峨。住海門國逾一十有二年，肆瀾翻口說八萬四千偈，如山屹屹，
有陣堂堂，與其據滄波而掩蛟龍，未易依蕙帳而友猿鶴。載念伊蘭之世，冀一現於優曇，計
其師子之家，當盡接其種類，歸來及早，慰我同門。此話江湖競傳之時，自得暉交代，然曇賦
性坦率，不事拘檢，在竹院日，復以酒事遭太守林侍郎追至，出對與之曰：酒曇過界住無爲，
而無所不爲，蓋曇曾住無爲故也。而曇卒不能對，復爲林流過丹丘，二年回寶奎，一日沐浴
更衣，請史魏公叙平日行紀，談笑中而化。闔城士俗皆送之茶毘，獲舍利無數。

唐虞世南，通曆有問曰：梁武夷凶，剪暴克成，帝業南而君臨，五十餘載，蓋有文武之道焉。至于
留心釋典，桑門比行，以萬乘之君爲匹夫之善，熏修不保，危亡已及，豈其之所非耶？何福謙
之無効？先生對云：夫釋教者，出世之津梁，絕塵之軌躅，運於方寸之間，超於有無之表，塵累

既盡，攀緣已息，然後入於解脫之門。至於化俗之法，則有布施持戒忍辱精進禪定智慧，是
爲六波羅密，與夫仁義禮智信，亦何異哉？蓋以所修爲因，所報爲果，人修此六行，皆多不全，
有一缺焉，果亦隨滅，是以釀明醜於貌，慧於心，趙一高於才，下於位，羅褒福而無義，愿憲貧
而有道，其不同也。如斯懸絕，與喪得失，咸必由之。下士庸夫，見比干之剖心，以爲忠直不必
爲也，聞偃王之亡國，以爲仁義不足法也。若然者，盜跖高枕於東陵，莊躡懸車於西蜀，老終
厥命，良足貴乎？又問曰：周武帝毀滅二教，是耶非耶？先生曰：非耶，或曰：請問其說。先生曰：釋
氏之法，則是空有無滯，人我兼忘，超出生死，歸於寂滅，此象外之談也。老氏之義，則谷神不
死，玄牝長存，長生久視，騰雲駕鶴，此區中之教也。至於止惡尙仁，勝殘去殺，並有益於王化，
無乖於俗典，今以常僧犯律，道士遺經，便謂其教可棄，其言可絕，何異責樗枿而廢堯，怨有
苗而黜禹，見瓠子泛濫，遠塞河源，觀崑嶽方偶，遽投金燧，曾而不知潤下之德，有利已深，變
腥之用，其功甚博，并蛙觀海，踞於所見，輪回長夜之迷，自貽沈溺之苦，疑悞後學，良可痛哉。
雲居如號雲中，受經於台之護國，在雲屋最久，上堂云：山下熱如火，山間涼似秋，得居山上者，
知是幾生修。卓拄杖云：急著眼腦。

佛印示衆云：莫挂袈裟便要閑，七條中有鐵圍山，幾多放逸縱橫者，失却人身瞬息間。
前輩贊佛祖偈句，并自贊語，各有於式，今之例多杜撰，如自贊亦如贊佛祖之語，良可咲耶。唯
密庵最得其體，贊云：在家不讀書，行脚不參禪，隨流閑打悶，掘地覓青天。如今老矣空追悔，
捨人痛處力加鞭，塗毒亦云：眼睛耳恒聾，鼯鼠技已窮，要見巖中主，白雲千萬重。咄！具眼者

宜辨之。

佛心才示衆云：三千劍客獨許莊周，百萬風毛點也自肯，若也兩頭坐斷，中間不留，只是打淨潔毳子，未知向上一竅，若也隨波逐浪，帶水拖泥，孤負己靈，未具頂門正眼，總不恁麼，又作麼生，不入驚人浪，難逢稱意魚。又云：寶劍不失，虛舟不刻，朝游羅浮，暮歸檀特，若謂本光之地理合如斯，正是坐井觀天，持蠶酌海，若謂言發非聲，色前非物，非唯迷宗，亦乃失旨，宗明旨的，又作麼生，密把鴛鴦閑綉出，從他人自覓金針。

長蘆祖照禪師道和蒲陽人，初負篋至京，有中貴見之，姿質不凡，以度牒與之，和不受，自謂同學曰：吾大丈夫，豈可出他黃門之下，苟一旦受其恩，則終身被其攔絆，吾佛幸有廣大法門，又國家開發人之路，吾當自勉勵，因銳志誦法華經，當年於試經得度，爲大僧，徧見諸方，後住長蘆，座下常滿千衆，真歇了自丹霞會下來，時年尚幼，和見其敏利，令首衆，後退院與之，意其承嗣，及拈衣乃云：得法丹霞室，傳衣祖照庭，恩深轉無語，懷抱自分明，和不樂，下座抵奪其衣，了自此終身不搭法衣，竟嗣丹霞淳，江湖有識者，皆雅其不忘本也。

或庵示衆云：紹興初，山野色力强壯，所至撥艸瞻風，見善知識，懸挂盞，擊節扣關，莫不忘滄廢寢，寅夜不輟，又得偉人，哲匠朝暮不倦，苦口點化，錐筍尚收，拾舊貨，不得上手，況當今之際，在處叢林，據位禪師者，但占名字，陞堂入室，聊表不空，師家見學者，學者見師家，邪正不分，互相濕漉，更說甚麼一言半句，超脫常情，到大不疑安樂田地，拈斷貫索，穿天下人鼻孔，大道相將滅也，間有負笈擔簦，寄人烟燭之下，多是求飽暖溫，和游泳外典，圖資談柄而已。

正宗下事，杜口不講，加之尸席望剝，有福緣，趁陪上位，結識貴人，以爲外護，得其自便之計，遂致習以成風，遞相倣效，鮮有知非者，衆中本色黃面老衲，雖證道果，密追古風，退步潛藏，守分不能親近，權貴無力救弊，冷處危坐，袖手想見點頭，咨嗟其荒寒薄伎，紛紜耳，願得具眼正，因有力量上人，努力猛省，圖遠不圖近，於己躬下，了辨西來不傳之妙，施設凡聖不測之機，異日他時，爲後輩作則，免有鈴鐸道路千里之嘆，耶，明眼人前吐露胸臆，亦望痛念祖道下衰，踴躍高舉，六合之外，貴得英衲子，光明於世，千古萬古之下，金剛王寶劍，凜凜不墜矣。

東坡到京口，佛印渡江，謁見坡云：趙州昔日不下禪牀，金山因甚今日渡江，佛印以頌答曰：趙州昔日缺謙光，不下禪牀接二王，爭似金山無量相，大千沙界是禪牀。

曾文清公贛州人，乃寶文侍郎天游之弟，於宗門甚進步，與心聞禪師爲方外友，嘗有世尊拈華一頌，江湖多賞之，頌曰：華枝拈起，大家看，迦葉無端却破顏，從此春光都漏泄，桃紅李白滿人間，又贊心聞像曰：是心聞叟，寂然無聲，非心聞叟，儼然其形，視之非無，聽之非有，能如是觀，非心聞叟。

婺州靈應法淨講主，因被晚學搗其院事，告於葉丞相，以求借援，葉回書云：專使辱書，勲勳知公與余先世之契，同里巷桑梓，詢之同袍，知公是本分講人，住靈應四十年，變瓦礫之場爲輪奐，使魚鼓之聲歲晚不絕，可謂肯興供養於寺院，出臂力寶殿崇成之際，乃爲破戒後學，起貪癡心，巧計攘奪，怪公不得使終圓勝事，若以世情論來，鵠有巢而鳩居之，誠難堪處，若

以公分上觀之，身非我有，萬法皆如夢幻，則靈應道場亦豈是公久居活計，所以古人道住則孤鶴冷翹松頂，去則片雲忽過人間，去住灑然，何有拘礙，要當住而未嘗不住，方知是去住底人，又況一飲一啄皆自前定，或行或止，豈是人爲，毋有意必同異，若如此境界不能洞然明白，則末後一著，未免拖泥帶水，此去便好青松下明窓內安坐不動了自家大事，因緣誠爲得計，若欲借一言於五馬，有挾山超海之難，能悟萬法皆空，於公有變凡成聖之易，其或未然，快請腰包急去，防他新婦底。

混源密台人，嗣龜山光狀元，俗素貧，然守分不自張大，自浮山遷大舍，道由俗舍，將見其弟昆，戒約人從，勿過其家，唯帶親隨一二人而已，又曰：若見我兄，切勿聲諾，恐驚他村人也，其願分如此，有頌曰：托迹來蓬屋，三椽種不深，如何微賤質，也解震雷音，種粟不生豆，拈鉛却是金，只因誤失脚，終不落沈吟，叢林皆服其識度高遠，與夫詐稱張王李趙，豈可同日而語哉，故監部甄公龍文爲龍翔疏，請密公曰：十三人透洋嶼之關，先爲上首，二千里赴黃梅之蓋，密在汝邊，可謂正法克膺，公選某人，脚跟峭措，眼腦玲瓏，起紫籜說洪福之禪，諸方山仰，過石橋持七閩之盞，萬禱雲隨，唯六龍曾御於中州，故二潮獨誇於勝刹，次當補處，宜莫放公孤嶼而住，兩峰話頭在在，一句而涵三要，衆目團團，後被旨住西湖淨慈。

紹興間，象田梵卿禪師秀之華亭錢氏子，初參圓通秀投子青，次見昭覺總，有契，上堂云：春已寒，落華紛紛下紅雨，南北行人歸不歸，千林萬林鳴杜宇，我無家兮何處歸，十方刹土奚相依，老夫有箇真消息，昨夜三更月在池。

慈恩法師唐尉遲將軍之子也，始年十歲能造戰策，父賢之，玄非以計欲其出家，以大教乘，密竊其所造戰策，教小行者，諷之，携訪遲，遲極口稱賞其子善能作文，非請一看，而乃曰：此文者小行童亦能誦之，遲驚呼來誦之，果不差一字，遲大怒，此子以古文誑戲，即欲誅之，非師告云：佛有救護衆生之說，若君不救，吾非佛弟子矣，可捨出家，何如，遲從，用是非師得之，卽爲大僧，衆莫能及，常對御講論，賜以玉環，見天子更不致禮，但入出有經論酒食婦女之三車，隨行，宣公服而疑之，法師亦薄其小乘，而疑其神供之說，一日訪宣，特求天供，語論終日，而不見其供，法師歸後，初至，宣公責之，非時而到何也，神告曰：非懈怠也，今日師與大乘菩薩議論，毫光罩定徧界，竟無路得入，從此更傾心敬之，故知大乘所非小根之能測底也。

遜庵演闔人，初見元枯木，後參妙喜於徑山，與最庵印同庵，集大慧廣錄三十卷，盛行于世，慧旣沒，演不復出遊，一禱寒暑，居經三十年，數董板首，闔帥趙汝愚待以福之秀峰，堅臥不起，別峰作疏勸請，有幽蘭林下豈無人而不芳，至寶道中蓋具眼而始識之句，一時罔不高其節，暮年竟被塗毒，推出於常之華嚴，一坐十九年，法席盛興於三吳，其乃緣法有地耳，最庵印川人，初依寂室，後參大慧，出世京口鶴林，自贊云：克體委贏，當行藟苴，袖手儼然，可知禮也，美惡猶來不自裁，參方分付俯觀也。

榮陽郡王初居嘉禾，官職未登，家居零落，時誰庵粹禪師住報恩，與王交遊，凡有所疑，靡不應對，及孝宗卽位，王累開大藩，以諸方名利多命粹主之，晚請何山爲功德寺，亦命粹主之，特賜紫服，圓悟禪師其子孫亦爲大法金湯，謂是互乘大願力來者也。

叢林盛事卷下終

予昔首衆於五峰時古月融禪師實典賓職既叨同事日數從遊爲山間水邊之樂續以業緣來居青山逾十年矣一日翩然過我坐間娓娓談前言往行頗清老懷徐出叢林盛事一篇皆命世宗師與賢士大夫酬酢更唱之語誠可以警後學而補宗教大率與先師武庫相類殆將鈔梓以惠後世其利豈不博哉因援筆以題于後

慶元己未

華藏遜庵宗演跋

國譯高麗國普照國師修心訣

解題

修心訣一卷は、高麗國佛日普照國師の著なり。國師は朝鮮に於ける禪宗の始祖とも稱すべき人にして、此の書、説く所、極めて簡なりと雖も、よく宗旨の蘊を盡して餘す所なし。

傳を按ずるに師諱は知訥、京西洞州(今之興寧)の人なり。嘗て自ら牧牛子と號す。俗姓は鄭氏、生れて多病なり、父光遇、佛に禱る、尋で瘡ゆ。年八歳にして曹溪の宗暉禪師に投じて得度す。學に常師なし、而も志氣超邁群を超ゆ。年二十五にして擧僧の選に當り、又南遊して昌平の清源寺に抵り錫を留む。一日學寮に於て六祖壇經を讀み感悟する所あり、これより心に名利を厭ひ山林に棲息せんことを希ふ。大定二十五年、下柯山に遊び普門寺に寓して大藏經を讀み、承安二年に至り智異山に上り無住庵に隱る。境致の幽寂天下に甲たり、眞に安禪の住處なり、是に於て専ら内觀を修す。一日大慧普覺禪師の語録を讀み、忽然として契會あり、爾しより慧解愈々高く、衆の歸仰する所となる。五年、居を松廣山吉祥寺に移し禪を修し道を談すること十一年、専ら佛律に依つて安居す。常に人に勸めて金剛經を誦せしめ、又六祖壇經、大慧語録等を講じて宗要を發揮す、故に禪學蔚として盛に興る。億寶山

の白雲精舍、積翠庵、瑞石山の圭峯蘭若、祖月庵等は皆師の作る所にして往來修禪の地なり。主上深く其徳を重んじ改めて曹溪山修禪社と號せしめ、親しく題榜を書して賜ふ。尋で又定慧社を建て定慧結社文を撰す、蓋し初志を償ふなり。後に同稱のものあり即ち朝旨を受けて修禪社と改む、名は異なりと雖も義は一なり、師の志、定慧にあることは是くの如し。大安二年二月、法筵を設け社衆に告げて曰く、「吾れ住世久しからず各々努力すべし」と、三月二十日微疾あり、二十七日に至り衣を更め、歩いて善法堂に入り祝香陞座、問答了つて床に踞して動かす泊然として寂す。主上之を聞き諡して佛日普照國師と賜ひ、塔を甘露といふ。世壽五十三、法臘三十六。平生の著述に結社文、上堂法語、歌頌等各一卷あり。宗旨を發揚して威觀るべきものあり。蓋し朝鮮の禪宗は高麗の中世以後、曹溪宗と稱し、普照以後、眞覺國師、圓鑑國師、無學禪師の如き、拔群の僧を出したるは、一に佛日普照國師の餘徳なり。

國譯高麗國 普照禪師修心訣

① 三界の熱惱、猶ほ火宅の如し、其れ淹留して甘んじて長苦を受くるに忍びんや。轉廻を免れんと欲せば、佛を求むるにしくはなし。若し佛を求めんと欲せば、佛即ち是れ心なり、心何を遠く覓めん、身中を離れず。色身は是れ假、生有り滅有り、真心は空の如く、斷せず變せず。故に云ふ、「百骸潰散して、火に歸し風に歸す、一物長へに靈にして、天を蓋ひ地を蓋ふ」と。嗟夫、今の人、迷ひ來ること久し。自心是れ眞佛なることを知らず、自性是れ眞法なることを知らず。法を求めんと欲して、遠く諸聖に推り、佛を求めんと欲して、己心を觀せず。若し心外に佛あり、性外に法ありと言つて、此の情を堅執して、佛道を求めんと欲せば、縦ひ塵劫を経て身を焼き臂を鍊り、骨を敲き髓を出し、血を刺して經を寫し、長座不臥、一食卵齋し、乃至一大藏經を轉讀し、種々の苦行を修すとも、沙を蒸して飯と作すが如し、只益自ら勞するのみ。但自心を識れば、

① 普照禪師。略傳は解題にあり。
② 三界とは欲界、色界、無色界なり。一切衆生の生死輪廻する迷界の三種なり。
③ 火宅。法華經譬喻品に曰く、「三界無不安、猶如三火宅、衆苦充滿、甚可怖畏。」
④ 淹は滯也、又久留也。
⑤ 輪廻。車輪の廻るが如く轉々として迷界に生死を重ぬるを云ふ。
⑥ 色身。肉體のこと。
⑦ 火に歸し風に歸すは、色身は地水火風の四大の和合より成る、故に其の滅する時は元の四大に歸するを云ふ。
⑧ 塵劫。極めて長き時間を云ふ。
⑨ 長座不臥。常に坐禪して橫臥

恒沙の法門、無量の妙義、求めずして得。故に世尊云く、「普く一切衆生を觀するに、具に如來の智慧徳相あり。」又云く、「一切衆生種々の幻化は、皆如來圓覺の妙心より生ず」と。是に知んぬ、此の心を離れて外、佛の成すべきなし。過去の諸如來、只是れ明心底の人なり、現在の諸賢聖も、亦是れ修心底の人なり。未來修學の人、當に是くの如き法に依るべし。願はくは、諸の修道の人、切に外に求むること莫れ。心性無染、本自ら圓成す。但妄縁を離るれば、即ち如々佛なり。問ふ、「若し佛性、現に此の身に在りと言はば、既に身中にあれば凡夫を離れず。何に因つてか、我れ今佛性を見ざるや。更に爲めに消釋して、悉く開悟せしめよ。」答ふ、「汝が身中に在り、汝自ら見ず。汝十二時中に於て飢を知り渴を知り、寒を知り熱を知り、或は瞋り或は喜ぶ。竟に是れ何物ぞ。且く色身は是れ地水火風四縁の集る所、其の質頑にして情なし、豈能く見聞覺知せんや。能く見聞覺知するものは、必ず是れ汝が佛性なり。故に臨濟の云く、『四大說法聽法を解せず、虚空說法聽法を解せず、只汝が目前歷々孤明、形段なき者、始めて說法聽法を解す』と。謂ゆる形段なきものは、是れ諸佛の法印

- ① 一食卯齋。大集經に曰く、「卯時に齋をなす人は、八萬四千劫の糧を得云」と。齋とは正午以前にする正食なり。
- ② 恒沙。恒河の沙なり、恒河の沙は極めて微細にして多し、算數の及ばざる多數を譬ふ。
- ③ 世尊は佛の十號の一なり、佛は能く一切の法に通じ、智徳兼れ備はるが故に、世に尊敬せらるる故に世尊と云ふ。
- ④ 如來も又佛十號の一なり、眞如より來生するが故に云ふ、因に十號とは、如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士調御丈夫、天人師、佛、世尊、是れなり。
- ⑤ 幻化。如幻虛化なり。
- ⑥ 如は本來變異なき義なり。
- ⑦ 臨濟は臨濟宗祖惠照禪師。
- ⑧ 四大。地水火風なり、此四の

なり、亦是れ汝が本來の心なり。即ち佛性現に汝が身にあり、何ぞ外に求むることを假らん。汝若し信せずんば、略して古聖入道の因縁を擧して、汝をして疑を除かしめん。汝須らく諦信すべし。昔、異見王、婆羅提尊者に問うて曰く、「何者か是れ佛。」尊者曰く、「見性は是れ佛。」王曰く、「師見性するや否や。」尊者曰く、「我れ佛性を見る。」王曰く、「性何れの處にか在る。」尊者曰く、「性作用にあり。」王曰く、「是れ何の作用ぞ、今見ざる。」尊者曰く、「今見に作用す、王自ら見ず。」王曰く、「我れに於て有りや否や。」尊者曰く、「王若し作用せば、是ならざること、有ることなし。王若し用ひずんば、體亦見ること難し。」王曰く、「若し用ふる時に當りて幾所にか出現す。」尊者曰く、「若し出現の時は當に其の八あるべし。」王曰く、「其の八の出現當に我が爲めに説くべし。」尊者曰く、「胎に在つては身と曰ひ、世に處しては人と曰ひ、眼に在つては見と曰ひ、耳に在つては聞と曰ひ、鼻に在つては香を辨じ、舌に在つては談論し、手に在つては執捉し、足に在つては運奔す。徧現すれば俱に沙界を該ね、收攝すれば一微塵に在り。識る者は是れ佛性と知る、識らざるものは喚んで精魂となす。」王聞いて心即ち開悟す。又僧、歸宗和尚に問ふ、「如何なるか是れ佛。」宗曰く、「我れ今汝に向つて道はん、恐らくは汝信せし。」僧云く、「和尚の誠言焉ぞ敢て信せざらん。」師曰く、「即ち汝是れなり。」僧云く、「如何が保任せん。」師云く、「一翳眼にあれば空華亂墜す。」其の僧言下に省あり。

者は一切の物を構成する大作用あるが故に大と稱す。
 ⑨ 諦信とは諦聽信受なり。
 ⑩ 見性。自己本具の佛性を徹見するを云ふ。
 ⑪ 歸宗和尚。廬山歸宗智常禪師は、馬祖道一禪師に嗣法す。

上來擧する所の、古聖入道の因縁、明白簡易にして、妨げず省力なることを。此の公案に因つて、若し信解の處有らば、即ち古聖と手を把つて共に行かん。問ふ、「汝見性すと言ふ、若し眞に見性せば、即ち是れ聖人なり。神通變化を現じて、人と殊なることあるべし。何が故ぞ、今時修心の輩、一人の神通變化を發現するあることなきや。」答ふ、「汝輕々しく狂言を發することを得ざれ。正邪分たざる是れを迷倒の人となす。今時學道の人、口に眞理を談じて、心に退屈を生じ、返つて分なきの失に墮するものは、皆汝が疑ふ所なり。道を學して先後を知らず、理を説いて本末を分たざるもの、是れを邪見と名けて、修學と名けず。唯自ら誤るのみにあらず、兼ねて亦他を誤る。其れ慎まざるべけんや。夫れ入道多門なれども、要を以て之を言へば、頓悟漸修の兩門を出でざるのみ。頓悟頓修は、是れ最上機根のもの入るを得と曰ふと雖も、若し過去を推せば、已に是れ多生、悟に依つて修し、漸熏して來り、今生に至りて、聞いて即ち發悟し、一時に頓に畢る。實を以て論せば、是れ亦先悟後修の機なり。即ち知んぬ、此の頓漸の兩門は、是れ千聖の軌轍なり。故に従上の諸聖、先に悟り後に修し、

① 空華。かすめる眼にて空中のぞめば、華ある如く見ゆること、煩惱のために種々の妄境を見るに喩へて云ふ。
 ② 省は省悟なり。
 ③ 公案とは禪宗に於て求道者に授けて工夫せしむる問題のこと、公府の案牘の如く、一切のこと之に依りて必ず處理するを要するの意を取りて喚ぶなり。
 ④ 神通。神變不思議にして自在無礙なる働きを云ふ、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通、是れを六神通と云ふ。
 ⑤ 頓悟漸修。頓悟とは楷梯次第を経ず、直に佛果を悟るを云ふ。漸修とは漸々に道を修行して次第に覺位に入るを云ふ。

修に因つて乃ち證せざることなし。言ふ所の神通變化は悟に依りて修し、漸熏して現する所なり、悟の時即ち發現すと謂ふにあらず。經に云ふが如き、「理は即ち頓に悟る、悟に乗じて併せ消す、事は頓に除くにあらず、次第に因つて盡す」と。故に圭峯深く先悟後修の義を明らかにめて曰く、「冰池の全く水なるを知りて、陽氣を借りて以て鎔消し、凡夫の即ち佛なるを悟つて、法力に資つて以て薰修す。冰消すれば即ち水流潤して、方に既滌の功を呈し、妄盡れば即ち心虛通じて、應に通光の用を現すべし。」と、是に知んぬ、事上の神通變化は、一日に能く成するにあらず、乃ち漸熏して發現することを。況んや事上の神通は、達人分上に於て、猶ほ妖怪の事となす、亦是れ聖末邊の事なり。或は之を現すと雖も、要用とすべからず。今時迷癡の輩、妄りに謂く、「一念悟る時、即ち隨つて無量の妙用神通變化を現す」と。若し是の解を作さば、所謂先後を知らず、亦本末を分たざるなり。既に先後本末を知らざれば、佛道を求めんと欲すとも、方木を以て圓孔を返すが如し、豈大錯にあらずや。既に方便を知らず、故に懸崖の想をなして、自ら退屈を生じ、佛種性を斷するもの、多からずとせず。既に自ら未だ明かならざれば、亦未だ他の既に解悟の處あるを信せず。神通なきものは、乃ち輕慢を生じ、賢を欺き聖を誑かす、良に悲しむべきかな。問ふ、「汝頓悟漸修の兩門は、千聖の軌範なりと言ふ。悟既に頓悟す、何ぞ漸修を假らん。修若し

⑥ 薰。香が他物に其香を移して之を香ばしくするが如く、薰染して其性を變するを云ふ。
 ⑦ 圭峰宗密禪師は華嚴を清涼に學び、又道圓に従ふて禪を修す、原人論等の著あり。
 ⑧ 懸崖の想。危險に思ふなり。

漸修せば、何ぞ頓悟と言はん。頓漸の二義、更に爲めに宣説して、餘疑を斷せしめよ。答ふ、「頓悟とは、凡夫迷ふ時、四大を身となし、妄想を心となす。自性はれ眞法身なりと知らず、自己の靈知はれ眞佛なりと知らず。心外に佛を覓む。波々浪走、忽ち善知識に、爾が入路を指されて、一念、廻光して、自ら本性を見る。而るに此の性地は、元煩惱なく、無漏の智性、もと自ら具足す。即ち諸佛と分毫も殊ならず。故に頓悟と云ふ。漸修とは、頓に本性佛と殊なる無しと悟れども、無始の習氣、卒かに頓に除き難し。故に悟に依つて修し、漸熏功成りて、聖胎を長養し、久々にして聖を成す、故に漸修と云ふ。比へば孩子初生の日、諸根具足して、他と異なる無し。然れども其の力未だ充たず、頗る歲月を経て、方に始めて人と成るが如し。」問ふ、「何の方便を作して、一念、機を廻らして、便ち自性を悟らん。」答ふ、「只だ汝が自心なり、更に什麼の方便をか作さん。若し方便を作して、更に解會を求めば、比へば人有り、自眼を見ずして、以て眼なしと謂つて、更に見んことを求めんと欲するが如し。既に是れ自眼なり、如何ぞ更に見ん。若し失せずと知れば、即ち眼を見るとなす、更に見んことを求むるの心なからん、豈見ざるの想あらんや、自己の靈知、亦復た是くの如し。既に是れ自心なり、何ぞ更に會を求めん。若し會を求めんと欲せば、便ち會し得ず。但だ會せずと

- ② 迴光。外の萬法を照し見る智慧の光を廻らして、自らの佛性を見るなり。
- ③ 無漏とは煩惱妄想を離脱せるを云ふ。
- ④ 習氣。薰染せられたる煩惱の餘習なり。
- ⑤ 聖胎長養。悟後の修養なり。
- ⑥ 解會は領解會得なり。
- ⑦ 會は領解なり。

知れば、是れ即ち見性なり。問ふ。「上々の人は、聞いて即ち會し易し、中下の人は、疑惑なきにあらす。更に方便を設けて、迷者をして趣入せしめよ。」答ふ。「道は知不知に屬せず。汝迷を將つて悟を待つ心のを除却して、我が言説を聽け。諸法は夢の如く、亦幻化の如し。故に妄念もと寂、塵境もと空なり。諸法皆空の處、靈知不昧なり。即ち此の空寂靈知の心、是れ汝が本來の面目、亦是れ三世諸佛、歷代の祖師、天下の善知識、密々相傳底の法印なり。若し此の心を悟れば眞に所謂楷梯を踐ますして、徑ちに佛地に登る。歩々三界を超え、家に歸つて頓に疑を絶するなり。便ち人天の爲めに師となり、悲智相資けて、二利を具足す。人天の供養を受け、日に萬兩の黄金を消するに堪へたり。汝若し是くの如くならば、眞に大丈夫なり、一生の能事已に畢はんぬ。問ふ。「吾が分上に據れば、何者か是れ空寂靈知の心なるや。」答ふ。「汝が今我れに問ふ者、是れ汝が空寂靈知の心なり。何ぞ返照せずして、猶ほ外に覓むることをなすや。我れ今汝が分上に據つて、直に本心を指して、汝をして便ち悟らしめん。汝須らく淨心に、我が言説を聽くべし。朝より暮に至る、十二時中、或は見、或は聞き、或は笑ひ、或は語り、或は瞋り、或は喜び、或は是、或は非、種々の施爲運轉、且く道へ、畢竟是れ誰か能く。伊麼に運轉施爲するや。若し色身運轉すと

- ① 塵境とは眼、耳、鼻、舌、身、意の六根の對境となる色、聲、香、味、觸、法の六境を云ふ、是等は心神を汚し、眞性を昏ますものなるが故に塵と云ふ。
- ② 家に歸る。迷界の流浪より覺界の家郷に歸るなり。
- ③ 悲智は慈悲と智慧。
- ④ 二利は自利と利他。
- ⑤ 伊麼は左様、または斯様等に同じ。

言はゞ、何が故ぞ、人あつて一念命終して、都て未だ壞爛せざるに、即ち眼見ることを得ず、耳聞くこと能はず、鼻香を辨せず、舌談論せず、身動搖せず、手執捉せず、足運奔せざるや。是に知んぬ、能く見聞動作するは、必ず是れ汝が本心にして、是れ汝が色身にあらす。況んや此の色身は、四大性空にして、鏡中の像の如く、亦水月の如し。豈能く了々として常に知り、明々として味からず、感じて遂に通じ、恒沙の妙用あらんや。故に云ふ『神通并に妙用、水運び及び柴を搬ぶ』と。且く入理多端なれども、汝に一門を指して、汝をして源に還らしめん。汝還つて鴉鳴鶴噪の聲を聞かや。』曰く、『聞く。』曰く、『汝が聞性を返聞するに、還つて許多の聲ありや。』曰く、『這裏に到つて、一切の聲、一切の分別、俱に不可得なり。』曰く、『奇なる哉、奇なる哉。此は是れ觀音入理の門なり。我れ更に汝に問はん、汝道ふ、這裏に到つて、一切の聲、一切の分別、總に不可得なりと。既に不可得ならば、伊麼の時に當りて、是れ虚空なることなしや。』曰く、『元來空ならず、明々として味からず。』曰く、『作麼生か、是れ不空の體なる。』曰く、『亦相貌なし、之を言ふに及ぶべからず。』曰く、『此は是れ諸佛諸祖の壽命なり、更に疑ふことなかれ。』既に相貌無くんば、還つて大小ありや。既に大小無くんば、還つて邊際ありや。邊際なきが故に内外なし。内外なきが故に遠近なし。遠近なきが故に彼此なし。彼此なければ則ち往來なし。往來無ければ則ち生死なし。生死なければ則ち古今なし。古

① 水月は水中の月影なり。
 ② 平生の云爲動作、盡く是れ神通妙用に外ならざるを云ふ。
 ③ 作麼生。如何に同じ、支那の俚言なり。

今無ければ則ち迷悟なし。迷悟なければ則ち凡聖なし。凡聖なければ則ち染淨なし。染淨なければ則ち是非なし。是非なければ則ち一切の名言、俱に不可得なり。既に總じて是くの如き一切の根境、一切の妄念無く、乃至種々の相貌、種々の名言、俱に不可得なり。此れ豈本來空寂、本來無物にあらずや。然るに諸法皆空の處、靈知味からず、無情に同じからず、性自ら神解す。此れは是れ汝が空寂靈知、清淨の心體なり。而るに此の清淨空寂の心は、是れ三世諸佛の勝淨妙心なり。亦是れ衆生本源的覺性なり。此れを悟つて之を守るものは、一如に坐して、動せずして解脱す。此れに迷ふて之に背くものは、六趣に往いて、長劫輪廻す。故に云く、『一心に迷ふて、六趣に往く者は、去なり動なり。法界を悟つて、一心に復するものは、來なり靜なり。』迷悟の殊なりありと雖も、本源は則ち一なり。所以に云ふ、『言ふ所の法とは、謂く、衆生の心なり』と。而るに此の空寂の心、聖に在れども増さず、凡にあれども減せず。故に云く、『聖智に在れども耀かず、凡心に隠るれども味からず』既に聖に増さず、凡に少けず。佛祖奚んぞ以て、人に異ならんや。而るに人に異なる所以は、能く自ら心念を護するのみ。汝若し信得及して、疑情頓に息み、丈夫の志を出し、眞正の見解を發し、親しく其の味を嘗めて、自ら自肯の地に到らば、則ち是れを

① 名言は名字言句なり。
 ② 一如。一は絕對唯一、如は平等無差別の義なり、即ち絕對平等の眞如法性を云ふ。
 ③ 六趣は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六種の世界なり、一切の衆生此中に轉々として生死輪廻す。
 ④ 法界。宇宙なり、又眞如萬有の本體なり。
 ⑤ 自肯の地。他の説明を待たず、自ら肯ひ自ら信じ得る大悟大信の境界なり。

修心の人、解悟の處となす、更に階級次第なし、故に頓と云ふなり。云ふが如き信因の中に於て、諸佛の果徳に契ふて、分毫も殊ならず、方に信を成す」と。問ふ、「既に此の理を悟つて、更に階級なくんば、何ぞ後修を假つて、漸に薰じ漸に成するや。」答ふ、「悟後漸修の義、前に已に具に説く。而るに復た疑情未だ釋けずんば、重説することを妨げず。汝須らく淨心に、諦聽々々すべし。凡夫無始曠大劫よりこのかた、今日に至るまで、五道に流轉して、生來死去す。我相を堅執する、妄想顛倒無明積習して、久しくして性と成る。今生に到つて、頓に自性本來空寂にして、佛と殊なること無しと悟ると雖も、而も此の舊習、卒かに除斷し難し。故に逆順の境に逢へば、瞋喜是非、熾然として起滅し、客塵煩惱、前と異なる無し。若し般若の中に於て功力を著けずんば、焉んぞ能く無明を對治して、大休大歇の地に到ることを得ん。云ふが如き頓悟、佛に同じと雖も、多生の習氣深し。風停つて波尚ほ湧き、理現じて念猶ほ侵す。又、杲禪師云く、「往々に利根の輩、多力を費さずして、此事を打發す。便ち容易の心を生じて、更に修治せず。日久しく月深くして、前に依つて流浪して、未だ輪廻を免れず」と。則ち豈、一期の所期を以て、便

一〇

- ⑤ 五道。地獄、餓鬼、畜生、人間、天上の五種の迷界なり。
- ⑥ 客塵は煩惱の異名なり、煩惱は微細にして數多く、且つ汚れたるが故に塵と云ふ、衆生の心に本來具有にあらざるが故に客と云ふ。
- ⑦ 般若は梵語、譯して智慧と云ふ。
- ⑧ 無明。根本煩惱なり。
- ⑨ 休歇の地。究竟大安樂の境界なり。
- ⑩ 杲禪師。徑山大惠宗果は圓悟克勤に嗣法す、大惠書、大惠武庫等の書、禪門に重んぜらる、又師圓悟の碧巖錄を一炬に付したるは、以て其機鋒の尋常にあらざるを知るべし。

ち後修を撥置すべけんや。故に悟後長へに須らく照察すべし。妄念忽ち起らば、都て之に隨はざれ。之を損し又損して、以て無爲に至つて、方に始めて究竟す。天下の善知識、悟後の牧牛行是れなり。後修ありと雖も、已に先に頓に、妄念もと空、心性もと淨なることを悟れば、惡に於て斷じ、斷すれども斷なく、善に於て修し、修すれども修なし。此れ乃ち眞修眞斷なり。故に云く、備に萬行を修すと雖も、唯無念を以て宗となす。圭峯總じて先悟後修の義を判じて云く、「頓に此の性元煩惱なく、無漏の智性も自ら具足して、佛と殊なるなしと悟つて、此れに依つて修するもの、是れを最上乘の禪と名く、亦如來清淨の禪と名く。若し能く念々修習すれば、自然に漸く百千の三昧を得。達磨門下、轉々相承するものは、是れ此の禪なり」と。則ち頓悟漸修の義、車の二輪の如く、一を闕けば不可なり。或は善惡性空を知らず、堅坐して動せず、身心を捺伏して、石の草を壓すが如きを以て修心となす。是れ大惑なり。故に云く、「聲聞は心々斷惑す、能斷の心是れ賊なり。但諦かに殺盜淫妄、性よりして起る。起即ち無起なりと觀すれば、當處即ち寂なり。何ぞ更に斷することを須ひん。」所以に云く、「念の起るを怕れず。唯覺の遅きを恐る」と。又云く、「念起れば即ち覺す。之を覺すれば即ち無し」と。故に悟人分上、客塵煩惱ありと雖も、

一一

- ① 撥置はゆるがせにするなり、さしおくなり。
- ② 損すはそこなひへらすなり。
- ③ 無爲。無常生滅の變化を受けざる本來常住の絕對境。
- ④ 牧牛行。野飼の牛を手馴らす如く聖胎長養すること。
- ⑤ 圭峰。宗密禪師、委しくは前に出づ。
- ⑥ 三昧又三摩地とも云ふ、梵語なり、譯して等持或は正心行處となす、心を一境に安住せしめて動ぜざるを云ふ。

俱に 醍醐を成す。但だ惑もと無しと照せば、空華の 三界、風の煙を巻くが如く、幻化の 六塵、湯の氷を消すが如し。若し能く是くの如く、念念修習して、照願を忘れず、定惠等持すれば、則ち愛惡自然に淡薄に、悲智自然に増明し、 皇業自然に斷除し、功行自然に増進す。煩惱盡くる時、生死即ち絶す。若し微細の流注永く斷じ、圓覺の大智、朗然として獨り存すれば、即ち百千億の化身を現じて、十方國中に於て、感に赴き機に應じて、月の九霄に現じて、影萬水に分るゝに似たり。應用無窮にして、有縁の衆生を度す。快樂にして憂なし。之を名けて大覺世尊となす。問ふ、「後修門の中、定惠等持の義、實に未だ明了ならず。更に爲に宣説し、委しく示して迷を開きて、解脱の門に引入せよ。」答ふ、「若し法義を説けば、入理千門なれども、定惠に非ざるることなし。其の綱要を取れば、則ち但だ自性の上の體用の二義なり。前に謂ゆる空寂靈知是れなり。定は是れ體なり、惠は是れ用なり。體に即する用なるが故に、惠は定を離れず。用に即する體なるが故に、定は惠を離れず。定即惠の故に、寂にして常に知なり。惠即定の故に、知にして常に寂なり。 曹溪の云ふが如き、「心地無亂は自性の定、心地無癡は自性の惠なり」と。若し是くの如きを悟れば、任運に寂知して遮炤無二なり。則ち是れを頓門箇の者の雙修定惠となす。

- ① 醍醐。五味中の最上なるもの、牛乳を精製して造る、五味とは乳、酪、生酥、熟酥、醍醐是れなり。
- ② 三界。欲界、色界、無色界なり。
- ③ 六塵。色、聲、香、味、觸、法の六境なり、塵の義は前に見えたり。
- ④ 定惠等持。定は禪定、惠は知惠、此二を並べ保つなり。
- ⑤ 曹溪は六祖大鑑惠能禪師。

若し先に 寂々を以て 縁慮を治し、後に 惺々を以て 昏住を治し、先後に對治して、 昏亂を均調して、以て靜に入ると言ふものは、是れを漸門劣機の所行となす。惺寂等持と云ふと雖も、未だ靜を取りて行とすることを免れず。則ち豈了事の人、本寂本知を離れずして、任運に雙修するものとなさんや。故に曹溪云く、「自悟の修行は、諍にあらず。若し先後を諍はゞ、即ち是れ迷人なり」と。則ち達人分上、定惠等持の義、功用に落ちず、元自ら無爲なり、更に特地の時節なし。見色聞聲の時、但だ伊麼。着衣喫飯の時、但だ伊麼。屙屎送尿の時、但だ伊麼。對人接話の時、但だ伊麼。乃至行住坐臥、或は語或は默、或は喜、或は怒、一切時中、一々に是くの如し。虚舟の浪に駕して、高きに隨ひ下きに隨ふに似たり。流水の山に轉じて、曲に遇ひ直に遇ふが如し。而して心々無知なり。今日騰々任運、明日任運騰々、衆縁に隨順して、障無く礙無し。善に於て惡に於て、斷せず修せず、質直無偽、視聽尋常なり。則ち一塵として對を作すを絶す、何ぞ遺蕩の功を勞せん。一念として情を生ずるなし、 忘縁の力を假らず。然るに障濃かに習重く、 觀劣に 心浮に、無明の力大に、般若の力小にして、善惡の境界に於て、未だ動靜に互換せられて、心恬淡ならざることを免れざる者は、忘縁遺蕩の功夫無きにあらず。云ふ

- ① 寂々は安靜不動なり。
- ② 縁慮。縁に應じて慮を生ずるは散亂の心なり。
- ③ 惺々は惺覺敏惠なるなり。
- ④ 昏住。心の昏く沈むこと。
- ⑤ 昏亂は昏沈と散亂の二心なり。
- ⑥ 遺蕩は遺逐掃蕩、即ち追ひ拂ふ也。
- ⑦ 忘縁。心を一所に制して外の諸縁に動かされざるなり。
- ⑧ 觀劣。觀法觀念の力弱きなり。
- ⑨ 心浮とは心浮薄にして、外の諸縁に動かされ易きなり。

が如き、^①六根^②境に接して心隨緣せざる、之を定と謂ひ、心境俱に空にして煇鑑感無き、之を惠と謂ふ」と。此は隨相門の定惠、漸門劣機の所行なりと雖も、而も對治門の中、無かるべからざるなり。若し^③掉舉熾盛なれば、則ち先に定門を以て、理に稱つて^④散を攝して心隨緣せず、本寂に契ふ。若し昏沈尤も多きは、則ち次に惠門を以て、法を擇し空を觀じて、照鑑感無く、本知に契ふ。定を以て亂想を治し、惠を以て無記を治し、動靜の相亡じ、對治の功終れば、則ち境に對して、念念宗に歸し、緣に遇ふて心々道に契ふ。任運に雙修して、方に無事の人となる。若し是くの如くなれば、則ち眞に定惠等持して、明かに佛性を見るものと謂つべし。問ふ、「汝が所判に據れば、悟後修門の中、定惠等持の義に二種あり。一に自性定惠、二に隨相定惠なり。自性門には則ち曰く、『任運に寂知して元自ら無爲、一塵として對を作すを絶す、何ぞ遺蕩の功を勞せん、一念として情を生ずるなし、忘緣の力を假らず。』判じて曰く、『此は是れ頓門、箇の者自性を離れず、定惠等持するなり。』隨相門には即ち曰く、『理に稱つて散を攝し、法を擇して空を觀じ、昏亂を均調して以て無爲に入る。』判じて曰く、『此は是れ漸門劣機の所行なり』と。而るに兩門の定惠、疑なきにあらず。若し一人の所行なりと言はゞ、復た先に自性門に依りて、定惠雙修して、然して後に更に隨相門對治

- ①六根は眼、耳、鼻、舌、身、意なり。
- ②六根の對象となるもの。
- ③掉舉、心氣の昂進して安靜ならざること。
- ④散は散亂心なり。
- ⑤昏沈、心の昏く沈むこと。
- ⑥無記、三性の一、善にも惡にもあらざる性質、即ち非善非惡の中間性のこと。

の功を用ふとなさんや。復た先に隨相門に依りて、昏亂を均調して、然して後に以て、自性門に入るとなさんや。若し先に自性の定惠に依らば、則ち任運に寂知して、更に對治の功無し。何ぞ更に隨相門の定惠を取らば、須ひん。皓玉を將つて、^①文を彫つて徳を喪ふが如し。若し先に隨相門の定惠を以て、對治功成りて、然して後に自性門に趣かば、則ち宛も是れ漸門中の劣機、悟前の漸薰なり。豈頓門箇の者の先悟後修、無功の功を用ふと云はんや。若し一時にして前後なくば、則ち二門の定惠、頓漸異有り、如何んぞ一時に並へ行せん。即ち頓門箇の者は、自性門に依りて任運に功を亡じ、漸門の劣機は、隨相門に趣きて、對治して功を勞す。二門の機、頓漸同じからず、優劣皎然たり。云く、何ぞ先悟後修門の中、二種を並べ釋するや。請ふ爲めに通會して、疑情を絶せしめよ。答ふ、所釋皎然たり、汝自ら疑を生ず。言に隨つて解を生ずれば、轉た疑惑を生ず。意を得て言を忘すれば、詰を致すことを勞せず。若し兩門に就きて、各所行を判すれば、則ち自性の定惠を修するものは、此は是れ頓門、無功の功を用ひ、並べ運じ並べ寂して、自ら自性を修し、自ら佛道を成する者なり。隨相門の定惠を修するものは、此は是れ未だ悟らざる前、漸門劣機、對治の功を用ひ、心々惑を斷じ、靜を取つて行とする者なり。而るに此の二門の行する所、頓漸各異にして、參亂すべからず。然るに悟後修門の中、兼ねて隨相門の中の對治を論することは、全く漸機の所行を取るにあらず、其の方便を取つて、道を假りて託宿するの

①文を彫るは彫刻を施すなり。

み。何が故ぞや、此の頓門に於て、亦機勝るゝ者あり、亦機劣なるものあり、一例して其の行季を判すべからず。若し煩惱淡薄に、身心輕安に、善に於て善を離れ、惡に於て惡を離れ、八風に動せず、三受に寂然たる者は自性の定惠に依つて、任運に雙修す。天真無作、動靜常に禪、自然の理を成就す。何ぞ隨相門對治の義を假らんや。病無ければ藥を求めず。先に頓悟すと雖も、煩惱濃厚に、習氣堅重にして、境に對して念々情を生じ、縁に遇ふて心々對を作す。他の混亂に、寂知常然を死殺し味却せらるる者は、即ち隨相門の定惠を借りて、對治を忘れず、混亂を均調して以て、無爲に入る、即ち其の宜しきなり。對治の功夫を借りて、暫く習氣を調すと雖も、先に頓に心性本淨、煩惱本空を悟るを以ての故に、即ち漸門劣機の汗染修に落ちず。何となれば、修、悟前にあれば、則ち功を用ひて忘せず。念々熏修すと雖も、著々疑を生じて、未だ礙無きこと能はず。一物有りて胸中に礙在するが如く、不安の相常に現在前す。日久しく月深くして、對治功熟すれば、則ち身心の客塵、恰も輕安に似たり。復た輕安なりと雖も、疑根未だ斷せず、石の草を壓すが如し。猶ほ生死界に於て、自在を得ず。故に云ふ、「修、悟前にあるは、眞修にあらず」と。悟人分上、對治の方便ありと雖も、念々疑無し、汗染に落ちず。日久しく月深くして、自然に天真の妙性に契合して、任運に寂知す。念々一切の境を

- ① 行季は行履なり、日常一切の行履履踐なり。
- ② 八風。利、衰、譽、毀、稱、譏、苦、樂の稱、此八種の法は心を煽動するが故に風と云ふ。
- ③ 三受。苦受、樂受、不苦不樂受(捨受)の稱、受とは感覺なり。
- ④ 客塵は煩惱の異名。

攀緣すれども、心々永く諸の煩惱を斷す。自性を離れずして、定惠等持して、無上菩提を成就す。前の機勝れたると、更に差別なし。則ち隨相門の定惠は、是れ漸機の所行なりと雖も、悟人分上に於て、鐵を點じて金となすと謂つべし。若し是くの如きを知れば、豈二門の定惠に於て、先後次第第二見の疑あらんや。願はくは諸の修道の人、此の語を研味して、更に狐疑して、自ら退屈を生ずること莫れ。若し丈夫の志を具して、無上菩提を求めんものは、此れを捨てて何を以てせんや。切に文を執すること莫れ、直に須らく義を了すべし。一々自己に歸就して、本宗に契合せば、則ち無師の智自然に現前し、天真の理了然として味からず、惠身を成就して、他に由つて悟らじ。然るに此の妙旨は、是れ諸人分上なりと雖も、若し夙に般若の種智を植ゑたる、大乘根器の者に非ずんば、一念をして正信を生ずること能はず。豈徒信せざるのみならんや、亦乃ち誘諭して、返つて無間を招く者、比々として之あり。信受せずと雖も、一たび耳にふれ、暫時も結縁すれば、其の功其の徳、稱量すべからず。唯心訣に云ふが如き、聞いて信せず、尙ほ佛種の因を結す。學んで成せず、猶ほ人天の福を益す。成佛の正因を失せず。況んや聞いて信じ、學んで成じ、守護して忘れざるものは、其の功德、豈能く度量せんや。過去輪廻の業

- ① 菩提は梵語、譯して智、道、覺等となす。
- ② 無師の智。他の注入によらず、自ら發明し自ら悟得する智惠。
- ③ 大乘根器。大乘甚深の教を信受し得る上々の根機。
- ④ 無間。八熱地獄の第八、梵語に阿鼻と云ふ、極苦の處にして苦に間斷なき故に此名あり、五逆罪を造り、因果をなみし、大乘を誹謗し、空しく信施を受くるもの此獄に入る。

を追念するに、其の幾千劫なるを知らず。黑暗に随つて無間に入り、種々の苦を受くる、又其の幾何なるを知らず。而るに佛道を求めんと欲すれども、善友に逢はず。長劫沈淪して、冥々として覺することなく、諸の惡業を造る。時に或は一たび思へば、覺えず長吁す。其れ放緩して、再び前殃を受くべけんや。又知らず誰か復た我をして、今人生に値はしむる、萬物の靈となり、修真の路に味からず、實に謂ゆる盲龜木に遇ひ、織芥鍼に投ず。其の慶幸たる、曷んぞ道ふに勝へんや。我れ今若し自ら退屈を生じ、或は懈怠を生じて、恒常に後を望めば、須臾に命を失し、惡趣に墮墮して、諸の苦痛を受けん。之時一句の佛法を聞いて、信解受持せんと欲し、辛酸を免れんと欲すと雖も、豈復た得べけんや。危きに臨むに到るに及んで、悔ゆとも益する所無けん。願はくは諸の修道の人、放逸を生ずること莫れ、貪淫に著すること莫れ、頭然を救ふが如く、照顧を忘れざれ。無常迅速、身は朝露の如く、命は西光の若し。今日存すと雖も、明も亦保ち難し。切に須らく意に在くべし、且つ世間、有爲の善に憑つても、亦三途の苦輪を免れ、天上人間に於て、殊勝の果報を得、諸の快樂を受く

- ① 盲龜木に遇ふ。人身を受けて世に生るることの困難なるを、盲龜の大海中に於て浮木に遇ひ難きに喩へたるもの。涅槃經に出づ。
- ② 織芥鍼に投ず。師と弟子との機の善く合するを云ふ、迦那提婆初めて龍樹に相見の故事より出づ。
- ③ 放逸。放縱游逸なり。
- ④ 貪淫に著す。貪欲淫欲に執着すること。
- ⑤ 頭然を救ふ。然は燃くなり、頭に火のつきたるを救ふが如く、急に處置せよのこと。
- ⑥ 西光は落日なり。
- ⑦ 有爲。因縁によりて生じたる諸現象を云ふ、爲は爲作造作を有するの意。
- ⑧ 三途の苦輪。三惡趣に同じ、火塗(地獄)・血塗(畜生)・刀塗(修羅)の稱。

べし。況んや是れ最上乘、甚深の法門、暫時も信を生ずれば、成する所の功德、比喩を以て其の小分を説くべからず。經に云ふが如き、「若し人三千大千世間の七寶を以て、爾所の世界の衆生に布施し供養して、皆充滿を得せしめ、又爾所の世界の一切の衆生を教化して、四果を得せしめ、其の功德無量無邊なれども、一食の頃、此の法を正思して、獲る所の功德に如かず」と。此に知んぬ、我が此の法門、最尊最貴、諸の功德に於て、比況し及ばず。故に經に云く、「一念の淨心是れ道場、恒沙の七寶塔を造るに勝れり。寶塔は畢竟して碎けて塵となる、一念の淨心は正覺を成す」と。願はくは諸の修道の人、此の語を研味して、切に須らく意に在くべし。此の身今生に向つて、度せずんば、更に何れの生を待つてか此の身を度せん。今若し修せずんば、萬劫差違せん。今若し強ひて修せば、難修の行、漸く難からざることを得て、功行自ら進まん。嗟夫、今時の人、飢ゑて王膳に逢へども、口を下すことを知らず、病んで醫王に遇へども、藥を服することを知らず。之を如何ん、之を如何んと云はざる者は、吾れ之を如何ともすることなきのみ。且つ世間有爲の事は、其の狀見つべし、其の功驗すべし。人一事を得れば、其の希有を歎す。我が此の心宗は、形の觀るべきなく、狀の見るべきなし。言語道斷し、心行處滅す。故

- ① 七寶。金、銀、瑠璃、頗梨、珊瑚、赤珠、瑪瑙の稱。
- ② 四果。小乘の聖者の四階級、預流、一來、不還、無學。
- ③ 度は濟度なり。
- ④ 天寶。欲界の第六天のこと、此天は正道の妨げをなす。故に天魔と云ふ。
- ⑤ 外道。印度に於て佛教以外の諸教を呼ぶに用ひたる語、九十六種の外道などと稱す。
- ⑥ 釋梵諸天。釋は帝釋天、梵は大梵天、諸天は其他の天上界の衆生。

に 天魔^① 外道^②、毀謗するに門なく、釋梵諸天^③、稱讚し及ばず。況んや凡夫淺識の流、其れ能く勞
 馳たらんや。悲しき夫、井龜焉んぞ滄海の闊きを知らん、野干何ぞ師子の吼を能くせん。故に知
 るの 末法世中、此の法門を聞いて希有の想を生じ、信解受持するものは、已に無量劫の中に於て、
 諸聖に承事し、諸の善根を植ゑ、深く般若の正因を結する、最上根性なる
 ことを。故に金剛經に云く、「此の章句に於て、能く信心を生ずる者は、當
 を知るべし、已に無量佛の所に於て、諸の善根を種う」と。又云く、「大乘
 を發する者の爲に説き、最上乘を發する者の爲に説く」と。願はくは諸
 の求道の人、怯弱を生ずること莫れ、須らく勇猛の心を發すべし。宿劫^④
 の善因、未だ知るべからざるなり。若し殊勝を信せずして、甘んじて下劣
 となつて、艱阻の想を生じて、今之を修せずんば、則ち縦ひ宿世の善根
 あるとも、今之を斷するが故に、彌其の難きに在つて、展轉して遠からん。
 今既に寶所に到れり、手を空しくして還るべからず。一たび人身を失へば、
 萬劫にも復り難し、請ふ須らく之を慎むべし。豈有智の者、其の寶所を知つて、反つて之を求めずし
 て、長く孤貧を怨みんや。若し寶を獲んと欲せば、皮囊を放下せよ。

國譯高麗國普照禪師修心訣 終

高麗國普照禪師修心訣

三界熱惱猶如火宅、其忍淹留甘受長苦、欲免輪迴、莫若求佛、若欲求佛、佛即是心、心何遠覓、
 不離身中、色身是假、有生有滅、真心如空、不斷不變、故云、百骸潰散、歸火歸風、一物長靈、蓋天
 蓋地、嗟夫、今之人、迷來久矣、不識自心、是真佛、不識自性、是真法、欲求法、而遠推諸聖、欲求佛、
 而不觀己心、若言心外有佛、性外有法、堅執此情、欲求佛道者、縱經塵劫、燒身鍊臂、敲骨出髓、
 刺血寫經、長坐不臥、一食卯齋、乃至轉讀一大藏教、修種種苦行、如蒸沙作飯、只益自勞爾、但
 識自心、恒沙法門、無量妙義、不求而得、故世尊云、普觀一切衆生、具有如來智慧德相、又云、一
 切衆生、種種幻化、皆生如來圓覺妙心、是知離此心外、無佛可成、過去諸如來、只是明心底人、
 現在諸賢聖、亦是修心底人、未來修學人、當依如是法、願諸修道之人、切莫外求、心性無染、本
 自圓成、但離妄緣、卽如如佛、問、若言佛性、現在此身、既在身中、不離凡夫、因何我今不見佛性、
 更爲消釋、悉令開悟、答、在汝身中、汝自不見、汝於十二時中、知飢知渴、知寒知熱、或瞋或喜、竟
 是何物、且色身是地水火風四緣所集、其質頑而無情、豈能見聞覺知、能見聞覺知者、必是汝
 佛性、故臨際云、四大不解說法聽法、虛空不解說法聽法、只汝目前、歷歷孤明、勿形段者、始解
 說法聽法、所謂勿形段者、是諸佛之法印、亦是汝本來心也、則佛性現在汝身、何假外求、汝若
 不信、略舉古聖入道因緣、令汝除疑、汝須諦信、昔異見王、問婆羅提尊者曰、何者是佛、尊者曰、

見性是佛。王曰：師見性否？尊者曰：我見佛性。王曰：性在何處？尊者曰：性在作用。王曰：是何作用？今不見。尊者曰：今見作用。王自不見。王曰：於我有否？尊者曰：王若作用無有，不是。王若不用體，亦難見。王曰：若當用時，幾處出現？尊者曰：若出現時，當有其八。王曰：其八出現，當爲我說。尊者曰：在胎曰身，處世曰人，在眼曰見，在耳曰聞，在鼻辨香，在舌談論，在手執提，在足運奔，徧現俱該。沙界收攝在一微塵。識者知是佛性，不識者喚作精魂。王聞心即開悟，又僧問：歸宗和尚，如何是佛？宗云：我今向汝道，恐汝不信。僧云：和尚誠言，焉敢不信。師云：即汝是。僧云：如何保任？師云：一翳在眼，空華亂墜。其僧言下有省。上來所舉古聖入道因緣，明白簡易，不妨省力。因此公案，若有信解處，即與古聖把手共行。問：汝言見性，若真見性，即是聖人，應現神通變化，與人有何殊？何故？今時修心之輩，無有一人發現神通變化。耶？答：汝不得輕發狂言，不分邪正，是爲迷倒之人。今時學道之人，口談真理，心生退屈，返墮無分之失者，皆汝所疑。學道而不知先後，說理而不分本末者，是名邪見，不名修學。非唯自誤，兼亦誤他。其可不慎歟！夫入道多門，以要言之，不出頓悟漸修兩門耳。雖曰頓悟頓修，是最上根機得入也。若推過去，已是多生依悟而修，漸熏而來。至於今生，聞即發悟，一時頓畢，以實而論，是亦先悟後修之機也。則知此頓漸兩門，是千聖軌轍也。故從上諸聖，莫不先悟後修。因修乃證，所言神通變化，依悟而修，漸熏所現，非謂悟時即發現也。如經云：理即頓悟，乘悟併消，事非頓除，因次第盡。故圭峯深明先悟後修之義。曰：識水池而全水，借陽氣以鎔消。悟凡夫而即佛，資法力以熏修。水消則水流潤，方呈澆滌之功。妄盡則心虛，通應現通光之用。是知事上神通變化，非一日之能成，乃漸熏而發現也。況事

上神通於達人分上，猶爲妖怪之事。亦是聖末邊事，雖或現之，不可要用。今時迷癡輩，妄謂一念悟時，即隨現無量妙用，神通變化。若作是解，所謂不知先後，亦不分本末也。既不知先後本末，欲求佛道，如將方木逗圓孔也。豈非大錯！既不知方便，故作懸崖之想，自生退屈，斷佛種性者，不爲不多矣。既自未明，亦未信他，既有解悟處，見無神通者，乃生輕慢，欺賢誑聖，良可悲哉。問：汝言頓悟漸修兩門，千聖軌轍也。悟既頓悟，何假漸修？修若漸修，何言頓悟？頓漸二義，更爲宣說，令絕餘疑。答：頓悟者，凡夫迷時，四大爲身，妄想爲心，不知自性，是真法身，不知自己靈知，是真佛也。心外覓佛，波波浪走，忽被善知識指爾入路，一念迴光，見自本性，而此性地，元無煩惱，無漏智性，本自具足，即與諸佛分毫不殊。故云頓悟也。漸修者，頓悟本性，與佛無殊，無始習氣，難卒頓除，故依悟而修，漸熏功成長，養聖胎，久久成聖。故云漸修也。比如孩子初生之日，諸根具足，與他無異，然其力未克，頗經歲月，方始成人。問：作何方便？一念迴機，便悟自性。答：只汝自心，更作什麼方便？若作方便，更求解會。比如有人不見自眼，以謂無眼，更欲求見。既自眼如何更見？若知不失，即爲見眼，更無求見之心。豈有不見之想？自己靈知，亦復如是。既是自心，何更求會？若欲求會，便會不得。但知不會，是即見性。問：上上之人，聞即易會，中下之人，不無疑惑，更設方便，令迷者趣入。答：道不屬知，不知汝除却將迷待悟之心，聽我言說，諸法如夢，亦如幻化。故妄念本寂，塵境本空，諸法皆空之處，靈知不昧，即此空寂靈知之心，是汝本來面目，亦是三世諸佛、歷代祖師、天下善知識、密密相傳底法印也。若悟此心，真所謂不踐階梯、徑登佛地、步步超三界、歸家頓絕疑，便與人天爲師，悲智相資，具足二利，堪受人天供養，日消萬兩黃金。

金汝若如是真大丈夫，一生能事已畢矣。問：據吾分上，何者是空寂靈知之心耶？答：汝今問我者，是汝空寂靈知之心，何不返照，猶爲外覓。我今據汝分上，直指本心，令汝便悟。汝須淨心聽。我言說從朝至暮十二時中，或見或聞，或笑或語，或瞋或喜，或是或非，種種施爲運轉，且道畢竟是誰能伊麼運轉施爲耶？若言色身運轉，何故？有人一念命終，都未壞爛，卽眼不得見，耳不能聞，鼻不辨香，舌不談論，身不動搖，手不執捉，足不運奔，耶？是知能見聞動作，必是汝本心，不是汝色身也。況此色身四大性空，如鏡中像，亦如水月，豈能了了常知，明明不昧，感而遂通，恒沙妙用也。故云：神通并妙用，運水及搬柴。且入理多端，指汝一門，令汝還源。汝還聞鶉鳴鵲噪之聲麼？曰：聞。曰：汝返聞汝聞性，還有許多聲麼？曰：到這裏一切聲，一切分別，俱不可得。曰：奇哉！奇哉！此是觀音入理之門。我更問爾：爾道到這裏一切聲，一切分別，總不可得，既不可得，當伊麼時，莫是虛空麼？曰：元來不空，明明不昧。曰：作麼生是不空之體？曰：亦無相貌，言之不可及。曰：此是諸佛諸祖壽命，更莫疑也。既無相貌，還有大小麼？既無大小，還有邊際麼？無邊際，故無內外，無內外，故無遠近，無遠近，故無彼此，無彼此，則無往來，無往來，則無生死，無生死，則無古今。無古今，則無迷悟，無迷悟，則無凡聖，無凡聖，則無染淨，無染淨，則無是非，無是非，則一切名言，俱不可得。既總無，如是一切根境，一切妄念，乃至種種相貌，種種名言，俱不可得。此豈非本來空寂，本來無物也。然諸法皆空之處，靈知不昧，不同無情，性自神解。此是汝空寂靈知，清淨心體。而此清淨空寂之心，是三世諸佛勝淨明心，亦是衆生本源覺性。悟此而守之者，坐一如，而不動解脫，迷此而背之者，往六趣而長劫輪迴。故云：迷一心而往六趣者，去也。動也。悟法界而

復一心者，來也。靜也。雖迷悟之有殊，乃本源則一也。所以云：所言法者，謂衆生心，而此空寂之心，在聖而不增，在凡而不減。故云：在聖智而不耀，隱凡心而不昧。既不增於聖，不少於凡。佛祖奚以異於人，而所以異於人者，能自護心念耳。汝若信得及，疑情頓息，出丈夫之志，發真正見解，親嘗其味，自到自肯之地，則是爲修心人解悟處也。更無階級次第，故云：頓也。如云：於信因中，契諸佛果德，分毫不殊，方成信也。問：既悟此理，更無階級，何假後修漸熏漸成耶？答：悟後漸修之義，前已具說，而復疑情未釋，不妨重說。汝須淨心諦聽諦聽。凡夫無始曠劫，大劫來，至於今日，流轉五道，生來死去，堅執我相，妄想顛倒，無明積習，久而成性。雖到今生，頓悟自性本來空寂，與佛無殊，而此舊習，卒難除斷。故逢逆順境界，瞋喜是非，熾然起滅，客塵煩惱，與前無異。若不於般若中，著功力，焉能對治無明，得到大休大歇之地。如云：頓悟雖同，佛多生習氣深，風停波尚湧，理現念猶侵。又果禪師云：往往利根之輩，不費多力，打發此事，使生容易之心，更不修治。日久月深，依前流浪，未免輪迴。則豈可以一期所悟，便撥置後修耶？故悟後長須觀察，妄念忽起，都不隨之，損之又損，以至無爲，方始究竟。天下善知識，悟後牧牛行是也。雖有後修，已先頓悟，妄念本空，心性本淨，於惡斷，斷而無斷，於善修，修而無修。此乃真修真斷矣。故云：雖備修萬行，唯以無念爲宗。圭峯總判先悟後修之義云：頓悟此性元無煩惱，無漏智性本自具足，與佛無殊。依此而修者，是名最上乘禪，亦名如來清淨禪也。若能念念修習，自然漸得百千三昧，達磨門下展轉相傳者，是此禪也。則頓悟漸修之義，如車二輪，闕一不可。或者不知善惡性空，堅坐不動，捺伏身心，如石壓草，以爲修心，是大惑矣。故云：聲聞心心斷惑，能斷之心是賊，但諦觀

殺盜淫妄從性而起，起卽無起，當處便寂，何須更斷，所以云：不怕念起，唯恐覺遲。又云：念起卽覺，覺之卽無，故悟人分上雖有客塵煩惱，俱成醍醐，但照惑無本，空華三界如風卷煙，幻化六塵如湯消冰，若能如是念念修習，不忘照顧，定慧等持，則愛惡自然淡薄，悲智自然增明，舉業自然斷除，功行自然增進，煩惱盡時，生死卽絕，若微細流注永斷，圓覺大智朗然獨存，卽現千百億化身於十方國中，赴感應機，似月現九霄，影分萬水，應用無窮，度有緣衆生，快樂無憂，名之爲大覺世尊。問：後修門中，定慧等持之義，實未明子，更爲宣說，委示開迷，引入解脫之門。答：若說法義，入理千門，莫非定慧，取其綱要，則但自性上體用二義，前所謂空寂靈知是也，定是體，慧是用也，卽體之用，故慧不離定，卽用之體，故定不離慧，定卽慧故，寂而常知，慧卽定故，知而常寂，如曹溪云：心地無亂自性定，心地無癡自性慧，若悟如是，任運寂知，遮炤無二，則是爲頓門箇者，雙修定慧也。若言先以寂寂治於緣慮，後以惺惺治於昏住，先後對治，均調昏亂，以入於靜者，是爲漸門劣機所行也。雖云惺寂等持，未免取靜爲行，則豈爲了事人，不離本寂本知，任運雙修者也。故曹溪云：自悟修行不在於靜，若靜先後卽是迷人，卽達人分上，定慧等持之義，不落功用，元自無爲，更無特地時節，見色聞聲時，但伊麼著衣喫飯時，但伊麼屙屎送尿時，但伊麼對人接話時，但伊麼乃至行住坐臥，或語或默，或喜或怒，一切時中一一如是，似虛舟駕浪隨高隨下，如流水轉山遇曲遇直，而心心無知，今日騰騰任運，明日任運騰騰隨順衆緣，無障無礙，於善於惡，不斷不修，質直無偽，視聽尋常，則絕一塵而作對，何勞遣蕩之功，無一念而生情，不假忘緣之力，然障濃習重，觀劣心淨，無明之力大，般若之力小，於善惡境界，未免

被動靜互換，心不恬淡者，不無忘緣遣蕩功夫矣。如云：六根接境，心不隨緣，謂之定，心境俱空，炤鑑無惑，謂之慧，此雖隨相門定慧，漸門劣機所行，而對治門中，不可無也。若掉舉熾盛，則先以定門稱理攝散，心不隨緣，契乎本寂，若昏沈尤多，則次以慧門擇法觀空，照鑑無惑，契乎本知，以定治乎亂想，以慧治乎無記，動靜相亡，對治功終，則對境而念念歸宗，遇緣而心心契道，任運雙修，方爲無事人。若如是，則真可謂定慧等持，明見佛性者也。問：據汝所判，悟後修門中，定慧等持之義，有二種，一自性定慧，二隨相定慧，自性門則曰：任運寂知，元自無爲，絕一塵而作對，何勞遣蕩之功，無一念而生情，不假忘緣之力，判云：此是頓門，箇者不離自性，定慧等持也。隨相門則曰：稱理攝散，擇法觀空，均調昏亂，以入無爲，判云：此是漸門，劣機所行也。而兩門定慧，不無疑焉。若言一人所行也，爲復先依自性門，定慧雙修，然後更用隨相門對治之功耶，爲復先依隨相門，均調昏亂，然後以入自性門耶，若先依自性定慧，則任運寂知，更無對治之功，何須更取隨相門定慧耶，如將皓玉，彫文喪德，若先以隨相門定慧，對治功成，然後趣於自性門，則宛是漸門中，劣機悟前，漸重也。豈云頓門，箇者先悟後修，用無功之功也。若一時無前後，則二門定慧，頓漸有異，如何一時並行也。則頓門，箇者依自性門，任運亡功，漸門，劣機，趣隨相門，對治勞功，二門之機，頓漸不同，優劣皎然。云：何先悟後修門中，並釋二種耶，請爲通會，令絕疑情，答：所釋皎然，汝自生疑，隨言生解，轉生疑惑，得意忘言，不勞致詰，若就兩門各判所行，則修自性定慧者，此是頓門，用無功之功，並運雙寂，自修自性，自成佛道者也。修隨相門定慧者，此是未悟前，漸門劣機，用對治之功，心心斷惑，取靜爲行者，而此二門所行，頓漸各異，不可

參亂也。然悟後修門中兼論隨相門中對治者，非全取漸機所行也。取其方便，假道託宿而已。何故於此頓門亦有機勝者，亦有機劣者，不可一例判其行李也。若煩惱淡薄，身心輕安於善離善，於惡離惡，不動八風，寂然三受者，依自性定慧，任運雙修，天真無作，動靜常禪，成就自然之理。何假隨相門對治之義也。無病不求藥，雖先頓悟，煩惱濃厚，習氣堅重，對境而念念生情，遇緣而心心作對，被他昏亂，死殺昧却，寂知常然者，即借隨相門定慧，不忘對治，均調昏亂，以入無爲，即其宜矣。雖借對治功夫，暫調習氣，以先頓悟，心性本淨，煩惱本空，故即不落漸門劣機，汙染修也。何者，修在悟前，則雖用功不忘，念念熏修，著著生疑，未能無礙，如有一物礙在，胃中不安之相，常現在前，日久月深，對治功熟，則身心客塵，恰似輕安，雖復輕安，疑根未斷，如石壓草，猶於生死界不得自在。故云，修在悟前，非真修也。悟人分上，雖有對治方便，念念無疑，不落汙染，日久月深，自然契合，天真妙性，任運寂知，念念攀緣，一切境，心心永斷，諸煩惱，不離自性，定慧等持，成就無上菩提，與前機勝，更無差別，則隨相門定慧，雖是漸機所行，於悟人分上，可謂點鐵成金。若知如是，則豈於二門定慧，有先後次第二見之疑乎。願諸修道之人，研味此語，更莫狐疑，自生退屈。若具丈夫之志，求無上菩提者，捨此奚以哉。切莫執文，直須了義，一歸就自己，契合本宗，則無師之智，自然現前，天真之理，了然不昧，成就慧身，不由他悟，而此妙旨，雖是諸人分上，若非夙植般若種智，大乘根器者，不能一念而生正信，豈徒不信，亦乃謗謫。返招無聞者，比比有之。雖不信受，一經於耳，暫時結緣，其功厥德，不可稱量。如唯心訣云：聞而不信，尚結佛種之因，學而不成，猶益人天之福，不失成佛之正因。況聞而信，學而成，守護不忘。

者其功德豈能度量，追念過去輪迴之業，不知其幾千劫，隨黑闇入無間，受種種苦，又不知其幾何，而欲求佛道，不逢善友，長劫沈淪，冥冥無覺，造諸惡業，時或一思，不覺長吁，其可放緩再受前殃，又不知誰復使我今值人生，爲萬物之靈，不昧修真之路，實謂盲龜遇木，織芥投鍼，其爲慶幸，曷勝道哉。我今若自生退屈，或生懈怠，而恒常望後，須臾失命，退墮惡趣，受諸苦痛之時，雖欲願聞一句佛法，信解受持，欲免辛酸，豈可復得乎。及到臨危，悔無所益，願諸修道之人，莫生放逸，莫著貪淫，如救頭然，不忘照顧，無常迅速，身如朝露，命若西光，今日雖存，明亦難保，切須在意，切須在意，且憑世間有爲之善，亦可免三途苦輪，於天上人間，得殊勝果報，受諸快樂。況此最上乘，甚深法門，暫時生信，所成功德，不可以比喻說其小分。如經云：若人以三千大千世間七寶，布施供養，爾所世界衆生，皆得充滿，又教化爾所世界一切衆生，令得四果，其功德無量無邊，不如一食頃，正思此法，所獲功德，是知我此法門，最尊最貴，於諸功德，比況不及。故經云：一念淨心，是道場，勝造恒沙七寶塔。寶塔畢竟碎爲塵，一念淨心，成正覺。願諸修道之人，研味此語，切須在意，此身不向今生度，更待何生度。此身今若不修，萬劫差違，今若強修，難修之行，漸得不難，功行自進，嗟夫！今時人，飢逢王膳，不知下口，病遇醫王，不知服藥，不曰：如之何如之何者，吾未如之何也。已矣！且世間有爲之事，其狀可見，其功可驗，人得一事，歎其希有，我此心宗，無形可觀，無狀可見，言語道斷，心行處滅，故天魔外道，毀謗無門，釋梵諸天，稱讚不及。況凡夫淺識之流，其能髣髴悲夫，非電焉知滄海之闊，野干何能師子之吼。故知末法世中，聞此法門，生希有想，信解受持者，已於無量劫中，承事諸聖，植諸善根，深結般若，若正因最上根。

性也故金剛經云於此章句能生信心者當知已於無量佛所種諸善根又云爲發大乘者說爲發最上乘者說願諸求道之人莫生怯弱須發勇猛之心宿劫善因未可知也若不信殊勝甘爲下劣生艱阻之想今不修之則縱有宿世善根今斷之故彌在其難展轉遠矣今既到寶所不可空手而還一失人身萬劫難復請須慎之豈有智者知其寶所反不求之長怨孤貧若欲獲寶放下皮囊

高麗國普照禪師修心訣終

國譯興禪記

解題

興禪記一卷は鎌倉津智寺の無象靜照禪師の著述なり。文永の頃、江州延曆寺の衆徒、禪宗の興隆を憎み、之を破却せんと欲し、狀を朝廷に上りて禪宗を非謗す。靜照之を聞き、我が宗の將に絶えんとするを慨き、書一篇を作つて正宗を發揮したるもの即ち本書なり。蓋し我が禪門宗論書中の白眉なり。傳を按ずるに、靜照字は無象、相模の人なり。文曆元年に生る。幼にして出家し、京の東福寺に在りて博く内外の書を學ぶ。適々宋朝に大善知識ありと聞き、建長四年支那に航し、徑山に上りて住持石溪心月に參す、幾もなくして大悟す。因つて法を石溪に嗣ぐ。同じく五年、宋の寶祐二年、徑山に在り、此の時、北條時頼の書至る、寶祐四年三月徑山を辭す、石溪送行の偈あり、佛光國師も亦無象の號頌を記して贈る。宋の景定五年(應元年)錫を育王山に掛けて知賓の職を司る。五年秋、洞庭に遊び、

雁落洞庭蘆岸秋。 楚天雲淡畫圖幽。
孤舟遊泳波心月。 七十二峯一目收。

の偈あり。宋の咸淳元年(我が文永二年)虛堂禪師の會下を辭す、又頌あり、

十載從師幾話拳。到頭一法不曾傳。
有無句蕩三家私盡。萬里空歸東海航。

此の年歸朝、宋に在ること凡そ十四年。靜照、育王に在りし時、朝廷より臨時の禳災祈禱あり、疏語を調へて行者に付す。宋人、靜照の機鋒を試みんと欲し、白紙を巻いて可漏(疏語を入)に入る、歎辭畢つて疏を開いて之を見れば白紙のみ、靜照、本疏の如く之を暗誦す。官人あり酒かに彼の疏本に對して之を見るに一字も差ふ所なし、即ち疏を撃つて座に入り之を賀すといふ。因つて諸大老の賀頌あり。時に日本僧圓海なる者あり、之を聞き誓つて云く、「我れ歸朝の日、寺を建て師に歸し奉らん」と。果して靜照と船を同じうして歸朝し、圓海は京に留り、靜照は鎌倉に歸る。因つて鎌倉の常葉に一寺を建て龍華山眞際精舎といふ、今の淨智寺これなり。圓海、又京に於て六孫王遺廟の地を買ひ、一寺を創建し靜照を請して開山第一世たらしめ、平安山佛心寺と稱す。文永九年、相州胡桃谷の法源寺に住す。此の頃、建長寺の開山隆蘭溪、跡を甲州に寄せ、或は奥州の松島にあり、靜照之れに隨ふ。偶々常州の吉原入道善行なる人、寺を建て、靜照を請じ、名けて興禪寺といふ。建治三年十月、博多聖福寺の請を受け、又、大慶寺に移り、尋で淨智寺に入る。徳治元年五月十五日寂す。世壽七十三、法臘五十五。

國譯興禪記

沙門靜照述

佛祖の正法、華竺に流る、的々として相承し、綿々として斷えず。傳燈に曰へるが如きんば、如來まさに化しなるとして、預め摩訶迦葉に命じて曰く、「吾れ清淨の法眼、涅槃の妙心、實相無相、微妙の正法を以て、今汝に付す、汝まさに護持すべし。」并に阿難に勅して、「其れを貳けて傳化す、斷絶せしむることなからしむ」と。廣燈に曰く、「大迦葉阿難に謂つて曰く、婆伽婆未だ圓寂せざる時、多子塔の前にして、正法眼藏を以て我れに密付す、我れ

- ①沙門は梵語、譯して勤息と云ふ、善を勤め、惡を息むるの義なり。
- ②靜照、相模の人、無象と號す、幼にして出家、東福寺聖一國師に師事し、後ち宋に入りて、臨濟下の石溪心月禪師に參じて印可を受く、亦虛堂和尚に請益す、咸淳元年歸朝して、鎌倉淨智寺等に住す、勅して法海禪師と號す。
- ③華は中華即ち支那、竺は天竺即ち今の印度なり。
- ④景德傳燈錄、僧道源の墓。
- ⑤如來、佛十號の一、眞如より來生するが故に如來と云ふ。
- ⑥摩訶迦葉、佛十大弟子の隨一佛の衣鉢を嗣ぎて西天の初祖たり。
- ⑦阿難、佛十大弟子の一、佛弟子中聰明第一と稱せらる。
- ⑧廣燈、五燈の中の一也。
- ⑨婆伽婆は梵語、世尊と譯す、佛十號の一。
- ⑩圓寂とは梵語、涅槃の譯語なり、涅槃は種々の義を包含す、今は佛の滅度を指す。
- ⑪涅槃、大般涅槃經。

今汝に傳付す。』と、是の二の者を原ぬれば、蓋し
涅槃及び阿含等の經に述す。爾後祖々授受
す。凡そ西天二十八傳して、菩提達磨に至
る。達磨より震旦に來り、五傳して曹溪に
至る。曹溪より一傳して、覺樹條を分ち、惠
燈燭を列ぬ。水を器に傳ふるが如くにして、佛
の惠命を續ぐ。是を青原となし、是を南嶽と
なす。十傳せずして分れて五宗となる、各家風
を擅にす。是れを臨濟と曰ひ、是れを曹洞
と曰ひ、是れを雲門と曰ひ、是れを潯仰と
曰ひ、是れを法眼と曰ふ。應機酬對、建立同じ
からずと雖も、會歸すれば則ち一なり。箭鋒相
拄へ、鞭影齊しく施し、攝物利生啓悟多からし
む。其の竺士の佛祖密傳の奥旨化行の機縁、衆
然として備に傳廣續等の諸録に載せたり。重ねて記するに違あらず。達磨の兒孫相傳の禪とは、如

- ① 阿含、四阿含經。
- ② 西天二十八傳、釋尊より迦葉、阿難乃至馬鳴、龍樹等を経て般若多羅より達磨大師に至る。天竺に於ける禪の相承二十八代に及ぶ。
- ③ 菩提達磨、支那禪宗の初祖、南天竺、香至王の第三子、出家して般若多羅に嗣法す。梁の普通元年支那に來り、武帝に謁す、嵩山の少林寺に入りて面壁九年す、二祖神光を得て衣鉢を授け、大通二年十月五日示寂、後唐の代宗、圓覺大師と謚す。
- ④ 震旦に支那。
- ⑤ 曹溪は惠能大師禪師、支那南海新興の人、五祖弘忍大師禪師に參じて其衣鉢を受く、六祖大師と稱す。曹溪は師が住院の地名なり。
- ⑥ 覺樹條を分ち云々、六祖の下法派二派に分るゝを云ふ。
- ⑦ 青原行思禪師、南嶽懷讓禪師共に六祖に嗣法す、青原の下より後に曹洞宗起り、南嶽下より次で臨濟宗を出す。
- ⑧ 臨濟宗、南嶽下、臨濟惠照禪師より起る。
- ⑨ 曹洞宗、青原下、洞山真价禪師より起る。
- ⑩ 雲門宗、青原下、雲門文偃禪師より起る。
- ⑪ 潯仰宗、南嶽下、潯山靈祐禪師より起る。
- ⑫ 法眼宗、青原下、清涼文益禪師より起る。臨濟以下法眼に至る、是れを五宗或は五家といふ、支那禪宗の分派なり。
- ⑬ 傳、廣、是等は五燈の各名なり。

來秘密微妙の禪なり。傳燈に曰く、「是れ諸佛萬徳の源なり、故に佛性と名く。亦、是れ衆生迷悟の源なり、故に如來藏識と名く。亦、是れ菩薩萬行の源なり、故に心地と名く。之れを悟るを惠と名け、之れを修するを定と名く。定惠通するを名けて禪となす。」と、凡そ禪定の一行能く性上無漏の智恵を發起す。一切の萬行萬徳、皆定より發す。故に聖道を求めんと欲せば、必ず須らく禪を修すべし。然も禪に多種あり、謂く異計を帯びて、上を欣ひ下を厭ふて修する者は、外道の禪なり。正に因果を信じ、亦、欣厭を以て修する者は、是れ凡夫の禪なり。我空を悟つて、見處偏眞にして修する者は、是れ小乗の禪なり。人法二つながら空じて眞理を所顯して修するものは、大乘の禪なり。若し頓に自心本來清淨にして元より煩惱なく、無漏の智性本より具足し、此の心即ち佛なりと云ふことを悟れば、靈明湛寂にして廣大融通す。畢竟して異なし。無異無住、無修無證なり。塵の染むべきなく、垢の磨すべきなくして、一切法門の宗源たる者は、是れ最上乘の禪なり。亦如來清淨禪と名く。亦一行秘密王、三昧と名く。亦眞如三昧と名く。此は是れ一切三昧の根本なり。

- ① 涅槃經等に出づ。
- ② 楞迦經に出づ。
- ③ 梵網經に出づ。
- ④ 無漏、煩惱妄想を離脱せるを云ふ。
- ⑤ 聖道は佛道なり。
- ⑥ 外道、印度に於て佛教以外の諸教を指して云へるもの、九十六種の外道などと云ふ。
- ⑦ 欣厭、淨土を欣び穢土を厭ふ。
- ⑧ 我空、我は常一主宰の義、斯かるものなしと悟るを我空と云ふ、又人空とも云ふ。
- ⑨ 見處偏眞、我空のみを悟りて法空の理を知らず、故に偏と云ふ。
- ⑩ 小乗、佛教中の初門、乘は運載の義なり、小人の所乘にして、小苦を滅し、小利益を興ふるが故に云ふ。
- ⑪ 人法二空、人空は前に出づ、法空とは一切萬法は假有にし

此の三味の根本を證しつれば、何れの法門としてか開けざらん、何れの三味としてか現せざらん。①風柯月渚、並に心を傳ふべし、煙島雲林、咸く妙旨を提ぐ。念々威音の前に超え、歩々毘盧の頂を踏む。達磨の門下、展轉して相承するものは是れなり。②圭峯の云く、「諸家の高僧の解する所の教義、最も圓明なりと雖も、然も趣入の門戸を立て、次第の階差を分つ、只是れ前に擧する所の、諸禪の行相なり。唯達磨の所傳は、頓に佛體に同じ、適かに諸門に異なり」と。故に③維楊の法慎大律師云く、「教乘の極談は、一切の經義を包ぬ。東山の法門は是れ一切の佛乘なり。色空兩ながら忘じ、定惠雙べ照す、得て稱すべからず。所以に文字を立せず、直に心源を指す。階梯を踐まず、徑に聖域に登ること、此の宗に過ぎたるはなし。」斯れ乃ち佛祖冲密の幽旨、群生靈覺の本源なり。相に即して觀ることなければ、空々として其の眞際を測ること能はず。慮に即して知を絶すれば、玄々として其の指歸を窮むること能はず。永く證知を脱し、全く言象を超えたり。靈明恢廓にして、虛凝淡泞なり。清宵際を絶して、明月孤圓なり。神輝潛に映じて滅せず、萬相俱に應じて生ぜず、顯れて既に有に

て、其體空無なりと悟るを云ふ。
 ①大乘、小乘に對して云ふ、大苦を滅し、大利益を得、自利利他共に成する大なる法門を云ふ。
 ②南方佛教は小乘教に屬し、日本佛教は大抵大乘教に屬す。煩惱、又惑とも云ふ、心身を惱亂する精神作用なり、百八煩惱、八萬四千の煩惱などと云ふ。
 ③三昧、心を一境に安住せしめて動ぜざるを云ふ。
 ④風柯月渚、煙島雲林云云、眼見耳聞悉く妙法ならざるなきを云ふ。蘇東坡曰く、「山色清淨身、遠聲廣長舌」と、此謂なり。
 ⑤威音、法華經常不輕品に曰く、無量無邊、不可思議阿僧祇劫の昔、佛あり、威音王と名く云々と。

あらず、隠れて豈無とせんや。寂にして動じ、動にして寂なり、天真の自性、本より淨くして明妙なり、出沒方なく、應化礙無し。①少林の花五葉に開け、曹溪の燈十方に分れしより以降、蓋し格高く調古り、言峻しく理幽なるを以て、等閑に一機を垂れ、一境を示す。盡く是れ人のために、②釘を抽き楔を抜きて、泥水を離却して、人の眼目を活す。直に③博地をして、頓に全心是佛なりと悟らしむ。果位を経ずして、④三身四智本來具足す。是れ聖、是れ凡、圓かに一體となる。厥後、子孫直指單傳殺活自在、一機に脱出す。皆其れ英傑の士、奇傑の流なり、之れを法藏に列すること、日の天に經たるが如し。此の宗に依つて道を得るもの、古より今に至るまで周知を以て悉に數ふべからず。其の法雨、天上人間に灑いで廣く、⑤諸有を霑し、其の道風、他方此土に扇いで普く群惑を濟ふ。善盡し美盡すの法要、比無く儔無きの正宗と謂ふべし。蓋し⑥大雄付囑の旨、正眼流通の道、教外に別行して、不可思議なるものなり。不立文字教外別傳とは、世尊⑦青蓮の目を以て、⑧飲光を顧視す、飲光但一たび微笑するのみなり。達磨、門弟子に命じて、各其の所得を言はしむ、⑨二祖唯禮三拜す。

①毘盧、毘盧遮那佛。
 ②圭峰、宗密禪師、禪を道圓に參得し、華嚴を清涼に學ぶ、著書多く世に重んぜらる。
 ③維楊の法慎大律師、律宗、唐明州の人、鑑眞に從ひて來朝す、大和に佛國寺を建つ、戒律及び天台の教義に通じ、又儒書に通ず。
 ④東山の法門、禪宗を云ふ。
 ⑤少林は達磨大師面壁九年の舊跡、禪の五家に分れて世に盛んなるを云ふ。
 ⑥曹溪の燈、曹溪は六祖大師を云ふ、其法孫十方に化を擧ぐ。
 ⑦釘を抽き楔を抜くとは、纏縛を解くの意なり。
 ⑧博地、下賤の凡夫を云ふ。
 ⑨三身、佛身に三種の別あり、曰く法身、報身、應身。
 ⑩四智は大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智を云ふ、大悟の境に入りて得る智慧なり。

其の旨、文字義説を以て宣示すべからず。正宗記に云く、「達磨、佛の所傳を承けしより、今に至るまで絶えざるものは、蓋し謂みるに、此の法秘密にして、言なく示なければ信じ難く到り難し。唯是れ已證の者、乃ち其の所以を知つて、究竟とするを以ての故なり。若し其れ究竟の理とは、則ち佛の境界なり。秘密微妙にして、文字言義の至るべきにあらず、必ず密傳妙證して、以て至るべきなり。直に心を以て證す、豈經教、語言、文字の間にあらんや。」馬鳴曰く、「離念の境界なり、唯證して相應するが故に。」龍樹の曰く、「説くべからざるものは是れ實義、説くべきものは皆是れ名字」と。斯の二祖師、其の心に證するの親密を尊びて、以て其の迹に循つて情解することを別ふ。離念とは圓明の覺了、虛明にして自照するのみ。清涼國師澄觀大法師の曰く、「果海、念を離れて心傳す。」圭峯乃ち之れを釋して曰く、「此れ即ち達磨心を以て心を傳ふる不立文字の意なり。」大聖人果して其の正宗、默證微密なるを以て後世に遺す。其れがために正印を標して驗なるもの、固に亦已に吾が佛の當時に見たり。⑦摩竭に室を掩ひ、⑧毘耶に詞を杜づ。若し有ることを知るものは、默して其の趣向を知

① 諸有、三界二十五有の迷界を云ふ。
 ② 大雄、佛を云ふ。
 ③ 普運の目、眼の氣高く清きを形容す、普運華は天然にあり、其葉の形長く、青白の色明かにして大人の目に似たりと。
 ④ 飲光は摩訶迦葉。
 ⑤ 二祖は神光惠可大師なり、祖達磨の骨髄を得て、其衣鉢を受けて東土禪宗の第二祖たり。
 ⑥ 正宗記、契嵩の著、傳法正宗記。
 ⑦ 馬鳴、西印度の人、初め外道に歸して盛んに佛法を破す、後ち富那夜奢尊者に論破せられて佛教に歸し、大に大乘佛教を鼓吹す。大乘起信論、大莊嚴論、佛所行讚經等の著あり、釋尊より第十二代の祖師たり。

る、學者亦尊んで之れを信するものなり。智度論に曰く、「禪最も大いなること王言の如し。」禪は則ち一切皆攝す。佛菩薩の諸の三昧及び佛の得道捨壽、是くの如き等の種々の勝妙の功德、皆禪の中にあり、此の義を謂つて解脱禪と曰ふ。三昧をば皆名けて定となす、定を名けて心となす。其の所謂心とは、乃ち諸の禪祖の傳ふる所の者なり。正宗記に云く、「吾が佛、正法の要を以て、大教の宗となす、密傳受を以て、一大教の祖となす。其の宗は乃ち聖賢の道源、天地生靈の妙本なり。其の祖は乃ち萬世戒定慧を學する者の大範、十二部説の眞驗なり。是を以て龍樹祖師、禪門を名けて宗門となす。」即ち謂く、「吾が宗門は乃ち釋迦文、一佛教の大宗の正趣なり。」所謂の意義は、皆大藏の間に見えたり。且、廬山の遠公の統序と、禪經・智度論・涅槃經・四者の説とを以て、其の奥旨を詳かにす。夫れ三業の興り、禪智を以て宗となす、經に曰く、「道は禪智より泥洹に近し」と。豈禪は教律論の三學の者の宗とする所たりと謂ふにあらずや。八萬四千の法門、此の密傳極證を以て、眞要とせずと云ふことなし。所以に道く、三世の諸佛の所證、蓋し此れを證す。如來一大事のために出現する、

⑧ 龍樹、印度の人、釋尊より傳法第十四代の祖師、大智度論百卷、其他多くの著あり、八宗の祖師と崇めらる。
 ⑨ 清涼國師澄觀大法師、華嚴宗の第六祖、又五台無名に參じて禪旨を得、著書多し。
 ⑩ 圭峰、前に出づ。
 ⑪ 摩竭に室を掩ふ、摩竭は摩竭陀國にして世尊の多く説法せられたる地なり、或時説法を止めて一室に閉ち籠り默座せらる。
 ⑫ 毘耶に詞を杜づ、毘耶離は雜摩詰居住の地なり、文殊大士、維摩に菩薩の不二法門を問ふ、居士默然として言無し、文殊歎じて曰く、文字語言なき、眞に是れ菩薩の不二法門なりと。
 ⑬ 掩室、杜言共に妙法の不可説を示すなり。
 ⑭ 智度論、龍樹の著、大智度論。

蓋し此れが爲なり。一切衆生妙圓覺の心、本より生滅なく、圓かにして大虛に同じ、淨瑠璃の内に寶月を含むが如く、大明鏡の萬珠を照了して、光體無二なるが如く、大摩尼の五色に映じて、方に隨つて各現するが如し。百千燈の光の一室を照して、其の光圓滿、壞なく雜なきが如くなるは、此の宗旨なり。道ふことを見ずや、此の門に歸せざるものは、言を執し旨に滯つて、名を守り實を失ふ。葉を攀ち根を亡じ、實を棄て薪を負ふことは、謬の甚しきなり。智度論に曰ふ、「般若波羅蜜秘密の法は、其の旨亦驗なること禪の中にあり。」涅槃經に曰く、「我れ今の所有の無上の正法は、悉く以て摩訶迦葉に付囑す、此の迦葉能く汝等がために大依止とならん」と。此れを校ふれば則ち大聖人の遺意、豈果して妙密清淨の禪を以て、其の教の大宗とするにあらざらんや。故に先德、吾が禪門を命じて之れを宗と謂つて、教外の親證を尊ぶ。佛心宗と曰ひ、亦是諸佛頂上の宗と名く。然も此の禪要、既に是れ吾が一佛教の宗なれば、則ち其の法要を傳ふるものは、三十三祖なり。大迦葉より阿難、暨び龍樹、達磨相繼いで曹溪に至る、乃ち皆一釋教の祖なり。淺識のもの妄りに達磨、曹溪を分つ

- ①十二部説、佛の説法の體裁に十二種あるを云ふ、十二部經又は十二分經とも云ふ、即ち一切の佛經を指す。
- ②長行説、重頌説、授記説、孤起説、無問自説、因緣説、譬喩説、本事説、本生説、方廣説、未曾有説、論議説是れなり。
- ③大藏、一切經を云ふ。
- ④廬山の遠公、惠遠と稱す、東晋の代、廬山に白蓮社を結びて其徒一百二十三人と共に念佛を修す、後世之を支那淨土教の第一傳とす。
- ⑤禪經、達磨多羅禪經。
- ⑥三業、身、口、意の三所に於て起す吾人の所作を云ふ、身業、口業、意業。
- ⑦泥洹、涅槃に同じく梵語の音譯なり。寂滅、圓寂などと譯す、迷妄を脱して真如に歸するを云ふ。
- ⑧八萬四千の法門、衆生の煩惱

て獨り禪門の祖とすること、亦甚だ謬ならざらんや。今時の學者、各師習を私にし、其の所學に黨して、法要の元祖を顧みず、審かに其の大宗の正趣を求めず、反つて宗門の單傳心印のものを忽にし、吾が宗の勝れたるにはしかすと謂ふ。是れ唯だ佛意に違ひ叛くのみにあらず、亦乃ち自ら其の道本を味ます、實に悲傷しつべし。若し具眼の禪者の示す所は、語默動靜、展縮殺活、機を以て機を奪ひ、用を以て用を破る。羅籠を出で、言滯を掃ひ、金剛王劍を操り、獅子の全威を奮ふ。一機一境、一棒一喝、轉轉々々、峭峴々々、酒器を持ち、圓相を示し、赤幡を執り、明鑑を撃ぐ、皆先佛の妙用、迅捷の風規なり。正眼を具せざれば、輒く此の妙用を見るべからず。聖意獨り遺屬して、吾が密傳の宗、乃ち發明することを待たり。何を以てか此くの如くなる、其の相宜しきを以ての故なり。然らずんば奚んぞ達磨祖師より已來、其の風大いに天下に振ふものならんや。達磨とは觀音の應化、大法の正主なり。直に本心是れ佛なりと云ふことを示す、豈亦信せざらんや。若し夫れ、修多羅の教は、乃ち大聖人の權巧、機に應じて迹を垂る、而して張本なり。且く世の名字言説を假つて、理を發して以て人の悟證を待つ。文字言教は、是れ依憑の處にあ

- ①八萬四千の別あるが故に、是れを治するが爲めに佛の説法に同数の法門あり。
- ②大藏は虚空。
- ③瑠璃は梵語、青玉又は青色寶と譯す、寶玉なり。
- ④摩尼は梵語、如意珠と譯す、寶珠なり。
- ⑤般若波羅蜜は梵語、譯して大智惠到彼岸とす。
- ⑥三十三祖、釋尊、大迦葉より達磨其他の諸祖を経て曹溪に至る禪の傳法相承三十三代に及ぶ。
- ⑦應化とは佛菩薩の衆生の機縁に應じて、世に化現し之を濟度するを云ふ。
- ⑧修多羅は梵語、契經と譯す、一切の佛經を云ふ。
- ⑨權巧は方便なり。

らす、唯言外に契證せんことを要す。然も理妙にして教ふる所なし、説き及ぼして語ると雖も、終に其の所謂を極むること能はず。教外別傳と云ふは、果して佛教に別なるにあらず、正に其の教迹の到らざる所のものなり。大論に曰く、「言、言ひ及ぼすに似たれども、而も其の旨幽邃なり。之を尋ねること深しと雖も、而も之を失すること逾遠し」と、其れ此の謂なり。楞伽經の序に云く、「學佛の弊、經文に溺れ、句義に惑ふて、而して人、玄を體せざるに至つて、則ち禪を言つて以て之を救ふ」と。其の理窮まれば則ち能く變ず、變すれば則ち能く通ず、其の變通を善くするもの、其れ始めて吾が正宗を發す。隋の智者大師の曰く、「佛法の至理、言を以て宣ふべからず。豈言方、語本、十二部に存せんや。智度論を按するに、曰く、「諸佛は法愛を斷じて、經書を立せず、亦語言を莊嚴せず」と。此くの如くならば則ち佛祖の其の意、何を嘗て教に在らんや。又經に曰く、「修多羅の教は、月を標す指の如し、若し復た月を見つれば、標す所畢、竟して月にあらざることを了知す」と。是れ豈人をして其の教迹を執せしめんや。禪門に證入しつれば、則ち一切教門の月を標す指の如くなることを知る。所以に經に曰く、「始め鹿野苑より、終り跋提河に至るまで、中

- ① 大論は龍樹の著、大智度論の略稱。
- ② 楞伽經、佛楞迦山にありて大惠菩薩のために説かれし經文なり、經中、佛語心を宗となし、無門を法門となす等の語あり。
- ③ 智者大師は支那天台宗の開祖、天台四教義、摩訶止觀、法華支義、法華文句、等多數の述作あり。
- ④ 法愛、俱て非なる法に執着すること。
- ⑤ 涅槃經に出づ。
- ⑥ 鹿野苑、印度波羅奈國にあり、釋尊最初説法の地なり。
- ⑦ 跋提河、釋尊入滅の地。

間五十年、未だ曾て一字をも説かず」と。若し意識の知解を以て、強ひて辯ずることをなせば、益々辯ずると雖も益々疎なるものなり。龍樹の論に曰く、「若し分別憶想は、即ち是れ魔の羅網、不動不依なる、止是れ即ち法印となす」と。子が分別戲論の心を潔清せんを待つて、始めて吾が教外の所傳、乃ち眞佛の法印なりと云ふことを信すべし。斯れ固に教外默傳の旨、圓極秘密の謂なり。密は言にあらず、默にあらず、識々の及ばざる所、智の至らざる所なり。此の奧密、經教に載すと雖も、而も經教は但言説するのみなり。心を以て心に傳ふる最上乘の禪、天下之れを宗門と謂ふ、亦宜ならずや。太宗皇帝の修心の詩に曰く、「初祖安禪は少林にあり、經教を傳へずして但心を傳ふ、後人若し眞如の性を悟らば、密印由來妙理深し」と。是れを以て諸佛之れを得て、等妙に昇り、衆生之れを證して本源に歸す。頓圓速疾の門、此の宗に過ぎたるはなし。故を以て、梵釋、龍鬼神を傾けて擁護し、菩薩賢聖、世に應じて紹隆す。般若多羅、達磨大師に告げて云く、「汝が所化の方、菩提を得るもの數に勝ふべからず、其の道行修すること潔うして、燈々相續ぎ、光明世を照す、宗風益振ふて傳法利生、八千年に及ぶ」と。是れを以て之を念ふに、未來の流通、涯淡すべからず。法此の士に流はりて、年世久遠なり、今の時中興すること、豈難きことあらんや。龍

- ① 太宗皇帝、唐の太宗。
- ② 等妙は等覺、妙覺なり、等覺は菩薩の最上位、妙覺は佛位なり。
- ③ 梵釋、龍鬼、梵は大梵天王、色界初禪天の主にして亦三界の主なり。釋は帝釋天王、須彌山上初利天の天主にして佛法の守護神なり。龍は天龍、鬼は鬼神。
- ④ 般若多羅、東印度の人、達磨大師の師なり。
- ⑤ 涯淡は限界なり。

興れば雲集り、神動すれば天隨ふ。故に歷代の聖帝、明王、賢臣、儒道、服膺して宗門を歸興するもの殫く紀すべからず。唐の太祖、神武を以て廣く度門を開き、太宗、欽明を以て深く禪興を究む。宋の眞宗、孝宗に至るまで、皆眞乘に歸して以て至化を助く。萬邦を典御し、普く群品を濟ふ。則ち服を散じ戈を韜て、無爲の道を扇ぎ、澆を移し樸に反つて、不言の化を弘め、瀚海天山の地、盡く提封に入り、龍庭鳳穴の郷、咸く法雨に霑ふ。二儀澄清にして、國康く民樂し、六合廓清にして、歲稔に時和げり。猶ほ最勝王經に説くが如きは、八萬四千の城邑、八萬四千の諸王、各其の國に於て、諸の快樂を受く。是則ち有惠の法師に親近して、如來の正法を信受するが故なり」と。佛の明言豈君臣と釋氏と共にして、正法を興すと云ふことを謂はざらんや。國土衰微し人民澆惡にして、淳なる者は日に漓く、厚き者は日に薄く。邪は強く正は弱く、愚を崇び智を棄つ。皆是主法の眼、古に及びざればなり。此旨を解らずして、輒く謗毀するもの、覺王の本を負いて、迷者の末を取る。桀を助けて虐をなす、其倒錯豈甚だしからざらんや。一言を毀謗するを以て、則ち百劫千生、佛の種性を斷す、正法流通の門を塞ぎ、邪惡顛倒の道を開く、其逆罪必ず感ずることあらん。豈道ふことを見ずや、一切の重罪は皆、懺悔すべし、

- ① 度門。衆生濟度の法門の略。
- ② 服を散じ戈を韜む。軍馬の事を捨て、徳を以つて治むること。
- ③ 無爲の道、無爲にして人を化するは、聖人の事なり、即ち、聖人の道といふ意。
- ④ 澆を移し樸に反す。澆は薄也、樸は質朴なり。
- ⑤ 瀚海天山、共に邊僻の土地也。
- ⑥ 龍庭鳳穴、及び難き土地の形容也。
- ⑦ 二儀は陰陽の二儀なり。
- ⑧ 六合、天地と四方を合せて稱す。
- ⑨ 金光明最勝王經。
- ⑩ 桀、夏國の王、暴君なり。

佛法を謗するの罪、懺悔すべからず。誠なる哉是の言、佛法を謗するもの、是れ自ら其の心を味し、自ら其の罪を招くこと決せり。古聖の云く、「聞いて信せざる、尙ほ佛種の因を結び、學んで成せざる、猶ほ人天の福を益す。」と、聞かずや、佛を廢毀するもの、禍踵を旋らさずして罪其の身に萃る。惜しい哉、昧くして學すること能はず、謗して其の罪を招いで、永く佛種を斷することを。此の宗、是れ識學詮文の解する所にあらず、宗乘を擧揚すれば、十二分教、氷の如くに解け、水の如くに消ゆ。祖令を全提すれば、盡大地の人、鋒を亡ぼし舌を結ぶ。譬へば金翅鳥王の阿盧大海に入つて、雪浪を擊開して、直に龍を取つて呑むが如し。眼睛定動するの間、早く已に喪身失命す。機前に薦得するも、二に落ち三に落つ。言外に撈透するも、泥を拖き水を帶ぶ。況んや乃ち意識をもて卜度し、教を披いて和會し、言に隨つて義を取り、文を析けて解を生ずるをや。何ぞ曾に白雲萬里のみならんや。所以に道く、靈鋒の寶劍、常露にして現前す。亦能く人を殺し、亦能く人を活す。衲僧の眼目、世界に函蓋し、乾坤を把定す。碓邦を指して淨土となし、地獄を呼んで天堂となす。位を轉じ機を回し、星を移し斗を換ふ。通天の作略を逞しくし、跨海の神機を用ふ。終に惡水坑頭、葛藤堆裏に向つて着到せず。淨裸々、赤灑々、天四壁なく地、八荒を絶す、萬機不到、聖眼も窺ふことなし。故

- ① 懺悔。懺は梵語、悔過と譯す、更に悔を加へたるは梵漢并舉したるなり、過去の罪惡をさとつて悔い改むること。
- ② 金翅鳥王、鳥類の王、龍を取つて食ふと云ふ。
- ③ 二に落ち三に落つ。第一義を失すること。
- ④ 泥を拖き水を帶ぶ。醜さを云ふ。
- ⑤ 白雲萬里、遠く隔たること。

① 同安の寮の云く、「三賢尚ほ未だ斯の旨を明らめず、十聖那んぞ能く此の宗に達せん。」と、② 緣覺辟支、③ 四果の聲聞、尚ほ其れと列せず、況んや其の下なるものをや。聖にあつては則ち大乘の菩薩、天にあつては則ち帝釋梵王、人にあつては則ち王臣僧尼、皆群を超越る決定の信あつて、方に能く透徹す。豈龍檻に局促するの量を以て、深密方外の旨を測らんや。經に曰く、「思惟の心を以て、如來圓覺の境界を測度せば、譬へば螢火をもて、須彌山を焼くが如し」と。正に此れを謂ふなり。佛法東に來つて至らずと云ふ所なし、千古萬古、宗綱墜ちず、④ 北辰の位に據り、百川の朝宗するが如し。其の徒に預るものは、道、三界を超え、徳、神明に貫き、⑤ 馬祖、百丈、臨濟、德山等の如きんば、大機を闢き、大用を發し、卷舒擒縱、皆本分に據る、萬世抜けず、獨り天下に盛なるものなり。⑥ 裴休、陸亘、李玄、龐老の輩の若きんば、皆宗猷を探り、淵源を體究して、脚實地を踏む。⑦ 塵中に在りと雖も、宰官の身を現じて、内外護となる。法海の中に於て、能く津濟を致す、慈に在つて禪を行す、火中に蓮を生ずるものなり。是れを以て諸王群臣、或は寺宇を建て、或は田園を置いて、如來の

- ① 八荒は八方に同じ、四方と四隅なり。
- ② 同安の寮、寮師ならん賦。
- ③ 賢、とは十住、十行、十回向の菩薩の三位を云ふ。
- ④ 十聖、十地の菩薩の位、三賢位を経て十地の位に上る。
- ⑤ 緣覺辟支、飛花落葉等の因縁を觀じて、自然に獨悟したる聖者の位、小乘に屬す。
- ⑥ 四果の聲聞、佛の説法を聞いて悟る小乘の聖者を聲聞と云ふ、四果は預流、一來、不還、無學の聲聞の四位をいふ。
- ⑦ 須彌、梵語なり、妙高と譯す、世界の中央金輪の上にあり、諸天之に居り、六道、四生、二十五有の衆生皆之れに住すと。
- ⑧ 北辰、北斗星なり。
- ⑨ 三界、欲界、色界、無色界。一切衆生の生死輪廻する邊界なり。

付囑を忘れず、其の眞正の釋子をして、安心行道して、方に隨つて化を設けしむ。則ち諸天善神、誓願力に乗じて、來つて其の國を護る。其の冥助に依つて、王臣、災を消して福となし、士庶、凶を變じて吉と爲す。信に是れ群惡を除くの神符、千祥を聚むるの祖宗なり。此の法、興らざれば、則ち諸天其の國を守らず、諸天其の國を守らざれば、則ち諸難競ひ起つて、上下安んぜず。誠に所謂國家の盛衰は、佛法の興亡に在るものか。然も法は人に由つて興り、道は縁を待つて顯はる。法あれども、僧寶なければ、其の名を存すと雖も、而も其の法、傳はることなし。道あれども、檀寶なければ、其の志、立つと雖も、而も其の道興り難し。佛經を聞くに、曰く、「昔世尊、靈山會上に在つて、諸大弟子に告げて曰く、我れ滅度の後、清淨の正法、悉く以て國王、大臣、有力の檀那に付囑す、能く外護を致し、能く興持をなし、正法の化益をして、未來世に及ぶまで、斷絶せしむることなからしむ」と。此の言に由らば、佛教の損益弛張、國王、大臣、有力の檀那の慈明にあり。吾が佛の正法、源々相續いで、此の國に流はる。忝く佛の徒に預つて、今に其の法を以て、云爲する所あらんと欲せ

- ① 馬祖、南嶽懷讓に嗣ぐ。百丈、馬祖道一に嗣ぐ。臨濟、百丈の法嗣黃檗希運に嗣ぐ。德山、曹原下の龍潭に嗣ぐ。
- ② 裴休、黃檗希運に嗣法す。陸亘、南泉普願に嗣法す。李玄、龐老、馬祖道一に嗣法す。以上の四人は在俗の顯官にして世本續粉の間、禪に參じて各其蘊奧を極む。
- ③ 塵中は在俗の間にあるを云ふ。
- ④ 僧寶、三寶の一なり、僧は法を傳持して自利利他の利益を行すが故に、佛及び法と共に寶と稱せらる。
- ⑤ 檀寶は檀越の資助なり、檀越は梵語、譯して施主と云ふ。
- ⑥ 檀那は梵語、布施と譯す、能く大利益を施すを云ふ、轉じて能く此布施を行する者を云ふ。

ば、豈王臣、檀那の主張を頼まざらんや。而も今時、敗群の邪輩、如來の衣を假つて、名を禪門に寄せ、師子の皮を披て、野干鳴をなす。内には眞證なく、外には邪惡を馳す。縦に奸巧を振つて、世間を誑惑し、諸の醜惡を擧げて以て佛祖を裨販す。守る所は塵俗の匹夫の如くにして、畧差恥なし。便ち瞎忝子の、衆盲を引き盲惑を執するものあり、人を争ひ、我を争ふ。譬へば蒼蠅の臭肉を聞いて、頭を聚めて鬩ひ唆ふが如くに相似たり。吾が宗の凋喪、皆此れに縁つて得。少林の苗種、豈嗟傷せざらんや。貴書に云ふが如きんば、禪侶中或は戒律に乖き、名利を好んで、國家の費を顧みず、威儀法則に課せて、華美過差を致すの族、甚だ要樞に非ざるかと。擧る所の過惡は、皆不律の邪輩に在るか。凡そ如來の法服を濫にして、而して如來の重戒を犯すものは、之れを制するに、國家に刑憲あり、之れを律すに、叢林に規矩あり。能く禪律の法式に依つて、一を罰し百を戒むれば、則ち信するものは、善に遷り罪を消す、眞なる者は、心を悟り聖を證す。釋氏の徒、豈佛祖の慈を念はざらんや、亦自身の惡を恥ぢざらんや。眞正の禪流は、定を以て身となし、惠を以て心となし、慈を以て本となし、己を忘れて佗を救ふ。世家を營まず、形骸を修せず、止三衣一鉢、一粥一飯、破を補ひ寒を遮るの外、費す所寡し。

①野干、狐に似て稍小なる獸。
 ②人を争ひ我を争ふ、我見、我慢を張りて相争ふを云ふ。
 ③少林の苗種、禪家の法孫、少林は達磨の舊跡。
 ④叢林、梵語、曾陀婆那の譯、僧侶の集まる處を云ふ、今は衆議の遺場を指して叢林と呼ぶ。
 ⑤三衣一鉢、三衣は僧の着すべき衣、即ち袈裟なり是れに三種あり、故に三衣と云ふ。鉢は梵語、鉢多羅の略、應量器と譯す、此二者は共に僧侶の必需品たり。

聲色を視ること浮塵に似、名利を視ること谷響の如し。佛祖の法式を守り、無上道を求むる者、豈幻世の華美を取るを志とせんや。噫、一向邪を掃ふを本と爲して、返つて毀を正に加へんや。是れを以て邪を化して正に歸すれば、則ち悲を含んで必ず智を發するが故に、無縁の慈を布き、悲を含むが故に同體の心を運ぶ。同體を以てすれば、則ち人を棄つることなし、何の樂としてか與へざらん。無縁を以てすれば、則ち物を遺すことなし、何の苦としてか救はざらん。利鈍齊しく觀、冤親普く利す、是れ佛の大慈悲なり、何ぞ皇道無爲の化に異ならんや。是れを以て十輪經に云く、若し諸の比丘、佛法に依つて出家せんに一切の天人、阿修羅等、皆まさに供養すべし。若し破戒の比丘、諸の煩惱、結使の爲に壞らるゝことありとも、猶は能く開示すべし。是れを以て我に依つて出家せば、若しくは持戒、若しくは破戒、我れ悉く輪王大臣の、謫罰繫閉して鞭杖を加へ、乃至命を斷つことを聽さず、況んや復た餘の輕々しく小威儀を犯すをや。破戒の比丘、禁戒を犯すと雖も、其の戒勢力猶は能く無量の天人を利益す。譬へば香を燒くに香體壞れたりと雖も、佗を熏じて香ばしからむるが如し。破戒の比丘も亦復た是くの如し、自ら惡道に墮すれども、能く衆生をして、善根を増長せしむ。是の因縁を以て一切の白衣、皆まさに守

①悲は慈悲なり。
 ②無縁の慈、仁愛を有縁、無縁の一切に及ぼす大慈悲なり。
 ③天人、天界の衆生、阿修羅は梵語、非天非類などと譯す、常に闘争を事とする鬼畜の類なり。
 ④結使、煩惱の異名なり、結は心身を纏縛するの義、使は之を驅使するの義。
 ⑤白衣、僧の緇衣なるに對して在俗を凡て白衣と云ふ。

護して、尊重供養すべし。佛偈を説いて曰く、^①「薩苟の華萎めりと雖も、諸餘の華に勝れり。破戒の比丘も猶ほ諸の外道に勝れり」と。薩遮尼健經に云く、「若し沙門あつて戒を破らんに、或は繫閉して打ち、或は還俗せしめ、或は其の命を斷たん。若し是くの如き根本の重罪を犯さば、^②決して地獄に墮して、無量の苦を受けん。王の國土、此の不善を行するを以て、諸仙、聖人國を出でて去り、大力、諸神其の國を護らす、大臣諍ひ競ふて、水早調はず、劫賊縱横にして、人民飢饉し、疫癘疾病して、死亡すること無數ならん。自ら作すことを知らずして、諸天を怨む」と。信なる哉斯の言、明、皎日の如し。^③經に曰く、「如來は是れ眞語者、實語者、如語者、不誑語者、不異語者」と。今時の護法の檀那、釋氏僧尼、如來の遺囑に違して、而して如來の禁戒を犯さんもの、^④實所歸ること無うして、^⑤鐵城、待つことあり。孟子の曰く、「堯の言を誦して、堯の行を行はば、是れ堯ならまののみに。」張無盡の云く、「佛の言を信じて、佛の行を行せば、是れ佛ならまののみに。」誠なるかな、佛の言を信じて、佛の行を行すれば、則ち皇基、固くして文武榮を敷き、國土豊かにして人民樂を受け、萬邦來庭す。何れの福か臻らざらん。嗚呼！^⑥末法惡時、聖を去ること浸く遠し、其の純一

① 薩苟は梵語なり、黃華と譯す樹形高大にして海岸に生ず、其華香氣殊に優れたり。
 ② 決しては必ずの意なり。
 ③ 經、金剛經を指すなり。
 ④ 鐵城は地獄。
 ⑤ 張無盡、名は南英、宋人なり、徽宗皇帝の時、丞相たり、初め東林總禪師に參じ、後又兜率悅禪師に師事して宗乘を究む、護法論を著す。
 ⑥ 末法惡時、正、像、末三時の第三、佛滅後千五百年の正像の二時を過ぎて、後一萬年は佛法漸次衰微に歸するが故に、末法惡時と云ふ。

なることを求むること、亦難からざらんや。此の弊佗なし、情想の浮塵の爲に惑され、利慾の妄境の爲に使はれて、己を忘れて物を逐ひ、眞を棄て、偽を取る。境を取ること既に熟すれば、心源混濁して、見聞聲色を出でず、迷妄に自縛するを以て、^①諸趣に流轉して、本源に返らざるもの、舉世皆是れなり。若し能く一念非を知つて、性の本に復り、心の源を悟らば、則ち情想利慾、皆吾が妙用たらん。即ち此の無窮の妙用を以て、無爲の皇化を助けて、能く佛祖の徳を報じ、能く君臣の恩を酬いば、則ち亦善からざらんか。凡そ佛法の興廢は、係ると君臣にあり、則ち豈釋子を草芥に棄てんや。其の法を扶持せんことを欲して、聊か禪宗の本末を書して、以て大法萬分の一を補ふ、其の淺を量らずと謂つべきのみ。嘗て聞く、^②能仁氏の教を垂るゝ、必ず禪を以て其の宗と爲し、佛を其の祖となす」と。祖と云ふは、乃ち其の教の大範、宗と云ふは、乃ち其の法の大統、大統明かならざれば、則ち天下學佛の者、其の所説を一にすることを得ず。大範正しからざれば、則ち其の所説を質すことを得ず。夫れ古今三學の輩、競ふて其の所學を以て相勝つことは、蓋し宗明かならず、祖正しからずして、其の患を致すなり。我が朝の山王院大師の云く、「諸法の至極は禪を以て源となす、諸宗の奧義は、教内の理法なり。」宗門と云ふは、修心の教外なり、教法の至極を以て禪

① 諸趣に流轉す、諸趣とは迷界の六趣、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上なり、衆生は各業に引かれて、此間に生死流轉す。
 ② 釋子は佛弟子なり。
 ③ 能仁氏、梵語、釋迦を譯して能仁と云ふ。
 ④ 三學は教、律、論なり。
 ⑤ 山王院大師、智證大師の別號なり、智證は岡城寺の開祖。

を推すべきにあらず、何ぞ況んや自餘小乘をや。諸流は海を以て極となす、萬法は空を以て極となす、群生は佛を以て極となす、諸佛は禪を以て極となす。故に 傳教大師、慈覺等の若きんば、在唐の時、神秀門下の宗師に參じて、傳法受衣して、此の禪を以て内證となして、秘して諸佛頂上の宗と曰ふ、又佛心宗と曰ふ。其の事碑の文に載せて、宋城天台山大慈寺に在り。安然和尚の教時諍に云く、傳教大師の所承の血脈、内證の佛法を檢ふるに、乃ち三譜あり、一には達磨の付法、二には天台の相承、三には眞言の血脈、禪門の付法は、以て佛心を傳ふ。釋尊一代多く 答歸を施す、最後佛心印を傳へて、教文に滯らず、是れ諸佛の心處なり。弘法大師、禪宗秘法記を述して云く、自證は曹溪の流を酌み、化佗は惠果の旨に在り」と。故に本朝孝徳の御宇、白雉四年癸丑、元興寺の道昭和尙、法を求めて入唐す。尋で 玄奘三藏に遇ふて、益を請ひ業を受く、藏、特に以て寵恭す。謂つて曰く、經論義廣し、一生二生にも究竟すること能はじ、佛心宗は、乃ち直に聖位を起ゆる究竟の頓法なり。汝禪門を學して、東土に傳ふべし」と。昭、教を奉けて禪を習ふ、悟る所稍多し。

傳教大師、最澄は本朝天台宗の開祖、比叡山延曆寺を開く、桓武帝の勅を奉じて入唐し、天台山國清寺の道遠、佛巖寺の行滿に一宗の支旨を受け、亦其宗の禪を唐興縣の嶺然に嗣ぐ、註法華經等數十部の著書あり。
 慈覺大師、圓仁は初め最澄に師事し、後入唐して諸教を研め、歸朝して天台座主となる、顯揚大成論等凡そ百部の著述あり。
 神秀、支那北宗禪の祖、法を五祖弘忍大滿に嗣ぐ、五祖の嫡嗣六祖大師惠能の頓悟を主とするに異なりて、漸悟を唱ふ。
 天台山、浙江省台州府天台縣の北、天台宗の根本道場にして智者大師の開く所。
 安然和尚、天台宗、叡山の學

藏を辭して歸朝して、元興寺の東南の隅に於て、別に禪院を建て、住す。行業の輩、多く從つて習禪す。種々の神異、日本記に備なり。聖徳太子、昔、片岡の路の垂に於て忽ち飢人に逢ふ、乃ち達磨大師の應變なり。曾て問答歌詠を遺す、傳あつて記す。嵯峨の聖代、橘の太后、禪寺を建て田地を寄す。弘法大師、唐朝の義空、契元、惠曇等の禪師を請じ、衆を安じて行道せしむ。興禪碑刻、今に及んで東寺に存す。昔より禪法此の國に傳はる、年世積むこと遠し。凡そ 般若多羅指頭の光明の到る處、聖賢出世して、廣く群品を利す。近ごろ禪師あり、其れ號して、大覺、兀庵、無學、大休と曰ふ、皆是れ宋士の英傑、法門の棟梁なり。慈惠外に宣べ、神機内に湛ふ、弘法を務となし、

僧なり、圓仁、遍略に學ぶ、五大院大徳と云ひ、阿覺大師と諡す、其著百餘部あり、教時諍は其一なり。
 答歸、答は魚を、蹄は獸をとする器具なり、之れより轉じて目的を達する方便手段に例ふ、魚を得て答を忘る等の語あり。
 弘法大師、空海、眞言宗の開祖、入唐して京城青龍寺惠果に密教の奥旨を得、歸りて高山野山を開く、著書頗る多し、其他の事蹟よく世の知る所たり。
 曹溪の流れ、禪宗なり、曹溪は六祖大師を云ふ。
 惠果の旨、眞言宗なり、惠果は空海の師。
 元興寺、奈良の南にあり、蘇我馬子之を建つ、元、法興寺と云ひ、又飛鳥寺とも云ふ。
 道昭和尙、白雉四年唐に航し

を契に師事す、歸朝して天武天皇二年大僧都となる。
 玄奘三藏、經經の大家、唐の貞觀三年萬里を排して入竺し遊歴研學十七年間、歸りて諸經論を譯述す、其數凡そ七十五部一千三百三十卷。
 片岡、大和國葛下郡にあり。達磨大師飢人の身を現じて此里に於て聖徳太子に逢ふ、其歌詠は、
 太子、しなてるや片岡山の飯にうゑて
 伏せる旅人あはれ親なし。
 飢人、いかるやとみの小川のたえばこそ
 我が大君の御名は忘れじ。
 詳しくは元亨釋書にあり。
 橘の太后、嵯峨天皇の后、嘉智子、檀林皇后と稱す、深く佛法に歸し、空海に見えて密教を聞き、又唐土に禪宗あるを聞きて義空等を請せしめ

度生を懐となす。鯨波を憚らず、遠く此の國に
來り、夙縁を以て檀那の信心に契合す。誓願に
乗じて、大いに覺王の梵刹を啓く。禪河の餘
潤を酌んで、普く枯槁を活し、佛日の末光を輝
かして、廣く昏識を照す、皆聖位の中より來
る。言、多羅の識に叶ひ、法、流通の時に應
ずるものなり。今時の人、寡識にして其の本を
推詳すること能はず、是を以て經論、諸錄、正
宗記等の要語を撮撫して、以て宗祖興禪の本末
を校へて、編して一卷となして、名けて興禪記
と曰ふ。其の證據する所、固に臆記にあらず、
明文皆大經大論より出でたること、最も詳かな
り。ある者問うて曰く、「宗旨を明かさんと欲せ
ば、只純ら祖意を提ぐべし、何の用ぞや、兼て諸佛菩薩の言教を引いて、以て 指南とするや。」答へ
て云ふ、「從上是れ一向に教を看るを許さざるにはあらず、恐らくは佛語を詳かにせずして、文に隨

①義空、唐人、法を鹽州齊安に
嗣ぐ、來朝して嵯峨檀林寺に
住す、寺は檀林皇后の建立。
②契元、唐僧、後、來朝せる人。
③惠夢、入唐して齊安に安禪し、
義空を伴ひて歸朝し、初め東
寺に居り、後檀林寺に移る。
④般若多羅は達磨大師の師。
⑤大覺、鎌倉建長寺の開山、關
漢道隆和尚、宋西蜀の人なり、
無明惠性に嗣法す、寛元四年
來朝す、北條時頼建長寺を建
て、師を請す、大覺禪師と勅
諡す。
⑥兀庵、尊寧は無準師範に嗣法
す、宋西蜀の人、文應元年來
朝す、時頼の尊信を得て建長
寺の第二代となる、後西歸

す、宗覺禪師と諡す。
⑦無學、祖元は兀庵と同じく無
準に嗣ぐ、宋人なり、時宗の
請によりて來朝す、時宗鎌倉
に圓覺寺を建て、師を開山と
す、佛光國師と勅諡す。
⑧大休、正念は宋温州の人、石
溪心月に參じて其法を嗣ぎ、
來朝して鎌倉淨智寺に住す、
佛源禪師の諡號あり。
⑨弘法は佛法の弘布なり。
⑩梵刹は寺院を云ふ、其語は清
淨なる國土の義。
⑪昏識は迷心なり。
⑫多羅の識、多羅は般若多羅尊
者、識は豫言なり、尊者が後
世禪法の盛んなるを告げられ
たるは前に出づ。
⑬指南は證據の意。

つて解を生じて、佛意を失せんことを慮る。或は詮に因つて旨を得て、心境對治を作さず、直に佛心
を了らば、又何の過あらんや。佛祖の弟子、本師の語を引いて、學徒に訓示して、言に因つて道に應
み、法を見て宗を知らしむ。故に圭峰の云く、「諸宗の始祖は、即ち是れ釋迦、經は是れ佛語、禪は是
れ佛意、諸佛の心口、必ずしも相違せじ。」達磨、楞伽經を以て衆生の心を印し、佛語心を宗となし、
無門を法門となす。心を宗となすとは、即心即佛なり、無門を法門となすと云ふは、本性の空性に達
して、相あることなく、亦門あることなし。但義上の文を執して、語に隨
つて 見を生ずること莫れ。意を得て言を忘じ、理を悟つて教を越ゆる、
正に是れ魚を得て 筌を忘れ、兔を得て 蹄を忘るゝの謂なり。直に須ら
く詮下の旨を探つて、本宗に契會すべし。則ち無師の智現前し、天真の道
味からず。華嚴經に云く、「一切の法は、即心自性なり」と知らば、慧身を
成就して、佗に由つて悟らす」と、是れなり。諸宗は乃ち教理行果なり。所
謂、諸聖の所説の 名言、之れを教と謂ふ、名言に依つて趣向する、之れ
を理と謂ふ、名言に依つて行する所、之れを行と謂ふ、名言に依つて證す
る所、之れを果と謂ふ。皆是れ 功用、因果、次第の法を出でず、果して
本來清淨 天真の佛にあらず。纔に玄を説き妙を談す、大いに 好肉に瘡

①見は見解なり。
②筌はうへ、漁りの具なり。
③蹄はわな、禽獸を捕る具、魚
兔を得れば筌蹄には用なきな
り、恰も河海を渡り終れば、
舟船に執着するの用なきが如
し。
④華嚴經、大方廣佛華嚴經にし
て、華嚴宗所依の經典なり。
⑤名言は名字、言句なり。
⑥功用、因果、次第の法、漸漸
に修行の功を積み、其因縁に
よりにて次第に佛果の聖位に上
る法門なり。

を剋るに似たり。顯を立て密を論する、正に是れ。大圭に瑕を生ず。古聖之れを情に聖量を存し、解、果因に在りと謂ふ。未だ聖情を超越し、諸の影迹を過ぐるに能はず。若し一念縁起無生なれば、頓に三乗一切の諸位を超えて直に自心の本佛を證す。其の性、虚空に等しく、其の體、法界に同じ。①三明、本圓かにして、②六度、虧くることなし。靈機、待を絶し、眞常、運に任す。衆を鑑みるに心なし、照にして常寂なり。所以に道く、「靈光、洞かに照して、迥かに根塵を脱す、體、眞常を露して、文字に拘らず、心性染むることなし、本自ら圓成す、但妄縁を離る、是れ。如々の佛なり。」と、予、草礫の賤軀、年運んで老いたり、世に於て誠に望む所なし、但此の法、微せず味せずして、③流通窮りなからんことを。

①好肉に瘡を剋る、疵なきに疵なきをなすなり。
 ②大圭、圭は瑞玉にて之を作る、寶玉なり。
 ③三乗、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘なり、乘とは運載の義なり、衆生に上中下の三種の根機あり、三乗の内各自の適する教法によりて佛道に悟入す。
 ④三明、宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明にして過去、現在、未來を知る神通力なり、六神通中の宿明通、天眼通、漏盡通に同じ。
 ⑤六度、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅密なり、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意にして、大乘の菩薩の修する行なり。
 ⑥如は本來變異なきの義。
 ⑦流通、佛法の流れ弘まること。

國譯興禪記終

興禪記

沙門靜照述

佛祖正法流於華竺的的相承綿綿不斷如傳燈曰如來將化預命摩訶迦葉云吾以清淨法眼涅槃妙心實相無相微妙正法今付於汝汝當護持并勅阿難貳其傳化無令斷絶廣燈曰大迦葉謂阿難云婆伽婆未圓寂時多子塔前以正法眼藏密付於我我今傳付於汝原是二者蓋體涅槃及阿含等經述之爾後佛祖授受凡西天二十八傳至菩提達磨自達磨來於震旦五傳而至曹溪自曹溪一傳而覺樹分條慧燈列燭如水傳器續佛慧命是爲青原是爲南嶽自青原南嶽不十傳則分爲五宗各擅家風是曰臨濟是曰曹洞是曰雲門是曰沩仰是曰法眼應機對雖建立不同而會歸則一莫不箭鋒相拄鞭影齊施攝物利生啓悟多矣其竺土佛祖密傳奧旨化行機緣粲然備載於傳廣續等之諸錄匪遑重記達磨兒孫相傳禪者如來祕密微妙禪也傳燈曰是諸佛萬德之源故名佛性^{出涅槃經}亦是衆生迷悟之源故名如來藏識^{楞伽經}亦是菩薩萬行之源故名心地^{梵網經}悟之名慧修之名定定慧通名爲禪凡禪定一行能發起性上無漏智慧一切萬行萬德皆從定發故欲求聖道者必須修禪然禪有種種帶異計欣上厭下而修者是外道禪正信因果亦以欣厭而修者是凡夫禪悟我空見處偏真而修者是小乘禪悟人法二空所顯真理而修者大乘禪也若頓悟自心本來清淨元無煩惱

無漏智性本自具足，此心卽佛，靈明湛寂，廣大融通，畢竟無異，無爲無住，無修無證，無塵可染，無垢可磨，爲一切法門宗源者，是最上乘禪，又名如來清淨禪，亦名一行祕密王三昧，亦名真如三昧，此是一切三昧根本，證此三昧根本，則何法門而不開，何三昧而不現，風柯月渚，並可傳心，煙島雲林，咸提妙旨，念念超於威音之前，步步蹈於毗盧之頂，達磨門下，展轉相承者是也。圭峯云：諸家高僧所解教義，雖最圓妙，然立趣入之門戶，次第之階差，只是前所舉諸禪之行相也。唯達磨所傳者，頓同佛體，迥異諸門，故維揚法慎大律師云：教乘極談，包一切經義，東山法門，是一切佛乘，色空兩忘，慧定雙照，不可得而稱也。所以不立文字，直指心源，不踐階梯，徑登聖域，無過此宗者也。斯乃佛祖冲密之幽旨，群生靈覺之本源，卽相無觀，空空不能測其實際，卽慮絕，知玄玄不能窮其指歸，永脫識智，全超言象，靈明恢廓，虛凝淡泞，清宵絕際，明月孤圓，神輝潛映，而不滅，萬相俱應，而不生，顯既非有，隱豈爲無，寂焉而動，動焉而寂，天真自性，本淨明妙，出沒無方，應化無礙者也。自少林之花開五葉，曹溪之燈分十方，以降，蓋以格高調古，言峻理幽，等閑垂一機，示一境，盡是與人抽釘拔楔，離却泥水，活人眼目，直使博地頓悟，全心是佛，不歷果位，三身四智，本來具足，是聖是凡，圓成一體，厥後子孫直指單傳，殺活自由，一摸脫出，皆其英徽之士，奇傑之流，列之法藏，如日經天，依此宗得道者，從古至今，不可以周知而悉數也。其法雨灑於天上人間，廣霑諸有，其道風扇於佗方此土，普濟群惑，可謂盡善盡美之法要，無比無儔之正宗也。蓋大雄付囑之旨，正眼流通之道，教外別行，不可思議者也。不立文字，教外別傳者，世尊以青蓮目，顧視飲光，飲光但一微笑，達磨命門弟子各言其所得，二

祖唯禮三拜，其旨不可以文字義說宣示。正宗記云：達磨自承佛所傳，迄至于今，不絕者，蓋謂此法祕密無言無示，難信難到，唯是已證之者，乃知其所以，以爲究竟故也。若其究竟之理，則佛之境界，祕密微妙，非文字言義可至，必密傳妙證可以至矣。直以心證，豈在乎經教語言文字之間耶。馬鳴曰：離念境界，唯證相應。故龍樹曰：不可說者是實義，可說者皆是名字。斯二祖師尊其心證之親密，以別其循迹而情解也。離念者，圓明覺了，虛明自照耳。清涼國師澄觀大法師曰：果海離念而心傳，圭峯乃釋之曰：此卽達磨以心傳心，不立文字之意也。大聖人果以其正宗默證微密，遺於後世，爲其標正印驗者，固亦已見於吾佛之當時。摩竭掩室，毘耶杜詞，若知有者，默識其趣向矣。學者亦尊而信之者歟。智度論曰：禪最大如王言，禪則一切皆攝。佛菩薩諸三昧及佛得道捨壽如是等種種勝妙功德，皆在禪中。謂此義曰：解脫禪，三昧皆名爲定。定名爲心，其所謂心者，乃諸禪祖之所傳者也。正宗記云：吾佛以正法要爲大教之宗，以密傳受爲一大教之祖，其宗乃聖賢之道源，天地生靈之妙本也。其祖乃萬世學戒定慧者之大範，十二部說之真驗也。是以龍樹祖師禪門名爲宗門，卽謂吾宗門，乃釋迦文一佛教之大宗正趣矣。所謂之意義者，皆見於大藏之間，且以廬山遠公統序與禪經智度論涅槃經四者之說詳其奧旨，夫三業之興，以禪智爲宗，經云：道從禪智近，泥洹豈非謂禪爲經律論三學者之所宗乎。八萬四千法門，莫不以此密傳極證爲之真要，所以道三世諸佛之所證，蓋證此也。如來爲一大事出現，蓋爲此也。一切衆生，妙圓覺心，本無生滅，圓同大虛，如淨瑠璃內含寶月，如大明鏡照了萬殊光體，無二如大摩尼映於五色，隨方各現，如百千燈光照一室，其光圓滿無

壞無雜此宗旨也。不見道，不歸此門者，執言滯旨，守名喪實，攀葉亡根，棄寶負薪者，謬之甚也。智度論曰：般若波羅蜜秘密法者，其旨亦驗在禪中矣。涅槃經曰：我今所有無上正法，悉以付囑摩訶迦葉，是迦葉能為汝等，作大依止。校此則大聖人遺意，豈不果以妙密清淨禪為其教之大宗也。故先德命吾禪門，謂之宗，而尊於教外親證也。曰佛心宗，亦名諸佛頂上宗。然此禪要，既是吾一佛教之宗，則其傳法要者，三十三祖，自大迦葉、阿難、暨龍樹、達磨、相繼，至乎曹溪，乃皆一釋教之祖也。淺識者妄分達磨、曹溪，獨為禪門之祖，不亦甚謬乎。今時學者，各私師習，而黨其所學，不顧法要之元祖，不審求其大宗正趣，反忽乎宗門單傳心印者，謂不如吾宗之勝，是不唯違叛佛意，亦乃自昧其道本實，可悲傷哉。若具眼禪者，所示語默動靜，展縮殺活，以機奪機，以用破用，出羅籠，掃言滯，操金剛王劍，奮師子全威，一機一境，一棒一喝，轉轉轉轉，巍巍持酒器，示圓相，執赤幡，擊明鑑，皆先佛之妙用，迅捷之風規也。不具正眼，不可輒見此妙用。聖意獨遺，屬吾密傳之宗，乃得發明耳。何以如此，以其相宜故也。不然，奚自達磨祖師已來，而其風大振於天下者耶。達磨者，觀音應化，大法正主，直指本心，是佛豈亦不信乎。若夫修多羅教，乃大聖人權巧，應機垂迹，而張本且假世名字語說，發理以待人悟證耳。文字言教，不是依憑處。唯要言外契證，然理妙無所教，雖說及而語終不能極。其所謂教外別傳者，非果別於佛教，正其教迹所不到者也。大論曰：言似言及，而其旨幽邃，尋之雖深，而失之逾遠。其此謂也。楞伽經序云：學佛之蔽，至於溺經文，惑句義，而人不體玄，則言禪以救之，其理窮則能變，變則能通，善其變通者，其始發於吾之正宗焉。隋智者大師曰：佛法至理，不可以言宣，豈存言方語本

十二部乎。按智度論曰：諸佛斷法愛，不立經書，亦不莊嚴語言，如此則佛祖其意何嘗在於教乎。又經曰：修多羅教，如探月指，若復見月了，知所探，畢竟非月，是豈使人執其教迹耶。證入禪門，則知一切教門，如探月指也。所以經曰：始從鹿野苑，終至跋提河，中間五十年，未曾說一字，苟以意識知解而為強辯者，雖益辯益踈者也。龍樹論曰：若分別憶想，即是魔之羅網，不動不依，止是則為法印，待子潔清，分別戲論之心，始可信吾教外所傳，乃真佛法印也。斯固教外默傳之旨，圓極深密之謂也。密者非言非默，識識所不及也。智知所不到也。此奧密雖載於經教，而經教但言說耳，以心傳心，最上乘禪。天下謂之宗門，不亦宜乎。太宗皇帝修心詩曰：初祖安禪在少林，不傳經教但傳心。後人若悟真如性，密印由來妙理深。是以諸佛得之昇等妙，衆生證之歸本源。頓圓速疾之門，無過此宗也。以故梵釋龍鬼，傾心擁護，菩薩賢聖，應世紹隆。般若多羅告達磨大師云：汝所化方獲菩提者，不可勝數。其道行脩潔，燈燈相續，光明照世。宗風益振，傳法利生，及八千年矣。以是念之，未來流通，不可涯涘。法流此土，年世久遠，今時中興，豈有難哉。龍興雲集，神動天隨，故歷代聖帝明王，賢臣儒道，服膺而歸，興宗門者，不可殫紀。唐太祖以神武廣開度門，太宗以欽明深究禪奧，至宋真宗、孝宗，皆歸真乘，以助至化，典御萬邦，普濟群品，則散服縉戈，扇無為之道，移澆反樸，弘不言之化，瀚海天山之地，盡入提封，龍庭鳳穴之鄉，咸霑法雨，二儀澄靜，國康民樂，六合廓清，歲稔時和，猶最勝王經說：八萬四千城邑，八萬四千諸王，各於其國，受諸快樂，是則親近有惠之法師，信受如來正法故。佛之明言，豈不謂君臣與釋氏共興正法哉。國土衰微，人民澆惡，淳者日漓，厚者日薄，邪強正弱，崇愚棄智，皆是主法

之眼不及古也，不解此旨，而輒誘毀者，負覺王之本，取迷者之末，助桀爲虐，其倒錯豈不甚哉！以毀謗一言，則百劫千生，斷佛種性，塞正法流通之門，開邪惑顛倒之路，其逆罪必有感焉。豈不見道，一切重罪，皆可懺悔，誘佛法罪，不可懺悔，誠哉是言。誘佛法者，是自昧其心，自招其罪，決矣。古聖云：聞而不信，尚結佛種之因，學而未成，猶益人天之福，不聞乎？廢毀佛者，禍不旋踵，罪萃其身，惜乎昧而不能學，誘而招其罪，永斷佛種，此宗不是，識學詮文所解，舉揚宗乘，十二分教，瓦解冰消，全提祖令，盡大地人，亡鋒結舌，譬如金翅鳥王入阿盧大海，擊開雪浪，直取龍吞，眼睛定動之間，早已喪身失命，機前薦得，落二落三，言外拶透，拖泥帶水，况乃意識卜度，披教和會，隨言取義，析文生解，何啻白雲萬里，所以道靈鋒寶劍常露現前，亦能殺人，亦能活人，衲僧眼目，函蓋世界，把定乾坤，指穢邦爲淨土，呼地獄作天堂，轉位回機，移星換斗，逞通天作略，用跨海神機，終不向惡水坑頭，葛藤堆裏，着到淨裸裸赤灑灑，天無四壁，地絕八荒，萬機不到，聖眼莫窺，故同安察云：三賢尙未明斯旨，十聖那能達此宗，緣覺辟支，四果聲聞，尙不與其列，況其下者乎？在聖則大乘菩薩，在天則帝釋梵王，在人則王臣僧尼，皆有超群決定之信，方能透徹，豈以局促籠檻之量，測深密方外之旨乎？經曰：以思惟心，測度如來圓覺境界，譬如螢火燒須彌山，正謂此也。佛法東來，無所不至，千古萬古，宗綱不墜，如北辰據位，百川朝宗，預其徒者，道超三界，德貫神明，若馬祖百丈，臨濟德山等，開大機，發大用，卷舒擒縱，皆據本分，萬世不拔，獨盛於天下者也。若裴休、陸亘、李玄、龐老輩，皆探宗猷，體究淵源，腳踏實地，雖在塵中，現宰官身，爲內外護，於法海中，能致津濟，在慈行禪火中生蓮者也。是以諸王群臣，或建寺宇，或

置田園，不忘如來付囑，使其真正釋子，安心行道，隨方設化，則諸天善神，乘誓願力，來護其國，依其冥助，王臣消災爲福，士庶變凶爲吉，信是除群惡之神符，聚千祥之祖宗矣。此法不興，則諸天不守其國，諸天不守其國，則諸難競起，上下不安也。誠所謂國家之盛衰，在佛法之興亡者歟。然法由人興，道待緣顯，有法無僧，寶雖存其名，而其法莫傳，有道無檀資，雖立其志，而其道難興。聞佛經曰：昔世尊在於靈山會上，告諸大弟子曰：我滅度後，清淨正法，悉以付囑國王。大臣有力，檀那能致外護，能爲興持，令正法之化益，及未來世，莫令斷絕。由此言，佛教損益弛張，在國王大臣有力，檀那之慈明矣。吾佛正法，源源相繼，流於此國，忝預佛之徒，今以其法欲有所云，爲豈不賴王臣檀那之主張乎？然今時敗群邪輩，假如來衣，寄名禪門，披師子皮，作野干鳴，內無真證，外馳邪思，縱振奸巧，誑惑世間，舉諸醜惡，以裨販佛祖，所守如塵俗之匹夫，略無羞恥，便有瞎禿子，引衆盲執，盲惑者，爭人爭我，譬如蒼蠅聞臭肉，聚頭鬪咬，相似。吾宗凋喪，皆緣此得也。少林苗種，豈不嗟傷乎？如貴書云：禪侶中，或乖戒律，好名利，不顧國家之費，課威儀，法則致華美，過差之族，甚非要樞乎？所舉過惡，皆在不律之邪輩歟。凡濫如來之法服，而犯如來之重戒者，制之國家，有刑憲，律之叢林，有規矩，能依禪律之法式，罰一戒百，則信者遷善消罪，真者悟心，證聖，釋氏之徒，豈不念佛祖之慈，亦不恥自身之惡哉！真正禪流，以定爲身，以慧爲心，以慈爲本，忘己救佗，不營世家，不修形骸，止三衣一鉢，一粥一飯，補破遮寒之外，而所費寡矣。視聲色似浮塵，視名利如谷響，守佛祖法式，求無上道者，豈取幻世之華美爲志哉。噫！一向掃邪爲本，返加毀乎正耶？是以化邪歸正，則含悲必發，智發智故，布無緣之慈，含悲故運。

同體之心，以同體則無棄人，何樂而不與，以無緣則無遺物，何苦而不救，利鈍齊觀，冤親普利，是佛之大慈悲也，何異皇道無爲之化哉，是以十輪經云，若諸比丘，依佛法出家，一切天人，阿修羅等，皆應供養，若有破戒比丘，爲諸煩惱結使，所壞猶能開示，是以依我出家，若持戒，若破戒，我悉不聽，輸王大臣，謫罰繫閉，加鞭杖，乃至斷命，况復餘輕，犯小威儀，破戒比丘，雖犯禁戒，其戒勢力，猶能利益無量天人，譬如燒香，香體雖壞，熏佗令香，破戒比丘，亦復如是，自墮惡道，能令衆生增長善根，以是因緣，一切白衣，皆當守護，尊重供養，佛說偈言，蘆荀華雖萎，勝於諸餘華，破戒比丘，猶勝諸外道，薩遮尼健經云，若有沙門，破戒，或繫閉打，或令還俗，或斷其命，若犯如是根本重罪，決墮地獄，受無量苦，以王國土行，此不善，諸仙聖人，出國而去，大力諸神，不護其國，大臣諍競，水旱不調，劫賊縱橫，人民飢饉，疫癘疾病，死亡無數，不知自作，而怨諸天，信哉斯言，明如皎日，經云，如來是真語者，實語者，如語者，不誑語者，不異語者也，今時護法檀那，釋氏俗尼，違如來遺囑，而犯如來禁戒者，實所無歸，鐵城有待焉，孟子曰，誦堯之言，行堯之行，是堯而已矣，張無盡云，信佛之言，行佛之行，是佛而已矣，誠乎，信佛之言，行佛之行，則皇基固而文武敷榮，國土豐而人民受樂，萬邦來庭，何福不臻，嗚呼，末法惡時，去聖浸遠，求其純一，不亦難乎，此弊無佗，爲情想之浮塵，所惑，爲利慾之妄境，所使，忘己逐物，棄真取僞，取境既熟，心源混濁，見聞不出聲色，以迷妄自縛，流轉諸趣，不返本源者，舉世皆是，若能一念知非，而復性之本，悟心之源，則情想利慾，皆爲吾之妙用，卽以此無窮妙用，而助無爲皇化，能報佛祖之德，能酬君親之恩，則不亦善乎，凡佛法興廢，係在君臣，則豈棄釋子於草芥乎，欲扶持其法，

聊書禪宗本末，以補大法萬分之一，可謂不量其淺耳，嘗聞能仁氏之垂教，必以禪爲其宗，而佛爲其祖，祖者乃其教之大範，宗者乃其法之大統，大統不明，則天下學佛者，不得一其所說，大範不正，則不得質其所證，夫古今三學輩，競以其所學相勝者，蓋宗不明，祖不正，而致其患矣，我朝山王院大師云，諸法至極，以禪爲源，諸宗與義者，教內之理法也，宗門者，修心之教外也，以教法之至極，非可推禪，何況自餘小乘乎，諸流以海爲極，萬法以空爲極，群生以佛爲極，諸佛以禪爲極，故若傳教大師慈覺等，在唐之時，參神秀門下之宗師，傳法受衣，以此禪爲內證，祕曰，諸佛頂上宗，又曰，佛心宗，其事載於碑文，在於宋城天台山，大慈寺，安然和尚教時，證云，檢傳教大師所承血脈，內證佛法，乃有三譜，一達磨付法，二天台相承，三真言血脈，禪門付法，以傳佛心，釋尊一代多施，筌蹄，最後傳佛心印，不滯教文，是諸佛心處，弘法大師述禪宗祕法記云，自證酌曹溪之流，化佗在惠果之旨，故本朝孝德御宇，白雉四年癸丑，元興寺道昭和尙求法，入唐尋遇玄奘三藏，請益受業，藏特以寵恭，謂曰，經論義廣，一生二生，不能究竟，佛心宗乃直超聖位，究竟頓法也，汝學禪門，可傳東土，昭奉教習，禪所悟稍多，辭藏歸朝，於元興寺東南隅，別建禪院住，行業之輩，多從習禪，種種神異，備於日本記矣，聖德太子昔於片岡路垂，忽逢飢人，乃達磨大師應變也，曾遺問答歌詠，有傳記之矣，嵯峨聖代，橘太后建禪寺，寄田地，弘法大師請於唐朝義空契元慧萼等之禪師，安衆令行道，興禪碑刻，及今存東寺，自昔禪法傳於此國，年世積遠，凡般若多羅指頭之光明，到處聖賢出世，廣利群品，近有禪師，其號曰大覺，兀庵，無學，大休，皆是宋土之英傑，法門之棟梁也，慈悲外宣，神機內湛，弘法爲務，度生爲懷，

不憚鯨波遠來此國以夙緣而契合檀那之信心乘誓願而大啓覺王之梵刹酌禪河之餘潤普霑於枯槁輝佛日之末光廣照於昏識皆從聖位中來言叶多羅之識法應流通之時者也今時人寡識不能推詳其本是以撮摭經論諸錄正宗記等之要語以校宗祖興禪之本末編成一卷命曰興禪記其所證據固非臆說明文皆出乎大經大論最詳矣有者問曰欲明宗旨只合純提祖意何用兼引諸佛菩薩言教以爲指南乎答云從上非是一向不許看教恐慮不詳佛語隨文生解失於佛意或因詮得旨不作心境對治直了佛心又有何過乎佛祖弟子引本師語訓示學徒令因言薦道見法知宗故圭峰云諸宗始祖卽是釋迦經是佛語禪是佛意諸佛心口必不相達達磨以楞伽經印衆生心佛語心爲宗無門爲法門心爲宗者卽心卽佛無門爲法門者達本性空性無有相亦無有門但莫執義上之文隨語生見得意忘言悟理超教正是得魚忘筌得兔忘蹄之謂也直須探詮下之旨契會本宗則無師之智現前天真之道不味華嚴經云知一切法卽心自性成就慧身不由佗悟是也諸宗乃教理行果也所謂諸聖之所說名言謂之教依名言趣向謂之理依名言所行謂之行依名言所證謂之果皆是不出功用因果次第之法也果非本來清淨天真佛纔說玄談妙大似好肉剜瘡立顯論密正是大圭生瑕古聖謂之情存聖量解在果因未能逾越聖情過諸影迹若一念緣起無生頓超三乘一切諸位直證自心本佛其性等虚空其體同法界三明本圓六度無虧靈機絕待眞常任運無心鑑象照而常寂矣所以道靈光洞照迥脫根塵體露眞常不拘文字心性無染本自圓成但離妄緣是如如佛矣予草礫賤軀年運而老於世固無所望但欲此法不微不昧而流通無

窮耳

興禪記終

國譯博山和尚參禪警語

解題

博山警語は、博山の無異禪師、明末禪風の委靡して振はず、學者その方に迷ふを愍み、禪病を指摘して、其の指針を開示したるもの是れなり。

傳を按ずるに、師諱は大儀、一の諱は元來、學者稱して無異和尚と云ふ。龍舒の沙氏の子、年十六にして出家の志あり、金陵に遊びて瓦棺寺を過ぎ、雪浪師の法華を講ずるを聞き、喟然として嘆じて曰く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず、習講すとも何をかせん」と、遂に棄て去る。五臺の靜庵通和尚に會ふて出家す。通、空觀を習はしむ。五年の後、通に別れて寶方の無明老人に參じ、又閩に入り光澤の白雲峰に止まる。遂に寶方の印宗上座に因つて印可を得て衆に首たり。萬曆三十年の夏、信州鷺湖の圓戒寺に往く、亦第一座を以て屬せらる。この冬、豐邑の博山に隱靜す。三年の後、邑の劉孝廉等、師を請して博山の能仁寺に住せしむ。同じく三十六年、無明老人、法を閩中の薰巖寺に開き、師を召して分座說法せしむ。是れより博山の宗風遂に天下に震ひ、八百人の善知識と稱す。而してより閩中の鼓山、大仰の諸刹も亦屢々請ふて結制、頻りに鞭影を垂る。崇禎二年金陵の紹紳、

師を天界寺に邀へて法幢を堅てしむ、四衆狂奔し、號して四輩の弟子となるもの、萬を以て數ふるに至る。崇禎三年九月寂す、僧臘四十一、世壽五十有六。翌年冬、全身を能仁寺の西、棲風嶺の陽に葬る。著述に禪警語の外、拈古頌古、淨土詩、宗教答響、宗教通說凡十餘卷、語錄は信地說、回源錄、錫類、法檀歸正錄、剩錄凡二十餘卷あり、並に世に行はる。

國譯博山和尚參禪警語序

警は乃ち醒覺の義なり、或は云く、「驚なり」と。譬は賊あり、巨室を瞰ふ、主人燈を張りて、夜堂皇の上に坐して、警效聲を作す。賊思れて便すること能はず、稍爾として昏睡するときは、則ち間に乗じて入る、橐、之が爲に傾く。故に嚴城に柝を撃ち、刁斗に轆を鳴す、卒に變ありても、虞ることなきことは、其の機先に警備するを以てなり。人、生死の大患あり、廻ち萬劫不醒の長夢なり、況んや六、賊の媒と爲つて、日に家寶を劫む。大覺の雄、痛語警醒すること有らすんば、則ち身を醉夢に終へて、了に悟る日なけん。但睡時、主と做り得ざるのみにあらず、即ち白晝に眼を開いて、魔語すること尤も甚だし。故に博山大師、悲願力に乗じ、來りて大醫王となつて一味の伽陀を用ひて、遍く狂狷の業病を療す。故に禪病の警語五章を示すことあり、直捷簡當にして參禪の骨髓の中の病を把つて、都て説いて透過す。其の做工夫を開示するの語、最も喫緊爲り。眞に是れ禪門一種切要の新書なり。亦

① 博山無異禪師。寶方に嗣ぐ、明末萬曆年中の人。
 ② 堂皇。皇音黃、室に四壁なきを云ひて皇といふ。
 ③ 思。恐、怖、と同義也。
 ④ 稍爾。やうやく。
 ⑤ 橐。倉粟の穀也。
 ⑥ 嚴城。嚴城は防禦の城。
 ⑦ 刁斗。刁斗は軍門には車を以て陣をつくる、轆相向ひて門を作す。
 ⑧ 六。楞嚴經第四の合懺六十三業に曰く、眼、耳、鼻、舌及び身、心と六つ、賊の媒と爲つて家寶を劫む云云。

世を拯ふの 金丹九轉なり。それ禪は假名にして體無し、何ぞ病あらん。蓋し參禪の人、多く執情謬解を起して、心意識に哄殺せらる、機境の上に向つて求めざれば、便ち學解の中に向つて討ぬ。或は古人の言句に膺を礙へられ、或は死水裏に向つて浸殺す、或は無事甲裏に坐在す。これ靈利の心、死し得ざるにあらず、便ちこれ癡著の心、轉するを得ず、故に命根斷じ難く生滅宛然たり、通身都てこれ我が病なり。これ禪に病あるに非ず、甚だしきときは則ち狂と成り魔に著す。佛も亦拯ふべからず、此を業病と名く、亦禪病には非ず。假使ひ種々の心を死し得ても、肯へて工夫を做さざれば、法身の理と相應して、曾て 向上の 關候を踏著せず、飯羅裏に坐在して、輕安自在なり。只箇の輕安正にこれ禪病なり、故に僧古德に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。德云く、無量の大病源」と。此の語 栗棘蓬の如くにして、吞吐すること誠に難し。古人眞參實悟の中より、病過一番し來る、其の垂手の處、自ら亂に 鍼錐を下さず、箇の氣息を絶し、痛痒を識る底の漢にして、方に肯へて診視せんことを要す。是を以て病を識つて乃ち能く病を去り、己を調へて然して後人を調ふ。 三た

- ① 家寶。自己本心の明性を指す。
- ② 大覺の雄。釋尊を大覺と云ふ、雄は尊と同じく豪華の意。
- ③ 覺語。うはこと。
- ④ 伽陀。阿伽陀、此に普去といふ、能く衆病を去る、偈と云ふに同じ。
- ⑤ 狂狷。狷は小心、度量のせまきといふ。
- ⑥ 喫緊。俗に着急といふ。
- ⑦ 金丹九轉。仙藥のいろいる。
- ⑧ 宛然。さながらと譯す。
- ⑨ 通身。からだぢゆう。
- ⑩ 向上。悟道のこと。
- ⑪ 關候。かぎ、からくり。
- ⑫ 羅裏。こしき、ざる。
- ⑬ 法身。無相の眞身、不生不滅の實體也。
- ⑭ 栗棘蓬。いぐりのまま。
- ⑮ 鍼錐。はりきり、なしへのこと。
- ⑯ 三た。三たび。三たびを折りて、楚辭の注に「人九折臂更歷二方藥」乃

び臆を折つて、良醫と爲ると謂つべき歟。博山大師、自來此の道を參究して、極めて是れ融通せり、凡そ言句あれば、皆肯綮に中る。故に高妙玄著の談を爲して、人をして知らざらしむるには非ず、乃ち平日親證實履の境界、見到說到行到用到にして、其義理精明、辯才無礙なり、所以に快く禪病を説くこと。秦宮の玉鏡を握つて、羣僚の肝膽を照見するが如く、一毫も隠諱することを得ず。古今、曲盡牀に踞して、善知識と稱し、禪を説く者、師の如きの妙、儼び罕なり。然して禪病最も説き難く、説けども亦盡すこと能はず。何んぞや、病は即ち法身の病なり、法身無數、病寧んぞ極りあらん。善く法身の病を救ふ者は、病を以て妙劑と爲し、病を以て家常の茶飯と爲し、病を以て 貼肉 汗衫と爲す、善く之を 葆むに在る而已。古人病假の中に於て、游戲して佛事を爲す、蓋し法身、主なきことを看破すれば、病自ら 霍然たり。故に 洞山道く、「老僧看るとき病あることを見ず」と。特、妄想執着に由る故に、禪病競ひ生ず。昔佛楞嚴の五蘊の魔事、及び外道の徧計を説きたまふ、即ちこれ今の人の禪病の中の事なり。然して着は即ち魔と成り、計は即ち外と名く、着せず計せ

- 成三眞醫。とあり、左傳の定公十三年に曰く、齊高強曰三折肱知爲三眞醫とあり、苦心辛苦して、玉成するの意に引用す。
- 肯綮。筋肉の結合する所、轉じて肝要の義に用ふ。
- 實履。實地に履踐する。
- 快く禪病を説く。圓覺經の普覺章に出づ。
- 秦宮の玉鏡。秦の始皇帝は空人を照らして、膽張り心動くものをば之を殺す。
- 曲盡牀。椅子にして、うでのまがりたるもの。日本では僧家に用ふ。
- 法身の病、妄想感智を指す。
- 貼肉。にくにればりつく。
- 汗衫。かたびらにあせず、ともに治し難きことを云ふ。
- 葆。かくす。
- 古人。從容錄に見ゆ、三十六則、萬松曰く云云。

ざるをば、亦未だ病と爲す。所以に云く、「勝心を作さざれば、善境界と名づく、若し聖解を作せば、即ち羣邪を受く」と。法華に云く、「一りの導師あり、善く通塞險難の道路を知る、故に能く彼の衆人を導いて、前んで寶所に至る」と。然らば則ち大師の此の書は、正に末世の舟杭、初心の徑路なり。豈但今日に益あるのみならんや、亦將來に補あり。決して參禪して工夫を做し、大悟門を求めんと欲せば、肯へて此の書を細觀せよ、大いに相爲にするの作略あつて、能く疑情發不起の處に發起し、病根、點不破の處に、點破せしめん。沙を披いて寶を露はして、渠が自ら取ることゝ要する如く、霧を開いて天を見て、人をして迷はざらしむるが如し。截路の中に出身の路あり、死句の裏に活人の句あり、圓珠の盤に走るが如くにして、一語に滯らず、其の妙用此くの如し。人々此の用心を知らば、坐睡を以て道を見るべし。許多の艸鞋錢を費さずして、直に大安樂の田地に到りて、佛祖と鼻孔を同一にして、風を通せん。能く此を以て自ら警する者、衆を警し、復た此を以て自ら愈す者、人を愈すことあらば、亦現在の醫王と名づけん。祖師の命脈をして流通せしめ、國脈と慧脈とをして並び固からしめば、庶はくば大師垂

- ① 霍然。病の早きをいふ。
- ② 洞山云。從容錄九十四則に出づ。
- ③ 楞嚴。楞嚴經十卷あり。
- ④ 勝心。楞嚴には聖心に作る。
- ⑤ 法華に云く。化城喻品の意をとる。
- ⑥ 寶所。極樂といふが如し、禪宗では大悟の地位を云ふ。
- ⑦ 點破。凡夫の地を破りて、悟り境に入點すること。
- ⑧ 萬曆辛亥。明の萬曆三十九年、日本後陽成帝慶長十六年に當る、博山年三十七なり、博山無異禪師は萬曆三年亥の仲冬念有九日に生れて、崇禎三年午の九月十有八日に滅す、世壽五十六、永覺和尚の禪餘外集第四卷に塔の銘あり、出づ。

示の方便願力に負かじと、爾云ふ。是を序と爲す。

萬曆辛亥歲孟秋月

信州弟子劉崇慶和南題

國譯博山和尚參禪警語卷之上

首座 成正集

初心 工夫を做すに示す警語

工夫を做すには、最初に箇の破生死の心を發すこと堅硬にして、世界身心、悉く是れ假縁にして、實の主宰なしと看破せんことを要す。若し本具底の大理を發明せざるときは、則ち生死の心、破せず、生死の心、既に破せずんば、[㊦]無常の殺鬼、念々停まらず、却つて如何んが排遣せん。此の一念を將て、箇の[㊧]門を敲く瓦子と作す、烈火燄中に坐在して、出づることを求むるが如くに相似たらば、亂りに一步を行すことを得ず、一步を停止することを得ず、別に一念を生ずることを得ず、別人の救を望むことを得じ。[㊨]憊麼の時に當つて、只須らく猛火を顧みず、身命を顧みず、人の救を望まず、別念を生せず、肯へて暫しせず、往前直奔して奔得出せば、是れ好手なるべし。

①工夫。工巧士夫の義にて、も
と職工の細工をする手間を云
ふなり、てま、ひまと譯す。
②無常殺鬼。生死無常の大鬼。
③敲門瓦子。手段方便のこと。
④憊麼。そんな、こんなといふ
如き。

工夫を做すには、貴ぶらくは疑情を起すに在り。何をか疑情と謂ふや、生何れより來るを知らざれば、來處を疑はざることを得ず、死何くに去ると知らざれば、去處を疑はざることを得ざるが如きなり。生死の關 竅破せざる時は、則ち疑情頓に發して、眉睫上に結在して、放すれども亦下らず、趣へども亦去らず、忽朝疑團を撲破せば、生死の二字、是れ甚麼の閑家具ぞ。噫、古德云く、「大疑は大悟し、小疑は小悟す、疑はざれば悟らす」と。工夫を做すには、個の死の字を把りて、額頭上に貼在して、血肉身心を將て死し去るが如くと一般にして、祇だ究明を要する底の這の一念子、現前することあらしめよ。這の一念子、天に倚る長劍の如し、其の鋒に觸るるが若き者、了に得べからず、若し滯を洵し、鈍を磨するときは、則ち 劍去つて久し。

工夫を做すには、最も靜境に耽着することを怕る。人をして枯寂に困じて覺えず知らざらしむ。動境をば人厭へども、靜境をば多く厭ふことを生せず。良に以れば、行人一向、喧鬧の場に處す、一たび靜境と相應すれば、飴を食ひ蜜を食ふが如し。人倦むこと久しければ、睡を喜ぶが如く、安ぞ自ら知ることを得んや。

① 天に倚る長劍。祖庭事苑四十六葉に出づ、宋玉が大言賦に曰く、長劍倚天外。
② 劍去つて久し。呂子の察今の篇に曰く、楚人江を渉るものあり、其の劍、舟中より水におつ、遽かに其舟を鑿みて曰く、是れ吾が劍の從つておつるところなりと、舟止つて其の鑿むところのものに従つて、水に入つて之を求む、舟は已に往く、而して劍は行かず、劍を求むること此くの若し、亦惑はずや。

外道、身心をして斷滅し化して、頑石と爲らしむるも、亦靜境に従つて入る。良に以れば、歳久く月深く、枯にして又枯に、寂にして又寂ならば、無知に墮して、木石と何ぞ異らん。吾人或は靜境に處せば、祇だ衣線下の一段の大事を、發明せんことを要して、靜境に在ることを知らずして、始めて得ん。大事の中に於ては、其の靜相を求むるに、了に得べからず、斯れを得たりと爲すなり。工夫を做すには、中正 勁挺にして、人情に近づかざらんことを要す。苟くも情に循つて應對するときは、則ち工夫做不上ならん。但做不上なるのみにあらず、日久しく月深きときは、則ち流俗に隨ふの阿師たらんこと疑なし。

工夫を做す人は、頭を擡げて天を見ず、頭を低れて地を見ず、山を看ても是れ山にあらず、水を見ても是れ水にあらず、行けども行くことを知らず、坐すれども坐することを知らず、千人萬人の中、一人あることを見ず、通身内外只だこれ一箇の疑團ならば、世界を攪渾すと謂つべし。疑團破せずんば誓つて心を休せざれ、此れ工夫の緊要爲り。何をか世界を 攪渾すと謂ふや。無量劫來本具の大理、沈々寂々として、未だ嘗て動着せず。要

① 頑石。印度數論派の外道、伽里羅なるもの、五通仙を得て、略數論を造り、その所論を久持せん爲に、自在天に乞ふて、長壽の方石となり、頻陀山の餘甘子林に在りしが、後、陳那菩薩この石に書して、彼の説を破るや、石亦碎けて、彼の外道の數論廢れたり。
② 衣線下の一段の大事。洞山偈に問ふ云云の古則虛堂錄十八則に見ゆ。
③ 勁挺。かたくただし。
④ 人情に近づかざらんこと。莊子の逍遙篇にも、太だ徑庭人情に近づかざることありと。
⑤ 世界を云云。疑情發得起の章の第二節の文の中にもこの語あり。
⑥ 攪渾。かきまはしうごかす。

は當人精神を抖擻し、天旋り地轉するに在り。自ら波翻り浪涌く一段の受用あり。
工夫を做すには、死して活を得ざることを恐れされ、只だ活して死を得ざることを恐れよ。果して疑情と屬結んで一處に在らば、動境は遺ることを待たずして自ら遣り、妄心は淨きことを待たずして自ら淨からん。六根門頭自然に虚豁々地ならば、點着せば即ち到り、呼着せば即ち應せん、何んぞ活せざることを愁へんや。

工夫做得上すること、^①千斤の擔子を挑ぐるが如くにして、放も亦下され、要緊的の失物を覓むるが如く相似て、若し覓不着ならば、誓つて心を休せされ。其の中但だ執を生じ、着を生じ、計を生すべからず、執は病と成り、着は魔と成り、計は外と成る。果して心を一にし意を一にして、失物を覓むるが如く相似たることを得ば、則ち三種 泮然として没交渉、^②心を生じ念を動すれば、即ち法體に乗くと。

工夫を做して、話頭を擧起する時は、歷々明々として、^③猫の鼠を捕ふるが如く相似たることを要す。古に黎奴を斬らすんば、誓つて休せじと謂ふ所なり。然らざるときは、則ち鬼窟裡に坐在して、昏々沈々として、一生を過ぎ了らば、何の益する所あらんや。
猫の鼠を捕ふるには、兩眼を睜開して、四脚 撐々たり。只だ鼠を拿へて、口に到りて始めて得ん

① 千斤の擔子。煩惱妄想を千斤の擔子といふなり。

② 泮然。散亂と同じ、とけちるなり。

③ 心を生じ云云。此の八字は法界觀と云ふ華嚴部の書の文なり。

④ 如猫捕鼠。黃龍心和尙の語にして、禪林類聚猫犬門に出づ。

⑤ 撐々。撐の俗字、ささへつく。

ことを要す。縦ひ鶏犬傍に在ることあれども、亦顧みるに暇あらず。參禪の者も亦復是くの如し、只だこれ憤然として、此の理を明らめんことを要す。縦ひ 八境、前に交錯すれども、亦顧みるに暇あらず。縦に別念あらば、但鼠のみに非ず、兼て猫兒を走却せん。

工夫を做すには、一日、一日の工夫を見んことを要す。若し因々循々たらば、百劫千生未だ了了の日子あらし。博山當時、一枝の香を挿んで、香を見了りて、便ち云く、「工夫前の如くにして、損益あることなし、一日幾枝の香を耶、一年若干計の香を耶。」又云く、「光景過ぎやすし、時人を待たず、大事いまだ明らめず、何れの日かこれ了せん。」と、此に由りて痛惜して、更に多く策勵を加ふ。

工夫を做すには、古人の公案上に在りて、卜度して妄に解釋を加ふべからず、縦ひ一々領略し得過すとも、自己と没交渉、殊に知らず、古人一語一言、大火聚の如くにして、之に近づくことを得ず、之に觸るゝことを得ず、何ぞ況んや、其の中に坐臥せんをや。更に其の間に於て、大を分ち小を分ち、上を論じ下を論せば、喪身失命せざる者は、幾ど希なり。

此の事は教乗と合はず、故に久しく大乘の業を脩習する者も、不知不識なり。何ぞ況んや、聲聞緣覺 諸の小乗をや。三賢十聖、豈に教に通せざらんや。此の一事を説けば、三乘膽戦れ、十地魂驚く。等覺の菩薩 法を説くに、雲

⑥ 説法如雨。これもなにかせんは佛は見性羅殿を隔つるが如しと呵し給ふ。

の如く雨の如くにして、不可思議の衆生を度して、無生法忍に入るすら、尚ほ喚んで所知愚となし、道と全く乖くとす、又何ぞ況や、其の餘をや。蓋し此の事は凡夫地より、頓に佛體に同ず、人信じ難き所なり。信する者は器にして、信せざるものは器に非ず。諸の行人、斯の宗乘に入らんと欲する者は、悉く信より入る。信の一字に淺あり深あり、邪あり正あり、辯せずんばあるべからず。淺といふは凡そ法門に入りては、誰か信せずと云はん、但だ法門を信じて、自心を信するに非ざるなり。深といふは諸の大乗の菩薩、尚ほ信を具せず、華嚴の疏に云ふが如き、法を説くことを能くする者あり、法を聴く所の衆ありと見る、尚ほ未だ信門に入らずと。即心即佛と云ふが如き、誰か信せずと云はん、汝は是れ佛なりやと問ふに及ばず、則ち支梧排遣し、承當不下なり。法華に、思を盡し共に度量すれども、佛智を測ること能はずと云へり。何の以ぞや、盡思度量の心あれば、蓋し信具せざる耳。邪正といふは、自心即佛を正信と名づけ、心外に法を取るを邪信と名づく。即佛なれども究明を要し、自心なれども親履實踐して、不疑の地に到るを始めて正信と名づけ。顛頂、儻侗、猜三枚の如く相似て、但だ心即佛と云ふて、實に自心を識らざるを即ち邪信と名づく。古人は、桃を摘みて便ち定し去る、地を鋤いて即ち定し去る、作

- ① 無生忍。俗に云ふ、ふじみ、地獄の因縁をまねかるゝ方便。
- ② 所知愚。所知の境に於て極めて微細にして著する愚。
- ③ 華嚴疏。華嚴經の疏、疏とは、注釋することなり。
- ④ 法華に云云。方便品に出づ。
- ⑤ 顛頂。大きなつら、馬鹿にするといふ意に用ふ。
- ⑥ 儻侗。まつすぐ。
- ⑦ 猜三枚。猜疑の深甚なることにて、猜枚は尙、猜拳といふが如し。

務の時にも亦定す。豈にこれ坐すること久しうして退捺し、一心をして起らざらしめて、然して後に定と爲んや。若し此くの如くなるをば、即ち邪定と名づく、禪者の正意に非ず。

六祖云く、那伽常に定に在り、定ならざる時あることなしと。須らく本體を徹見すべし、方に此の定と相應せん。釋迦老子、兜率を下り皇宮に降り、雪山に入りて明星を觀、幻衆を開するも、未だ此の定を出でず。然らざるときは則ち動境に漂溺せられん、孰れか名づけて定と爲ん。

動境の中に起處を求むるに、不可得なり、靜境の中にも亦起處を求むるに、不可得なり。動靜既に起處なし、何を將てか境と爲んや。此の意を會得せば、總に是れ一箇の定體、充塞彌互して餘蘊なけん。

工夫を做すには、世法に沾着することを得ざれ。佛法の中すら、尙ほ一點も也た得ず、何ぞ況んや世法をや。若し眞正の話頭現前せば、氷を履むも寒を見ず、火を踏むも熱を見ず、荆棘林中に横身直過して掛礙あることを見ずして、始めて世法の中に在つて、横行直撞すべし。然ら

- ① 摘桃云云。鳥巨儀受禪師の故事、五燈會元八に出づ。
- ② 唐山の德嚴禪師に謁し、因に別染す。嘗て桃を摘ましむ、旬を浹つて歸らず、往いて尋ねれば師桃をよちつて石に倚り、泊然として定に在るを見る。嚴、指を鳴して之を出す。
- ③ 動地云云。圓頭などの作務。
- ④ 作務。禪家には汲水運薪、みな外間に於てする雜務を作務と云ふ。
- ⑤ 六祖云く。六祖壇經の機緣の篇の偈の意をとる。
- ⑥ 那伽。秦には龍と譯す、世間の有愛をば皆遠ざけ、更らに緊縛をば解脱し、諸漏をば已に盡すを龍といふ。
- ⑦ 兜率。三十三にて六欲天の第四重天なり。
- ⑧ 雪山。印度のヒマラヤ山。
- ⑨ 漂溺。さまよふ。
- ⑩ 充塞彌互。一ばいにゆきわたる事。

されば盡く境縁に轉じ將ち去られん。工夫、成一片ならんことを得んと欲すとも、驢年にも也た、未だ夢にだも見ざることを在らん。

工夫を做す人は、文を尋ね句を逐ひ、言を記し語を記すべからず。但に益なきのみにあらず、工夫の與に障礙を作して、眞實の工夫、返つて縁慮と成る。⑤心行處絶を得んと欲するも、豈に得べけんや。

工夫を做すには、最も比量することを怕る、心を將て湊泊すれば、道と轉た遠く、做して彌勒の下生に到り去るとも、没交渉なることを管取せん。若しこれ疑情頓に發するの漢子ならば、虚空に逼塞して、虚空の名字あることを知らず、銀山鐵壁の中に坐在するが如くにして、祇だ個の活路を得んことを要す。若しこの活路を得ずんば如何んが安穩を得去らん。但だ恁麼に做し去つて、時節到來せば、自ら個の倒斷あらん。

近時、⑥等の邪師あり、學者をして工夫上に在らざらしむ。又云く、「古人、未だ嘗て工夫を做さず」と。此の語最も毒なり、後生を迷悞す。地獄に入ることを箭を射るが如くならん。

⑤ 大義禪師の坐禪の銘に云く、「一切に參することを須ひず、と道ふことを信すること莫れ。古聖の 孜

① 沾着。添益なり、又需に作るは非なり。

② 話頭。即今所參の古則公案。

③ 荆棘林。修行地の困難を形容するに用ゐる語也。

④ 境縁。幻身の境遇、因縁、といふの略なり。

⑤ 心行處絶。心も身もなきところをいふ。

⑥ 彌勒下生。龍華三會の曉、五十六億七千萬歳の後、彌勒下生して度世すと、今はただ遠くして遠きことを云ふ。

⑦ 銀山鐵壁。孤峻にして、よりつけぬところに譬ふ。

⑧ 等の。同じやうな。

⑨ 大義禪師坐禪銘。編門警訓上卷二十二葉に出づ。

⑩ 孜孜。つとめつとむ。

孜たるを指南と爲よ。然も舊閑田地に闊くと雖も、一度贏ち來ること得るや也た未だしや」と。若し參究を須ひすして、便ち理を得と云はゞ、此れ是れ天生の彌勒、自然の釋迦なり、此の輩を名づけて、可憐憫の者と爲す。蓋し自己曾て參究せず、或は古人一問一答に、便ち領悟し去るを見て、遂に識情を將て解し將ち去つて、便ち人を誑妄す。或は一場の熱病を得れば、叫苦天に連る、生平解する目的、用不着なり。或は臨命終の時に到りて、②螻蛄の湯鍋に入るが如くにして、手忙はしく脚亂る、之を悔ゆとも何んぞ及ばん。

① 黃檗禪師云く、「塵勞迴かに脱す、事常に非ず、緊く繩頭を把つて、一場を做す。是の一翻寒、骨に徹するにあらずんば、争でか得ん、梅花鼻を醜つて香しきことを」と、此の語最も親切なり。若し此の偈を將て時々警策せば、工夫自然に做得上すること、百里の程途に一步を行すれば、則ち一步を少くが如くならん。行かすして祇だ這裏に住せば、縦ひ郷里の事業を説き得て、了々明々なるも、③終に家に到らずんば、當に甚麼邊の事をか得べき。

工夫を做すに、最も要緊なるは、是れ個の切の字なり。切の字最も力あり、切ならざる時は則ち懈怠生ず、懈怠生ずるときは則ち放逸縱意、至らざる所なし。若し用心真切ならば、放逸懈怠何に由りてか生ずることを得ん。當に切の一字を知るべし、④古人の田地に、到らざることを愁へざれ、生

② 螻蛄。かしの類なり、この螻蛄云の句は、雲門の語にもあり、會元十五に見ゆ。

③ 黃檗禪師。黃檗の此語は、編門警訓下の二十三葉に出づ。

④ 終不到家。この意は、實地に見性成佛せずば、了々明々に説き得るも、一場の噂にして、遂に唯の說話に過ぎずとの義なり。

死の心、破せざることを愁へざれ。此の切の字を捨て、別に佛法を求めば、皆是れ癡狂外邊に走るなり。豈に做工夫を以て、日を同じうして語るべけんや。

切の一字、豈に但だ過を離るのみならんや、當下に善惡無記の三性を超ゆ。一句の話頭、用心甚だ切なれば則ち善を思はず、用心甚だ切なれば則ち惡を思はず、用心甚だ切なれば則ち無記に落ちず。話頭切なれば掉擧なし、話頭切なれば昏沈なし、話頭現前すれば則ち無記に落ちず。切の一字、是れ最も親切の句なり。用心親切なるときは、則ち間隙なし、故に魔入ること能はず。用心親切にして、有無等を計度することを生ぜざれば、則ち外道に落ちず。

工夫を做す人、行いて行くことを知らず、坐して坐することを知らざるを、話頭現前と謂ふ。疑情破せざれば、尙ほ身心あることを知らず、何ぞ況んや行坐をや。

工夫を做すには、最も思惟して、詩を做り偈を做り、文賦等を做ることを怕る。詩偈成るれば則ち詩僧と名づけ、文賦工なれば則ち文字僧と稱し、

參禪とは没交渉なり。凡そ逆順の境縁、人念を動する處に遇着せば、便ち當に覺破して話頭を提起して、境縁に隨つて轉せずして、始めて得べし。或人云く、「不打緊」と、這の三箇の字、最もこれ人を悞まる、學者、審かにせずんばあるべからず。

工夫を做す人、多く空に落つることを怕る。話頭現前せば、那んぞ空を得去らん、只だ此の空に落つることを怕る、的、便ち空に去らず。何ぞ況んや、話頭現前せんをや。

工夫を做すに、疑情破せずんば、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如くせよ、毫釐も失念せば、則ち喪身失命せん。疑情破せざるときは、則ち大理明めざるが爲に、一口の氣來らずんば、又これ一生、中陰に牽引せられて、未だ業識に隨ひ去つて、頭を改め面を換へて、不覺不知なることを免れず。此れに由れば、則ち疑上に更に個の疑を添へて、話頭を提起し、明めずんば、決定明めんことを要し、破せずんば決定破せんことを要せよ。譬へば賊を捉ふるが如し、須らくこれ賊を見て初めて得べし。

工夫を做すには、心を將て悟を待つことを得ざれ。人の路を行くが如く、路上に住して、家に到ることを待たば、終に家に到らじ、只だ須らく行いて家に到るべし。若し心を將て悟を待たば、終に悟らじ、只だ須らく逼拶して悟らしむべし。若し大悟せん時は、蓮花の忽ち開くが如く、大夢の忽ち覺むるが

● 古人の田地。古聖古仙、すなはち古への高僧方の修行せられた本色の悟道。

● 皆是癡狂云云。諸公十二時の歌の文にあり、諸祖偈頌上巻に出づ。

● 善惡無記の三性。法に順ふな善といひ、之に違ふな惡といひ、非善非惡を無記といひ、一切萬法はこの三つを出でず。

● 無記。善惡二性はその果を記別し得れど、非善非惡はそのいづれなるか記別し得ざるが故に名づく。

● 掉擧昏沈。これは隨煩惱二十の中之二種なり、百法明門論の釋に出づ。

● 外道。佛教の外の哲學派を外道と云ふ、印度の波羅門を始め九十餘の數派あり。

● 話頭現前。公案を會得して見性するをいふ。

● 逆順の境縁。有常無常の世間のありさま。

● 不打緊。背緊を打せざることを。深淵に云ふは、論語の泰伯篇に出づ、懼れ恐るゝ貌。

● 業識。人は人の罪業、畜生は畜生の罪業の識心あり、是を業識といふ。

如し。良に以れば、夢覺むることを待たざれども、睡熟する時は自ら覺め、華開くことを待たざれども、時節到りぬれば自ら開く。悟、悟るを待たざれども、因縁會合する時は自ら悟る。余云く、因縁會合の時は、貴きこと話頭真切逼拶して悟らしむるに在り、悟を待つに非ざるをや。又悟る時は雲を披いて天を見て、^①廓落として依する所なきが如し。天旋り地轉するも、又これ一翻の境界なり。工夫を做すには、緊を要し正を要し、綿密を要し、融豁を要す。何をか緊と謂ふや。人の命は呼吸に在り、大事未だ明めざるに、一口の氣來らすんば前路茫茫として、未だ何くに往くかを知らざれば、緊ならざることを得ず。古徳云く、「麻繩水に着くが如し、一步は一步を緊にす」と。何をか正と謂ふや。學人須らく擇法の眼を具すべし、^②三千七百の祖師、大いに様子あり、若し毫釐も差あれば、則ち邪徑に入る。經に云く、「唯だ此の一事實なり、餘の二は則ち眞に非す」と。何をか綿密と謂ふや。眉毛と虚空と厮結んで、針筒入らず、水洒げども濕はず、毫釐の間隙あることを容さず、若し毫釐も間隙あれば、則ち魔境、隙に乗じて入る。^③古徳云く、「一時も在らざれば、死人に如同す」と。何をか融豁と謂ふや。^④世界闊きこと一丈なれば、則ち古境も闊きこと一丈、古境闊きこと一丈なれば、則ち火爐も闊きこと一丈と。決して拘執して一處に住して、死蛇頭を捉定せざれ。亦緊がれて兩頭に墜在して、

①廓落。廓は廣やかなる意、廓落はかりりと晴れたるなり。
②三千七百の祖師。支那にて云ふ多くの祖師方、公案の数も三千七百則と云ふ、大數をいひしものなり。
③古徳云。五燈會元五の雲巖の章、又從容錄三則にも出づ。
④世界闊。五燈會元七、玄沙の章に出づ。唯峰曰く云云。

⑤滂々。蕩々たらざれ。古徳云く、「圓かなること太虚に同じく、欠くることもなく、餘ることもなし」と。眞に融豁の處に到らば、則ち内は身心あることを見ず、外は世界あることを見ずして、初めて箇の入頭を得ん。

緊にして正ならざるときは、則ち枉げて工を用ふ。正にして緊ならざるときは、則ち入ること能はず。既に入つては、^①綿密を^②須要して始めて相應を得、既に相應しては、融豁を須要して方に化境と爲す。工夫を做すには、一絲毫の別念を得ず、行住坐臥^③單々に只だ本參の話を提起し、疑情を發起し、憤然として箇の下落を討ねんことを要せよ。若し絲毫の別念あらば、古に雜毒、心に入ると謂ふ所なり、豈に但だ身命を傷るのみならん、此れ^④慧命を傷るなり、學者謹ますんばあるべからず。

余云く、別念とは但だ^⑤世間法のみならず、究心を除くの外は、佛法の中の一切の好事をも、悉く別念と名づく。又豈に但だ佛法の中の事のみならんや、心體の上に於いて、之を取し之を捨し、之を執し之を化するも、悉く別念なり。工夫を做す人、多く^⑥做不上と云ふ。即ち此做不上、便ち做し去るなり。人の路を識らざるが如き、便

①滂々。ひろびろたる形容。
②蕩蕩。たひらかなる貌、共に證道歌に出づ。
③綿密。如法にして、わけのない行持。
④須要。肝心なる要點。
⑤單單。一途に、専心といふこと。
⑥慧命。本具の法性を持続せしむる智慧と云ふことにて、禪の命脈を云ふ、ことに、ここにては、この意味に用ゆ。
⑦世間法。世のあらゆる妄想執着。
⑧做不上。不可能などいふ語と同義に用ゆ。

ち好し、路を尋ぬるに、路を尋着せずと云ふて、便ち休すべからざるをや。路を尋着するの如きは、貴きと行いて直に家に至りて、乃ち可なるに在る爾。路上に、站在することを得され、行かすんば終に家に到るの日子なけん。工夫を做すに、心を用ふべきこと無き處、萬仞懸崖の處、水窮り山盡く處、羅紋、結角の處に做到せば、老鼠牛角に入りて、自ら倒斷あるが如くならん。

工夫を做すに、最も怕るゝ的は、一箇の伶俐の心なり。伶俐の心、之を樂忌と爲す。些毫を犯着せば、眞樂現前すと雖も救ふこと能はざるのみ。若し眞に是れ箇の參禪の漢ならば、眼盲の如く、耳聾の如くにして、心念纒かに起る時は、銀山、鐵壁に撞着するが如くに相似ん。此くの如くなるときは、則ち工夫始めて相應を得ん耳。

工夫做し得て眞切ならば、身心と器界とを將て、煉り得て鐵櫃子の如くに相似ん。只だ渠が爆得斷じ卒得折するを待つて、更に撮得聚して始めて得んことを要す。

工夫を做すには、錯ることを怕れず、只だ非を知らざることを怕る。縦

- ① 站在。坐して動かざるを站といふ、又久立のこと。
- ② 羅紋以下、明招謙禪師の偈中の句也、本文に紋を文に作る。
- ③ 結角。あげまき。
- ④ 倒斷。さかしまにきることにて逆定のこと、技倆つきて、しかたなしの意。
- ⑤ 伶俐。かしこさうな、又はさかしい。すぐれてよくきがつく人の意。
- ⑥ 銀山。銀山鐵壁とは言語の孤危險なる形容。
- ⑦ 鐵壁。鐵にて造りたる城壁。
- ⑧ 器界。空、風、火、水、地の五蘊等の諸習氣。
- ⑨ 鐵櫃子。てつのまるがせ、又は、金櫃の穴の意にもとる。
- ⑩ 爆得斷、卒得折。利根の者は返りて利根の所障を被りて、にはかに破するを得すと大惠禪師は仰せられき、大惠の書に出づ。

ひ然も行ふて錯る處に在るとも、若し肯へて一念非なることを知らば、便ち是れ成佛作祖底の基本にして、出生死底の要路、魔網を破る底の利器なり。釋迦大師、外道の法に於て一一證過了たまへり、祇だ是れ窠臼裏に坐在せず、非を知つて便ち捨つといふ、四個の字を將つて凡夫より只だ大聖の地位に到りたまへり。此の意豈に但だ出世の法のみならんや、世法の中に在りても、失念の處あるに、只だ個の非を知つて便ち捨つといふを消せば、便ち一個の淨白底の好人と做り得ん。

若し錯處を抱定して、是と爲て肯へて非を知らざれば、縦ひ是れ活佛現前すとも、他を救ふことを得じ。

工夫を做すには、喧を避け寂に向ひ、目を瞑ち眼を合せ、鬼窟裏に坐在して、活計を作すべからず。古に黒山下に坐し、死水に浸すと謂ふ所なり。甚麼邊の事を濟し得るや、只だ須らく境縁の上になつて、做し得去つて、始めて是れ得力の處なるべし。一句の話頭、眉睫上に頓在して、行裏坐裏、着衣喫飯裏、迎賓待客裏、祇だ這の一句の話頭の落處を明めんことを要せよ。一朝洗面の時に鼻孔に摸着せば、原來ただ近うして、便ち箇の省力を得ん。

- ① 成佛作祖底。佛となり、祖師となるの事。
- ② 證過。一に證明して、あやまちな正したまへり。
- ③ 窠臼裏。あなの中や臼の中といふことにて、煩惱の窠臼に在るの意。
- ④ 知れ非便捨。實これ何物ぞ、何物ぞはこれ實なれば、これをすてる事、虚堂錄に出づ。
- ⑤ 抱定。かかへきめるにて、すなはち、これとさめてしまふこと。
- ⑥ 瞑目。目を閉づるなり。
- ⑦ 古に黒山云云。大義禪師の坐禪語に出づ、緇門警訓上二十二葉にあり。
- ⑧ 摸着。さぐりあつる事。
- ⑨ 省力。見性といふに同じ。

工夫を做すには、最も識神を認めて、佛事と爲すことを怖る。或は眉を揚げ目を瞬し、頭を揺し
腦を轉す。將に謂へり、多少の奇特ありと。若し識神を把つて事に當てば、外道の奴と做ることも也
た得じ。

工夫を做すには、正に心行處滅せんことを要す。切に心を將つて湊泊し、問答機縁等を思惟せよ。

洞山云く、「妙を體すれば宗を失し、機、終始に味し」と。便ち共に語る
に堪へず、若し大理徹する時は、一一の三昧、自心の中より流出す、思惟
造作は何ぞ管に霄壤のみならん。

工夫は、做不上を恐れざれ、做不上なるを做上せんと要す、便ちこれ工
夫なり。

古徳云く、「無門は解脱の門、無意は道人の意」と。貴きこと箇
の入處を體悉するに在り。若し做不上なりといふて便ち退鼓を打せば、

縦ひ百却千生にも、其れ爾を奈何んせん。

疑情發得起して、放不下ならん、便ち是れ上路なり。生死の二字を將て、額頭上に貼在して、猛虎
の趕ひ來るが如くせよ。若し直に走りて、家に到らずんば、必ず喪身失命せん、猶ほ脚を住むべけ
んや。

工夫を做すには、祇だ一則の公案上に在つて用心せよ、一切の公案上に解會を作すべからず。縦ひ

- ① 識神。意識精神の略。
- ② 洞山云。三種の滲漏中の語、滲漏の文なり。人天眼目の曹洞篇に出づ、滲漏は煩惱なり。
- ③ 古徳云。支沙大師の語なり、下の文は、その古徳の垂示を評する警語の中に見ゆ。
- ④ 退鼓。退軍の合圖に打つ所の太鼓。

能く解得すとも、終にこれ解にして悟に非ざるをや。法華經に云く、「是の法は思量分別の能く到る
所に非ず」と。圓覺に云く、「思惟の心を以て、如來の圓覺の境界を測度せば、燈火を將て須彌山を
熱かんに、終に得ること能はざるが如し」と。洞山云く、「心意を將て玄宗を學ばんと擬すれば、
大いに西に行いて、却りて東に向ふに似たり」と。大凡公案を穿鑿する
者、須らく皮下に血ありて、慚愧を識つて始めて得べし。

工夫を做すには、話頭を提起して、祇だ是れ疑情打不破なることを知ら
ば、必竟第二念なうして、決して經書の上に向つて、證を引いて識情を牽
動すべからず。識情一たび動くときは、則ち妄念紛馳す。言語道斷、心行
處滅を得んと欲すとも、安んぞ得べけんや。

道は須臾も離る可からず、離るべきは道に非ず。工夫は須臾も間斷す
べからず、間斷すべきは工夫に非ず。眞正の參究の人は、火の眉毛上を燒
くが如く、又頭燃を救ふが如し。何んぞ他事の爲に念を動するに暇あら
んや。古徳云く、「一人萬人を敵するが如し、觀面那んぞ眨眼して看
ことを容れん」と。此の語、做工夫の最要、知らずんばあるべからず。

工夫を做すには、自己打未徹ならば、祇だ自己の事を辨すべく、人に教ふべからず。人未だ京城に

- ① 法華經に云く。方便品に見ゆ。
- ② 圓覺。圓覺經。
- ③ 洞山云。五燈會元、六の九峰の章にこの句見ゆ。
- ④ 玄宗。支旨、宗風、すなはち禪宗の極意。
- ⑤ 道は云云。この一句は中庸の文なり。
- ⑥ 頭燃を救ふが如し。寶積經の第五十二卷にも出づ。かうべの、やけるのを、すくふが如し。
- ⑦ 古徳云く。未だ所出を見ず、四十二章經にも出づ。
- ⑧ 觀面。顔と顔とにて、目前の意也。

到らずして、便ち他人の爲に京城の中の事を説くが如きは、但だに人を瞞するのみに非ず、亦自らも瞞するのみ。

工夫を做すには、曉夕敢て自ら怠らざるべし。慈明大師の如き、夜將に睡らんと欲すれば、^① 錐を引いて之を刺すことを用ふ。又云く、「古人道の爲に食はず、寝ねず、余又何人ぞや」と。

古人、一つの石灰の圈を畫して、道理明めざれば、脚步圈内を出でず、今人、意を縦にし情を肆にし、^② 遊蕩不羈にして、之を活潑と謂ふ、大に笑ふべき耳。

工夫或は輕安を得、或は省發ありとも、便ち悟と爲すべからず。博山當時、^③ 船子和尙、沒踪跡の句を見る。一日因に傳燈を閱す。趙州僧に囑して、三千里外人に逢ふて、始めて得んと云ふを見て、覺えず布袋を打失して、千斤の擔子を放下するが如く、自ら大悟すと謂へり。寶方に見ゆるに速んで、^④ 方木圓孔に返するが如く、始めて慚愧を具す。若し悟後、大善知識に見えんば、縦ひ安逸を得るとも、終にこれ未了ならん。
寶方、余を勉むるの偈に云く、「空拶空今功莫大。有追有也德猶微。」

① 引錐刺之。戰國策に秦の惠文君の驚に曰く、蘇秦書を讀んで睡らんと欲す、錐を引いて自ら其の股に刺す、血流れて足に至る。

② 遊蕩不羈。遊蕩は、度外にあそびすこと、不羈は束縛せられぬこと、のらくらもの。

③ 活潑。いきほひありて、いきいきしたること。

④ 船子和尙。諺語、藥山靈に副ぐ。

⑤ 傳燈。傳燈の第十卷にあり、趙州の傳には載せず、五燈會元の四の趙州の章にあり。

⑥ 方木返圓孔。返とははるなり、四角なる木を、圓いあなにとほすにて、馬鹿な事なり。

⑦ 遊業安生理。未だ之を考へず、楞嚴義疏一の上卷に長水の曰く、善現は貧を捨てて富に従ひ、遊業は富を捨てて貧に

誘他^① 遊業安生理。得ニ便宜一處失ニ便宜。と、此はこれ百尺の竿頭に歩を進むるの句なり、禪僧の輩、密かにせずんばあるべからず。余嘗て學者に謂ふて云く、「我れ寶方の不肯の兩箇の字を得て、受用不盡なり」と。

工夫を做すには、道理の會を作すことを得ざれば、但だ硬々に參じ去りて、始めて疑情を發得起せよ。若し道理の會を作さば、祇だ是れ乾爆々底なり。豈に但だ自己の事に打不徹なるのみならんや、疑情に連ねて、亦發不起ならん。人の器中に盛る底は、是れ何物と云ふが如き、實に是れ彼が所指底の物にあらず。彼れ非を以て是と爲て、便ち疑を發すること能はず。又但だ疑を起さざるのみにあらず、即ち彼の物を以て此の物と爲し、此の物を以て彼の物と爲す。此くの如きの謬解、若し器を開いて親見一回せざるときは、則ち其の身を終るまで辨すべからず。

工夫を做すには、無事の會を作すべからず、但だ憤然として此の理を明めんことを要せよ。若し無事の會を作さば、一生祇だ是れ箇の無事の人にして、衣線下の一件の大事をば終に是れ了せず、人の失物を覓むるが如くに相似たり。若し覓着せば、始めて了せん。若し覓不着にして、便ち無事甲裏に置在して、覓意あること無くんば、縦ひ然く失物現前すとも、亦當面に錯過せん。蓋し物を覓むるの意

從ふと、乞食頭陀第一の遊業なれば、生理を安んずといふなるべしと。
① 百尺竿頭進歩。長沙云く、百尺の竿頭に坐する底の人、然も得入すと雖も未だ眞と爲す、百尺の竿頭須らく歩を進めて、十方世界是れ全身なるべしと、從容錄七十九則に見ゆ。

無き耳。

工夫を做すには、擊石火光の會を作すべからず。若し光影門頭に警有警無せば、甚の事を濟し得んや。親履實踐を得んと要せば、親見一回して始めて得ん。若し眞々に意を得ば、青天白日の下に、親生の父母を見るが如く相似ん。世間の樂事、更に過ぐる者なけん。

工夫を做すには、意根下に向つて卜度することを得ざれ。思惟卜度は、工夫をして成片を得ず、疑情を發得起すること能はざらしむ。思惟卜度の四箇の字、正信を障へ正行を障へ、兼ねて道眼を障ふ。學者彼に於て生冤家の如く相似たらば、乃ち可なる耳。

工夫を做すには、舉起の處に向つて承當することを得ざれ。若し承當せば、正に瞞預備伺と謂ふ所なり、參究と便ち相應せず。只だ須らく疑情を發起して、承當なき處に打教徹し、亦承當なき者も、空中の樓閣の七通八達なるが如くなるべし。然らずんば賊を認めて子と爲し、奴を認めて郎と作さん。古徳云く、「驢鞍橋を將て、喚んで阿爺の下領と作すこと莫れ」と、斯の謂なり。工夫を做すには、人の説破を求むることを得ざれ。若し説破せば、終に是れ別人底にして、自己と

①警有無。警は目を過すなり、ちらと見るなり、有なみ、無なみて居てはの義。
②親見一回。大死一番見性せずば、親履實踐とはいへぬ。
③意根下。意識を以ては卜度し得ざる所也。
④思惟卜度。妄測臆測は、少しも功がない、眞の疑情は、放下着の所に在り。
⑤舉起の處。舉起は自分が云ひ出すなり、大惠の書、呂居仁に答ふる書にも出づ。
⑥驢鞍橋。谷隱の蘊禪師曰く、「莫認驢鞍橋作阿爺下領」と會元の第十一卷に見ゆ。
⑦阿爺。師匠、又はおやぢ。

相干ること没し。人の路を問うて、長安に到るが如き、但だ路を指すべし、更に長安の事を問ふべからず。彼れ一々長安の事を説明すとも、終にこれ彼れが見る底にして、路を問ふ者の親しく見るに非ざるをや。若し力め行はずして、便ち人の説破を求めば、亦復是くの如し。

工夫を做すには、祇だ是れ公案を念せざれ。念じ來り念じ去るとも、甚麼の交渉かあらん。念じて彌勒の下生の時に到るとも亦た没交渉、何んぞ阿彌陀佛を念せざる、更に利益あり。但だ必ず念せざらしむるにはあらず。妨げす一々話頭を舉起すること。無の字を看るが如きは、便ち無の上に就きて疑情を起し、柏樹子を看るが如きは、便ち柏樹子に就いて疑情を起し、一何れの處に歸すといふを看るが如きは、便ち一何れの處に歸すといふに就いて疑情を起す。疑情發得起せば、盡十方世界、是れ一箇の疑團にして、父母底の身心あることを知らず、通身これ個の疑團にして、十方世界あることを知らず、内に非ず外に非ず、滾じて一團と成らん。只だ彼れ桶箍自ら爆つるが如くなるを待つて、再び善知識に見え、口を開くことを待たざるに、則ち大事了畢して始めて掌を撫で大笑せん。公案を念せんことを回觀せば、大いに鸚鵡の語を學ぶに似ん、亦た何ぞ預らんや。工夫を做すには、須臾も正念を失すべからず。若し參究の一念を失し了らば、必ず異端に流入し

①無。趙州の無字の公案。
②柏樹子。同上の庭前柏樹子の公案。
③一歸。何處。萬法歸一の公案。
④滾。大水のながるること、混と同じ。
⑤桶箍。桶は箍ありてよく水を盛る、箍一度破れば、水一時に流出して殘すなきは、大悟して凡情の掃去せるに譬ふる也、即ち見性すること也。
⑥大事了畢。悟道を卒りしを云ふ。

て、忘々として返ざらん。人の淨坐するが如き、只だ澄々湛々^①、純清絶點を喜びて、佛事と爲す、此を喚んで正念を失して、澄湛の中に墮在すと作す。或は一個の講を能くし、譚を能くし、動を能くし、靜を能くするを認定して佛事と爲す、此を喚んで正念を失して、識神を認むと作す。或は妄心を將て遏捺し、妄心をして起らざらしむるを佛事と爲す、此を喚んで正念を失して、妄心を將て妄心を捺ふると作す。石の艸を壓すが如く、又芭蕉の葉を割ぐが如し。一重を割げば、又一重、終に丁底の日子なし。或は身心は虚空の如しと觀想して、念を起さずして墻壁の如くす、此を喚んで正念を失すと作す。玄沙云く、便ち心を凝し念を斂め、事を攝し空に歸せんと擬す、即ち是れ落空亡の外道、魂不散底の死人なりと。總じて之を言へば、皆正念を失するが故なり。

工夫を倣すに、疑情發得起せば、更に撲得破せんことを要せよ。若し撲不破の時は、當に正念を確實にし、大勇猛を發し、切中に更に個の切の字を加へて、始めて得べし。徑山云く、大丈夫の漢、決して此の一段の大事因縁を究竟せんと欲せば、一等に面皮を打破し、性燥に脊梁骨を堅起して、人情に順ふこと莫れ。自らの平昔の所疑の處を把つて、額頭上

① 異端。聖人の道にあらずして別に一端をなすもの。
 ② 忘念。無分別の義。
 ③ 澄澄湛湛。澄澄はすみきりたる水、湛々は水のふかくすみきるにたとふる。
 ④ 純清絶點。ただ安心愚痴さへなくば、よろしとすること。
 ⑤ 了底。をはりきる。
 ⑥ 玄沙云。下の文の古徳の垂示を評する警語の中に見ゆ。
 ⑦ 落空亡。空におちいるのみのが、正法なりと思惟する者。
 ⑧ 魂不散。成佛しかめる迷頑のもの。
 ⑨ 打破面皮。つらのかはを、うち割ぎて、ただ專心にとの意。
 ⑩ 燥。急ぐこと。

① 貼在して、常時一へに人の萬百貫の錢を欠いて、人に追ひ索め被るるとも、物の償ふべき無くして怕れを生じ、人に耻辱せらる。急なきに急を得、忙なきに忙を得、大なきに大を得る底に似たらば、一件の事、方に趣向の分あらん。

古徳の垂示を評する警語

趙州云く、三十年用心を雜へず、着衣喫飯是れ用心を雜ふるを除く。

評。心を用ひざるには非ず、用心を雜へざる耳。之を一處に置けば、事として辨せずといふこと無しと謂ふ所なり。

趙州云く、汝但だ理を究めよ、坐看すること三二十年にして、若し會せずんば、老僧が頭を截取し去れ。

評。趙州、甚ぞ死急を著くや。然も是くの如くなりとも雖も、歲月長へに個の三二十年、心を異にせざる者を討ぬるに、也た得難し。

趙州云く、老僧十八歳にして、便ち破家蕩産を解す。又云く、我れ當時、十二時辰に使はる、如今、十二時を使ひ得たり。

評。家産の上に在つて、活計を作せば、十二時辰に使はる。家産を破得する者は、便ち十二時を使

① 脊梁骨。脊髓骨なり、坐禪には是を直立さするを肝要となす也。
 ② 貼在。はりつけて。
 ③ 一件事。悟道の事。
 ④ 置之。一處。遺教經にも、之を一處に制すれば事として辨せずといふこと無しとあり。
 ⑤ 破家蕩産を解す。凡性情入して、凡情を蕩掃し、人間の慾望を破却すること。
 ⑥ 活計。(くらし)世帯、よわたり。

ひ得るなり。忽ち僧あり問ふ、「如何なるか是れ家産。」博山答へて曰く、「皮囊を卸却せば、即ち汝に向つて道はん。」

趙州云く、彌若し一生、叢林を離れず、不語なること五年十年すとも、人憊を喚んで啞漢と作すこと無けん。已後には佛も也た、彌を奈何んともせじ。

評。不語は即ち是れ用心を雜へざるなり。若し衣線下に向つて理を究めずんば、則ち太だ遠きこと在り。

天台の詔國師云く、假饒ひ答話揀辨、懸河の如くなるも、祇だ個の顛倒の知見を成し得ん。若し祇だ答話揀辨を貴ば、甚麼の難きことか有らん。但だ恐る、人に益なうして、翻つて ① 賺悞と成らんことを。

評。今時の人、一 ② 肚皮を學び得て、尋常問ひ來り問ひ去つて、佛法を將つて戯具と爲す。但益なきのみに非ず、多く罪過を成す。而今 ③ 閑言閑語して、以て宗乘に當つ。古人の說話を見て、面皮厚きこと多少ぞ。

國師云く、諸 ④ 上座、從前學する所、揀辨、問答、記持、道理を説くこと極めて多し。甚麼と爲て疑心息まざる、古人の方便を聞いて、特地に會せざることは、祇だ虛多く、實少きが爲なり。

- ① 卸却。ゆぎすてるなり、皮相の見たのぞけといふこと、一眞實のみとなる事。
- ② 天台の詔國師。德韶禪師は法眼文益に嗣ぐ、永明智覺の師也。
- ③ 賺悞。あやまり。
- ④ 肚皮。腹の皮にて、うはつらのみ。
- ⑤ 閑言閑語。閑人の贅言にて、眞實の法理に叶はざる言説。
- ⑥ 國師。詔國師を指す。
- ⑦ 上座。修行僧を云ふ。
- ⑧ 特地。ことさらにといふに同じ。

評。揀辨記持、皆 ① 緣慮に屬す。生死の根、斷せざれば、如何んが古人の意を會得せん。所以に云く、「微言心首に滯りて、返つて緣慮の場と爲る。實際目前に居つて、翻つて名相の境と爲す」と。

國師云く、上座、脚跟下より一時に ② 觀破して、是れ甚麼の道理ぞと看んには如かじ。多少の法門ありて、上座が與に疑を作さん。解を求めしむるも、始めて知る、從前所學底の事は、祇だ是れ生死の根源、 ③ 陰界裡の活計なることを。所以に ④ 古人道く、「見聞脱せざれば、水裡の月の如し」と。

評。見聞緣慮、誰人か有らざらん、大いに轉變すること有つて、始めて得んことを要す。若し工夫と相應せずして、 ⑤ 水晶宮裡より穿下し過し來らば、終に沒交渉。古徳云く、「知解心に入れば、油の麪に入るが如し」と。永く出期なけん、謹ますんばあるべからず。

紹巖禪師云く、諸仁者、今日國主請を致すことは、祇だ ⑥ 諸仁者心を明めんことを圖るのみ、此の外に別に道理なし。諸仁者還つて心を明むるや也た未しや。是れ語言譚笑の時、 ⑦ 凝然杜默の時、知識に參尋する時、 ⑧ 道伴 商畧の時、山を觀水を翫ぶ時、耳目對を絶する時、是れ汝が心ならざること莫きや否や。上の解する所の如きは、盡く魔魅の所着と爲す、

- ① 緣慮。所緣靜慮。
- ② 微言云々。華嚴義海百門序の文なり、五燈會元十法眼の章にも見ゆ。
- ③ 觀破。みやぶる、みつけるの意。
- ④ 陰界裡。死人の境界。
- ⑤ 古人道く。傳燈二十九卷に見ゆ、羅漢桂琛和尚の明道の頌なり。
- ⑥ 水晶宮。顧府に出づ。盧杞嘗つて、碧雲に騰上して、空闕樓臺を見るに、水晶を以つて柱橋をなす、是れ水晶宮也と天女言へり、從容錄第二十一則に「水晶宮裏出頭來」とあり。
- ⑦ 紹巖禪師。杭州の眞身寶塔寺の紹巖禪師は、法眼の法嗣也。

ば、喚んで造次の流と作す、則ち究竟の旨なけん。

評。切に此の参する底の語は、是れ甚麼の語ぞ、参する底の人は、是れ甚麼人ぞと究めんことを要す。若し此の語を究めず、此の参する底の人を識らざれば、是れを空しく過ぐと謂ふ、参學には非ず。

芭蕉云く、人の行く次で、忽ち前面は萬丈の深坑、背後は野火來り逼り、兩畔は是れ荆棘林なる

に遇ふが如くならんに、若し也た向前すれば、則ち坑壙に墮在す、若し也

た退後すれば、則ち野火身を焼く、轉側すれば則ち荆棘林に礙へらる、

與恁麼の時に當つて、作麼生か免れ得ん。若し也た免れ得ば、出身の路

あらん。若し免れ得ざれば、墮身の死漢ならん。

評。直に須らく危亡を顧みずして、始めて個の徹頭を得べし。稍擬議

を生ずるときは、則ち喪身失命す。芭蕉の此の語、最も工夫の緊要爲り。

學者多く知解を求めて、玄奥の窠臼裏に墮在して、這裏に向つて意を留め

ず、是れを空しく一生を過ぐと謂ふ。

①造次。わづかの間を云ふ。

②究竟。極意に達する。

③芭蕉。鄂州の芭蕉山の慧清禪師なり、五燈會元の九に傳あり、この語出づ。

④轉側。傍に轉する也。

⑤與恁麼の時。斯の如く苦しきとき。

⑥擬議。不審して、ゆきつまる。

國譯博山和尚參禪警語卷之上 終

國譯博山和尚參禪警語卷之下

雲門云く、一般の掠虚の漢あり、人の涎唾を食ひ、一堆一擔の骨董を記得して、到る處に驢唇馬嘴を馳騁して、我れ十轉五轉を問ふことを解すと誇る。饒ひ備、朝より問うて夜に到り、劫を論じて 恁麼なるも、還つて曾て夢にだも見んや。

評。雲門當時正に十の者の一二人を罵る而已、今時は紛々として皆是なり、何ぞ曾て衲衣下に向つて體究せん。設し或は片嚮の時もすれば、是れ昏沈ならざれば、便ち是れ散亂なり。蓋し一肚子の落案、吐不去、割不斷なるが爲なり。若しこれ個の伶俐的の漢ならば、纔かに恁麼に擧すを聞いて、大慚愧を具して始めて得ん。

雲門、衆に示して云く、諸兄弟、切に容易に時を過すこと莫れ、大いに須らく仔細にすべし。古人大いに葛藤相爲にする處あり、祇だ雪峰、盡大地是れ汝が自己と道ひ、夾山、百艸頭上に老僧を薦取し、鬧市裏に天子を識取せよと道ひ、洛浦一塵、纔かに起れば大地全く收る。一毛頭に獅子、身

①掠虚。日本で云ふ、うすのろめ、うすばかめなどの意也。

②擔。物を擔ふ棒なり。

③骨董。曲物のほこ。ここには人の言説を云ふ。

④恁麼。唐宋時代の俗語、如此と云ふこと、これは事物を肯定するに用ふ、俗に云ふ、こんな、そんななどに用ふ。

⑤肚子。腹の中、胸のうち。

⑥落案。物品を縛する繩にして、又緒案とも記す。

⑦葛藤。論議、すなはち公案などないふに用ゆ。

を全うす、と云ふが如き、總に是れ汝、把取して翻覆思量して看よ。日久しく歳深くば、自然に個の ①入處あらん。

評。此の三段の語、備を牽きて門に入り、備が肯へて入らんことを要す。然らずんば ②盡く 鬼窟裏に在つて、活計を作す。備若し門に入得せば、自然に ③怙々底にして、山河大地あることを見ず、自己あることを見ず。薦と不薦とは是れ兩頭の語なり。

雲門云く、光透脱せざれば、兩般の病あり、一切處明かならず、面前物ある是れなり。一切法空を透得するも、④隱々地に個の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脱せざるなり。又法身にも亦兩般の病あり、法身に到ることを得れども、法執忘せず、己身猶ほ存するが爲に、法身邊に坐在す、是れ一なり。直饒、法身を透得し去るも、放過せば即ち不可なり、仔細に點檢し將ち來らば、甚麼の氣息あらん、亦是れ病なり。

評。此の病は全く境量の上在つて、活計を作して、曾て坐斷せず、曾て透脱せず、曾て身を轉じ氣を吐くことを得ざるなり。這裏若し別に異念を生せば、則ち魔と成り、怪を作すに、分在ることあらん。

⑤玄沙云く、夫れ學般若の菩薩は、須らく大根器を具し、大智慧あつて始めて得べし。若し智慧あら

ば、即今便ち出脱し得去らん。

評。大根器の者は、一聞千悟して、⑥大總持を得るなり。個の出脱の字を説くも、早く是れ方便の辭なり。何を以ての故に、從來曾て繫縛せざるが故なり。

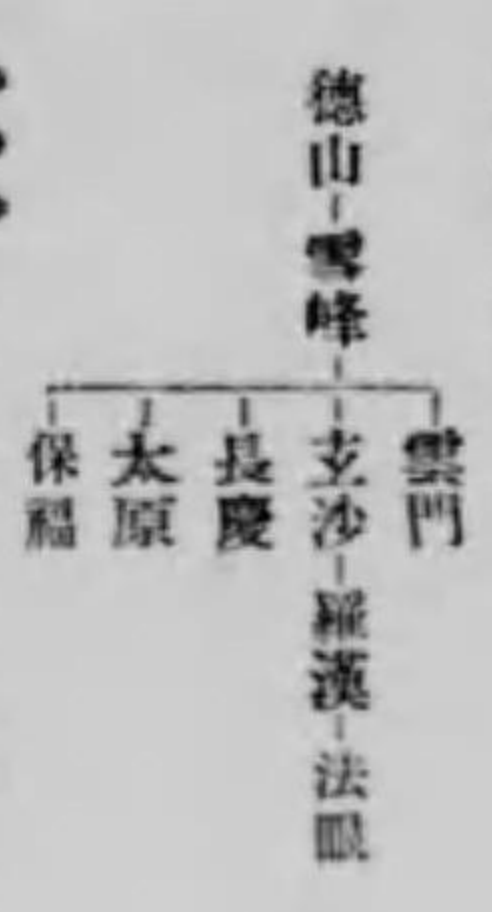
玄沙云く、若し是れ根機遲鈍ならば、直に須らく勤苦日夜して、疲れを忘れ、眠ることなく、食を失ふて、考妣を喪するが如く、相似たるべし。恁麼に急切にして、一生を盡し去り、更に人の ⑦荷挾を得て、骨に尅み實を究めば、構を得去り易きことを妨げず。且た況んや、如今誰か是れ學に堪任する底の人ぞ。

評。盡大地の人都べて堪任す、惟無知にして信根を具せざる者を除く。縦ひこれ釋迦佛、⑧放光動地すとも、其れ爾を奈何んせん。

玄沙云く、仁者祇だこれ言を記し語を記して、恰も陀羅尼を念するに似て相似たること莫れ、跣歩向前し來つて、口裏 ⑨哆々囁々なるも、人に把住し詰問着せらるれば、去處没し。便ち噉つて、和尚、我が爲に答話せずと道ふ、恁麼の學事、ただ苦なり、知るや。

- ① 洛浦。元安禪師といひ、藥山に嗣ぐ、青原下三世なり。
- ② 入處。悟りの境に入れること。
- ③ 鬼窟裏。死人の塚の穴。
- ④ 怙々底。しづかなること。
- ⑤ 山河。世界がどうの、自己がどうのと旨へど、凡て是れなものぞ。
- ⑥ 隱々地。微かにして分明ならぬこと。

⑦ 玄沙。師備といひ、雪峰に嗣ぐ。唐の名僧にして年三十にして出家す、初め漁夫たり、感通五年なりき。



- ⑧ 大總持。大人の境界といふこと。
- ⑨ 荷挾。助を得て擔ひ挟むこと也。
- ⑩ 放光動地。佛様が光明を放ち、又は大地震動すの力あるとも、大信根なきものは、如何とも仕方なき也。
- ⑪ 哆々囁々。子供の産聲。